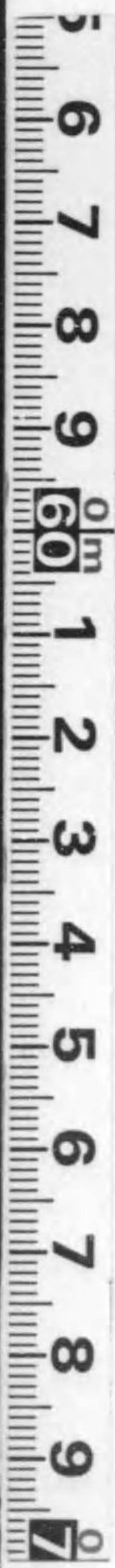


324

367



始





324-367



天

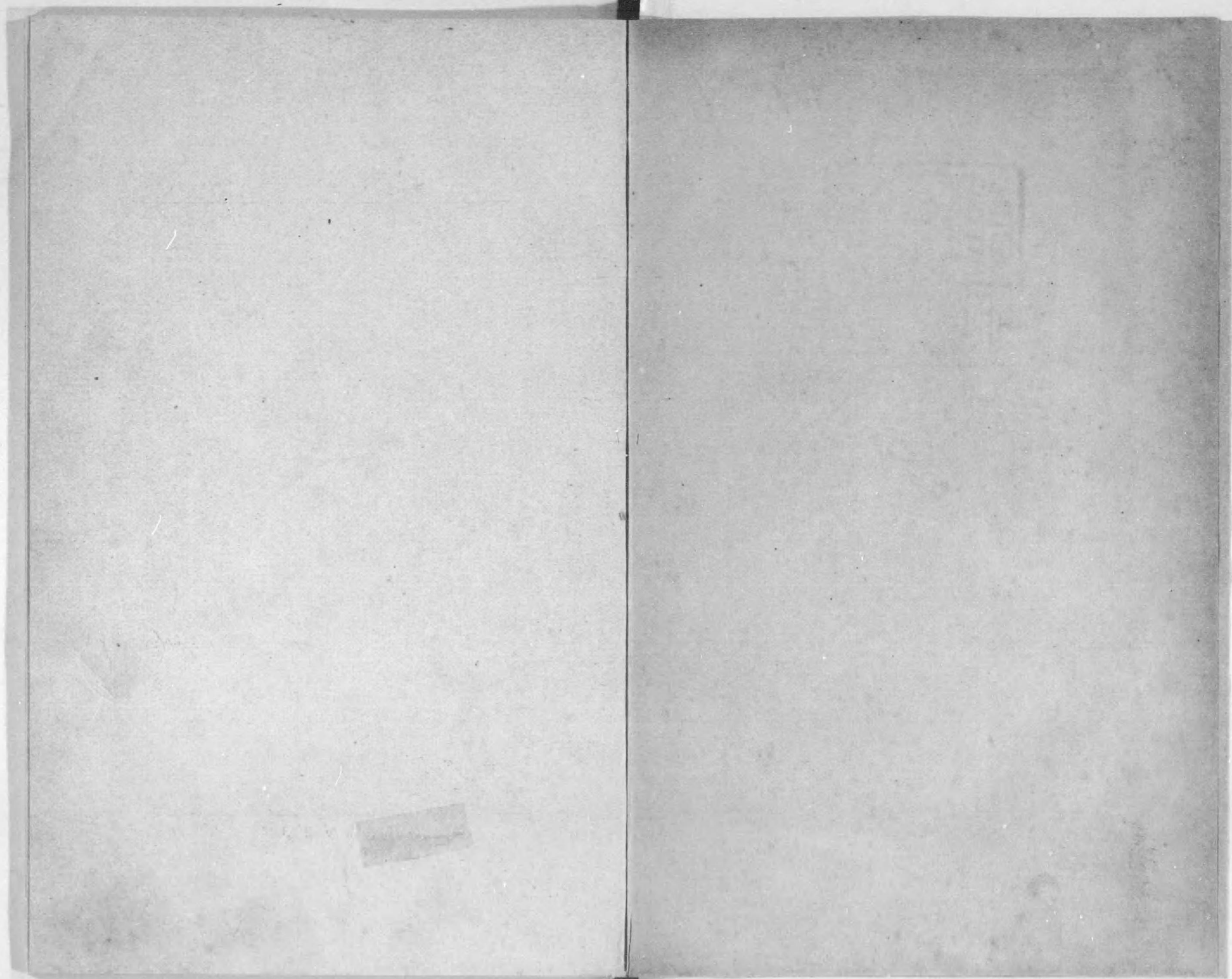
路

歷

程











飲酒者路を指示す

## 序

天路歷程を初めて日本に翻譯したのは、故佐藤喜峯氏といふ漢學者であつた。明治九年七一雜報に連載し、同十三年單行本として出版された。今その世に残存せるものを見るに、半紙へ木版で印刷したもので、故小川義綏氏の題字も、故中村正直氏の題詩まで巻頭を飾つてゐる。ジョン・バンヤンといふ名がジョン・バンヨンと讀んであるのも面白い。傳ふる所に據れば、これは支那譯から重譯したもので、天路歷程といふ書名も支那譯をその儘に使用したものだ云ふ。けれどもその譯文はなかく善く出来てゐる。會話の文を口語體にしたところなどは、後から出た譯書よりも進んでゐる感がある。それから書中の詩は漢譯をその儘挿入してあるが、原詩の意味がいかにも忠實に現はれてゐる。それに依つて見



ても、支那譯は甚だ善く出来てゐるものと思はれる。明治十三年頃に斯る立派な天路歷程の譯書が日本に出たのは、全く支那譯のお蔭であつた。

その次に世に出たのは、ホワイト氏の譯書である。これは明治十九年初めて出版された。馬琴風の文體で、あまりに翻譯し過ぎてゐる嫌がある。挿繪にナヨン鬚をつけた男なごが出て来るのは滑稽である。それから佐藤氏には漢詩が其儘入つてゐるが、これには詩の譯が一つもない。實際この書は重譯でないといふ外には、佐藤氏の譯に少しも優つた所がないのである。

明治卅七年には池亨吉氏の天路歷程前篇の譯書が世に出た。同四十一年十一月には同氏譯の續篇が出版された。これは前の二書に較べて、餘程原書を忠實に譯したものである。けれども其頃の一般の翻譯界といふものが今ほど進歩してゐなかつた。翻譯といふものはこれほどまで原文

を忠實に寫さなければならぬかといふやうな事は殆んど問題になつてゐなかつた。誤譯指摘といふやうな事も勿論なかつた。原文の一字一句を苟くもせずに、それが立派な日本文になるやうにといふやうな考は其頃の翻譯家の頭には浮ばなかつたと言つて可い。さういふ時代に出来た池氏の譯書にさういふ缺點のあるのは止むを得ない。殊に池氏は往時新體詩人であつた。善く泳ぐ者は溺るといはれてゐる。新體詩人であつた池氏には、あまり技巧のないバンヤンの詩を忠實に譯すだけの根氣がなかつたらしい。それ故三節のものを一節に改譯したり、それから一寸原意を採つて改作したりしてある。殊に續篇に於ては肝要な節がツマらぬといふ口實の許に抄畧したりしてある。今より十年前には譯者もそれで平氣な顔をしてゐることが出来たし、讀者もそれで満足することが出来たのである。余は決して在來の翻譯者の悪口を言ふのではない。日本



の一般翻譯界がいかにも幼稚なものであつたかをこれに依つて示さうとするのである。

今日日本の翻譯界は實に進歩した。論文の翻譯はまだ晦澁なものが多いやうであるが、小説の翻譯に至つては實に立派なものが澤山に出て來た。人名や地名が外國のものであるといふほかに、翻譯と創作との區別がつかぬほど上手になつた。これは日本の文章が長足に進歩したのこゝ、翻譯家の良心が鋭敏細緻になつたお蔭であらう。この點から觀ると、日本の基督教界は翻譯に於ても一般の社會から後れてゐるやうである。聖書改譯委員の手になつたマコ傳の翻譯などを見ても、原語には忠實かも知れぬが、現代の日本の文章として餘り上出來ではないやうに想はれる。まして、聖書改譯ほご金もかけず、念も入れない其他の翻譯書には餘り見るに足るものがない。これは基督教界の人達が一般の社會と没交渉にな

つてしまつて、新らしく勃興してゐる日本の文藝に觸れることが尠ないためであらう。

天路歷程は聖書と偕に不朽の書物である。新らしい時代には新らしい言葉を以つて讀まるべきものである。それ故に私は天路歷程の改譯を思ひ立つた。曩にバンヤンの「聖戰」及び「恩寵溢るゝの記」を譯した行懸り上、その三大傑作を完成したいといふ心もあつたし、又新らしい時代の言葉で天路歷程を世の中に紹介することの必要を感じたからである。私はこの改譯が前に在る三氏の譯よりも優つてゐることは言はない。唯翻譯者として一層鋭敏な良心を以て、その全體を忠實に翻譯したことを告白する。忠實な翻譯——これがこの書の誇である。

天路歷程といふ言葉は「ピルグリム・プログレス」の譯字として餘り古めかしい感じがする。なんぞか改めた方が善いと言ふてくれる人もあつ



だが、いかにも語呂が善いので、その名が深く人心に浸み込んであるの  
で、今これを變へることの不得策なことを感じて、その儘に存することに  
にした。

大正二年十一月十一日

雲舟生

### 天路歷程に就て

余は「恩寵溢るゝの記」の巻頭に、バンヤン傳を掲げたが、それには天路歷程に就いて言ふべきことの多くを省いた。最早その時には、天路歷程の翻譯を心に預期してゐたからである。茲にそのあらましを書きつけて見る。

#### 一 洞穴の場所と夢見し時

これに就ては、バンヤン傳に書いて置いたので、それを参照されたい。洞穴で夢を見たといふ、その洞穴は牢獄である。然もそれはバンヤンが十二年幽囚された郡の牢獄ではなく、その後六ヶ月幽囚されたベッドフォード橋上の市の牢獄である。彼がそこに囚はれの身となつたのは、一六七六年の春から夏にかけてなので、その夢見た時もある間にあつたと言はねばならぬ。けれどもその夢の全部が獄中で物されたかといふに、それは疑問である。天路歷程正篇には奇妙な區切が一つある。基督者と有聲者が歡樂山で牧羊者に別れたことを記した後、バンヤンは「折しも私は夢から醒めた」と言つてゐる。それから次の節に、彼は「私は又睡つて再び夢を見た。見ると同じ二個の旅人が山を下つて、都をさして往來を歩いて往

天路歷程に就て



く」と記してゐる。これは正篇にある唯一つの區切であるが、物語の脚色としては尠しも必要がないものである。それ故正篇全部は獄中に完成したのでなく、この區切以下の三分の一は釋放後に物されたものではあるまいかと想はれる。この推測は多分事實であらう。バンヤンが釋放されてベッドフォードの獄舎を出たのは、一六七六年の秋である。さうしてその翌年に彼は天路歷程の原稿を出版するために倫敦に行つてゐる。それ故その終りの三分の一は一六七六年の秋から七七年の春にかけて物せられたといふ推測が出来る次第である。

## 二 天路歷程の出版

バンヤンが天路歷程を出版するに就いては、その序歌にある通り、諸人に相談したものと見える。或る人は出版しろと言ふし、又或る人は出版するなれと言つた。意見は區々であつたが、自分の善しと信する所に従がつて出版することに決した次第である。その出版の依頼を受けたのは、倫敦のポルトリーにビーコックといふ書店を持つてゐたナタニエル・ポンドアといふ人であつた。彼の名がバンヤンの著書の發行者として記されたのはこれが初めてであつたが、それから十年の間彼は幾度もバンヤンの著書を發行するに至つた。二人は茲に初めて出版上の關係を結んだのであるが、ポンドアの名は既にベッドフォードの非國教徒

の間に知られてゐた。一六七一年彼の店から、「救はれたる英國」といふ書物が出版された。それはベッドフォード郡の國教會の副監督の位置から放逐されたロブート・バアロットの著書であつた。尙ほその他にも縁故があつた。當時バンヤンの釋放に骨を折つたオウエン博士はその著書をナタニエル・ポンドアに出版させてゐたので、恰度この時にも「信仰の理由」といふ書物を上梓してゐた程である。バンヤンは倫敦に到着したので、オウエンの盡力を謝するために、これを訪問したであらう。その時二人の談話は天路歷程の出版に及んだに相違ない。さうして遂にビーコック書店にこれを引受けさせることになつたであらう。

天路歷程の原稿の到着は出版者の生涯にも著者の生涯にも、時代を劃することになつた。その後彼は「バンヤン・ポンドア」といふ異名で本屋仲間に通つてゐた。一六七七年十二月廿二日、この夢物語は印刷を終つて、出版免許を乞ふことになつた。その免許の下りたのは、一六七八年二月十八日であつたので、同年早く公けにされて、世上の喝采を博した。一六七七年及び同八年の倫敦出版書籍目録には、黄がかつた灰色の紙表で、小さいオクタツオ(八折)の新型の書、紙数は全體で二百三十二頁、定價は一シルリング六ペンスとある。

## 三 天路歷程の増補



これより以前に出した「恩寵溢るゝの記」のやうに、「天路歷程」も著者の手に依つて、最初出版した後から増補された。第一版と同年に出た第二版と、一六七九年に出た第三版とで、著じるしい増補が施された。第一版には、基督者が妻子にその心を打明け、節がない。世才氏が出て来ない。傳道者と二度目に邂逅ふこともない。耳門で好意者が基督者に與へる訓言もなかつた。又優美殿での基督者と愛子との談話、勝手者とその仲間との談話及び彼と旅人達との談話、ロトの妻が化したといふ鹽の柱のこと、巨人絶望者の妻疑念女の記事全體、旅人達が川の向ふ岸で輝やく白衣を着た王の喇叭手に遇つたことは、後から附加されたのである。又第一版には、數篇の歌の前に附いてゐる説話や對話もなかつたのである。

天路歷程、正篇の第一版は全體に於て、その後六年に出版された續篇の第二版よりも文字の綴り方が亂暴であつた。例へば Slough of Despond が Slow of Dispond 且、Pliable が Plyable に、Ie が Iye 又は Iy、die が dyo 又は dy になつてゐる。

要するに第一版以来僅かに數ヶ月で世に出た第二版でなされた最も重要な増補は世才氏の出現であるし、又翌年世に出た第三版の著じるしき増補は勝手者の譚である。尙ほこの第三版には、初めてロワード・ホワイトの描いた著者の肖像の版畫が載せられた。この肖像によ

ると、パンヤンは一匹の獅子の居る洞穴に睡つて居る。その上に基督者が片手に書物を持ち、片手に杖を持ち、脊に重荷を負つて、下に在る滅亡の市から、日光に浴する天の都に苦しげに登つて行くのであつた。

#### 四 出版の景氣

天路歷程が初めて世に出た時のナタニエル・ボンダア書店の盛況を描いた書がある。一人の學者がビーコックの店看板の下から出て來ると、一人の農夫が片手に鞭を持ち、片手に金を持つて店に入つて行く。又店の戸口の側には華やかな好男子と美しくい貴婦人と小學校の生徒と眞面目な人々が今買つたばかりの天路歷程の物語を皆な熱心に讀んでゐる所である。この書はその盛んな人氣を描いたものとして事實に近い。

#### 五 虚榮の市場のモデル

パンヤンが斯る傑作を成す感興を何處から獲たか。それに就て批評家の中には彼が住んだ場所の自然の景色及びその社會的境遇にその感興の源泉を見出さうとする者もあつた。勿論その多くはあまり役にも立たぬ推量である。しかしそこに尠なくとも一つの除外例がある。天路歷程の比喩の最も著じるしい光景の一つである虚榮の市場は、パンヤン在世の時の實際



の市場を型にしたものであるといふことが出来る。さういふ市場はその當時商賣上に最も大切なものであつた。エルストウの市場はヘンリー二世が同地の修道院の尼さん達に免許状を與へし以來、大規模のものであつた。けれども虚榮の市場の歴史的土臺となつたらしく想はれるものは數世紀の間、ケムブリッジに近いスツルブリッジで開かれた市場である。フランクフォルトやライプツヒやノヴゴロドの大市場のやうに、それは數週間繼續した。その市場はケムブリッジ大學の副大法官に依つて告示され、同市長や市會議員に依つて壯重に開場された。その市場の廣さは半哩四方で、假小舎が長い列に並べられた。それは廣大な商品陳列場であつた。佛蘭西の呉服商はその絹を、フランダア人はその羅紗を持つて來る。蘇國やケンダルの商人は荷馬車で、倫敦の商人は解で、各その商品運んだ。凡ての新しい發見物や外國の製産物は初めて茲に公衆に展覽された。商賣の取引が濟むと、遊興が始まつた。四角な市場の中央には、頂上に風見のある大きな五朔柱が立てられて、その市場の周圍には、コーヒー店や酒樓や音樂堂や茶番、手品、野師、野獸、怪物、一寸法師、巨人、網渡りのやうなものを見せる建物があつた。一四八一年には、佛蘭西のルイ十一世に擬した奇怪な假裝會が催ふされた。十五世紀には、ヨーク侯が金襴の天幕を張つて、多くの貴族貴婦人と奏樂隊

を伴ふて、茲に一日を費やした。年々十哩か十二哩四方の田舎紳士が息子娘を連れて、この市場にやつて來た。その光景は實に虚榮の市場の通りであつた。パンヤンはケムブリッジの近傍に居つたところがあるので、數回はスツルブリッジのこの著じるしい光景を見たに相違ない。彼はこれをこの比喩の内に借りて、虚榮の市場を描き出したのである。

六 續篇の胚胎

この旅物語の意外な成功は、誰よりも先づパンヤン自身の大いなる驚きであつた。そのために彼は斯る冒險を再たびすることを企だつるに至つた。正篇を完成した時には、既に續篇を物する考へが閃いてゐたやうにも見える。正篇を結べる詩の最後の二行に、

空しく凡てを棄て去らば、

われ夢見んか、なほ一度

とあるのを見てもそれが解る。けれども彼が最初の計畫はその描寫を對照に依つて完成することであつた。彼は既に神の都に志さず善人の生涯を寫したので、今度はその反對に地獄に向つてゆく悪人の生涯を描かんとした。一六七九年「天路歷程」が完全な形になつて第三



版を發行して間もなく、彼は「悪人氏の生死」といふ書物を公けにした。

然るに一六八三年にT・Sと名乗る一人の作者がバンヤンの比喩譚を完成する目的で、ナタニエル・ボンダアから出した正篇と大きな型も似てゐる書物を世に公けにした。それは「天路歷程第二篇」と稱された。その一部は残存して、以前詩人ソーセイの圖書室に藏されたが、今でも浸禮教會同盟の圖書室に在ることである。その作者は後年偽作された第三篇の場合のやうに、その書物をバンヤンの自作なるが如く装ふつもりではなかつた。唯バンヤンの著書を補なふつもりであつたらしい。

### 七 續篇の出版

一六八三年に出たT・S氏の書物は、バンヤンの夢物語を増補しやうといふ唯一の企てはなかつた。他にも澤山類似の書が出来た。その翌年真正の續篇が出たが、その初めに

げにも近頃、旅人と

名をば自から僞稱るあり。

わが名は半ば他の人の

書物の上に縫はれけり

云々と記してゐるのを見ても、その澤山にあつたことが解る。

バンヤン自作の續篇は一六八五年か八四年に出版された。その表紙は正篇のと同様であつた。又同じくナタニエル・ボンダアに依つて發行された。正篇の第一版には、挿繪がなかつたが、續篇の第一版には、基督女とその伴侶とが天の都へ出立せんとする所を描いた口繪があつた。その繪の下にはバンヤンの睡つてゐる肖像が描いてあつた。五十二頁と五十三頁の間には、大勇者が大きな劔を横たへて旅人達の先きに立つてゐる粗末な版畫が挿んであつた。百六十二頁と百六十三頁の間には、旅人達が巨人絶望者の首の前で樂しさに踊つてゐる繪が挿んであつた。

### 八 續篇の人物のモデル

バンヤンは婦人の宗教的生活に多大の興味を持つてゐた。彼はガヨス（續篇中の人物）の唇から、婦人が男子と同じやうに恩寵にあづかれることを述べさせてゐる（本文四百十）。バンヤン自身はその人生の旅路に於て、二人の婦人と道連れになつた。然も不思議に幸ひであつた。バンヤンの後妻であつたエリサベスは良人のために判事や長官に抗議を申込んだほど毅然した婦人であつた。勇ましい氣質の基督女は取も直さずこのエリサベスを理想化したので



ある。又氣立の柔しい哀憐女には、早く世を逝つたバンヤンの先妻の懐しい思ひ出があるらしい。併し基督女には四人の息子があつたが、バンヤン自身には三人の息子と三人の娘があつたので、その家庭の事情は兩者必らずしも一致しない。唯一つの除外例は基督女の末子をヨセフと云ふが、バンヤンの末子も實際同名であつたことである。基督女の物語を作る上に初めから感ぜられた一つの困難は、基督者が前に爲したやうな危険な旅に女や子供を出立させることであつた。但し中世紀の美しい武士道を茲に利用して、大勇者といふ勇士を道案内に附けたので、この困難は除かれることが出来た。

九 正續兩篇の比較

二つの夢が同じ旅路の出来事なので、兩者は形式の上の變化があまりない。基督者の旅物語が世に現はれてから、六年を経た。續篇の初めに著者はその時の経過を職務の多忙に歸してゐる。さうして第二の夢を見たのは、洞穴でも牢屋でもなく、「森の中に宿を定めて」と言ふので、もつと快い境遇であつた。基督者の場合のやうに、基督女が旅立つ時にも、隣人から邪魔をされた。その隣人の一人は矢張その後をついて来る。けれども柔弱者は歸つて行つたが、哀憐女は歸らなかつた。

續篇は正篇と同じ路筋が記してある。滅亡の市、耳門、註釋者の家、困難の岡、優美殿、謙遜の谷と死の蔭の谷、虚榮の市場、歡樂山、迷魂の地、ベウラの地、橋なき川は孰れにも出て来る。基督女の旅路で、基督者が通行の時に見た同じ人に出遇ふことがあるし、又基督者の妻子であると聞いて、厚い待遇を受けることが度々ある。かやうに兩書は形式が似てはるが、その内容に於て重要な變化がある。註釋者の家で、續篇の旅人達は基督者の見なかつた大切な事を見せられた。又落膽の沼でも、基督女の一行は能く踏石に氣をつけて、基督者のやうにそこに溺れることはなかつた。死の蔭の谷でも、基督女などがそこを通つたのは、晝間なので、アポリオンは遠くその姿を見せたに過ぎなかつた。巨人絶望者もその一行を牢内に閉籠めるどころか、大勇者その他に首を渡さなければならぬ破目になつた。殊に謙遜の谷は、兩篇に著るしい對照をなしてゐる。自尊の念の高い男子と受働的な柔和な心の女子にさうして、謙遜の谷は全たく別種の趣があつた。基督者には、その谷はアポリオンとの激しい争闘の場所であつたが、基督女の一行には、緑の牧場と静かな水の穏かな住居であつた。美しい満足した心を有する哀憐女には、いと懐かしい谷であつた。又柔しい氣質の恐怖者もこの谷の快暢なのを悦んで、地を抱いて、咲ける花に接吻したほどであつた。心謙つて柔



和なる者にどりて、この谷はいつも緑に、百合の花美はしい所であつた。

宗教生活の受働的な信頼する女性的方面は能く精篇に現はれてゐる。この物語に於ては、傷める葦の如き生涯、浮世の荒波に慄へる靈魂に對して、懐しき同情が見出される。パンヤンの創造せる人物中、藁にも躓くほど氣が弱く、然も獅子を怖れなかつたといふ恐怖者などは餘程面白い。その他柔しい心の人達には、心弱者、逡巡者、氣落者とその娘の多怖女などがある。それと同時に哀憐女や基督女のやうな清教徒的な氣品の高い婦人の代表者があるし、又クロムウエルの鐵騎を想はしめる丈夫らしい人達もある。女子に對する純潔と親切を有する強膽なる勇士である大勇者を初め、強健なる靈魂を有する正直翁、エルサレムの刀を帯びて、勇敢なる戦をなせる眞理剛者などはそれである。

一見した所、精篇はその價值に於て正篇とあまり隔りはない。正篇よりも不適宜な所があるし(例へば基督女の子供達が皆な結婚して、間もなく子供が出来るやうな)、力の足りぬ所は兩篇に同じく閃いてゐると言へやう。基督者と基督女との二つの物語は相携さへて時間の旅路を無窮に進むべきであらう。

### 十 パンヤンの先驅者

一三三〇年佛蘭西のチャリツツの帝立寺院の僧侶ギラム・デ・ギルグイユは「靈魂の旅路」といふ書物を世に出した。これは英語に譯されて、一四三三年ウイリアム・カクストンに依つて印刷された。パンヤンがその天路歷程を物するに當りて、大いにこの書に負ふ所ありとは、幾度も繰返して言はれてゐる。パンヤンとデ・ギルグイユとの間に共通の思想のあつたことは、兩書を較べて見ると直ちに解る。天の都の光景を見て、旅路を始めること、耳門を通ること、恩恵の家で厚遇されること、旅人が武裝することなどが、いかにも能く似てはゐるが、パンヤンがそれだけだ。デ・ギルグイユに負ふ所があるかは疑問である。永遠の都を眺めることや、基督者の靈魂を靈の鏡で装ふことは、新約聖書にある思想である。デ・ギルグイユの耳門は唯それを通行するといふに留まつて、譚に重要な地位を占めてゐない。又行路の最後に凡ての人を待つてゐる死の門を意味するのである。所でパンヤンの耳門は人々が信仰の生活に入るには是非通るべき狭い門である。故に譚の重要な地位を占めてゐる。それから恩恵の家と優美殿とは保羅の所謂活ける神の殿を現はせる信仰の家であると同時に、スベンチアの「奴女王」の哀憐の家と同じく、昔時途で旅人を待遇す家のあつたことから暗示さ



れたものである。

デ・ギルヴイユの著書以來、夢物語や譬喩譚といふやうなものが澤山に出た。又旅物語も澤山に出た。一々茲にはその書名を擧げないが、それらは自然にバンヤンの夢の先驅者になつてゐるやうに見える。しかしウイリアム・カクストンの印刷したデ・ギルヴイユの譯書が十七世紀に於てバンヤンのやうな低い身分の人の手に入つたかどうか頗ぶる疑がはしい。旅物語といふ思想は屢々文學上に現はれてゐるが、當時その文學の書類が職工や鑄物師の便宜には容易に供されなかつた。

確かにバンヤンは材料を集めてそれからその作に取り懸つたのではない。斯る作物をしやうとする思想は牢獄に居る間に知らず識らず湧いて來たのである。それは正篇の序歌の初めに述べてある通りである。群がる想は無數にして制ふる所を知らずと言つてゐる。要するに天路歷程はバンヤンの獨創の書と言つて可い。若し彼が斯る思想を何處から獲て來たかと言へば、それは無論聖書である。彼の死の蔭の谷はサー・ジョン・マンドヴィルの「危険の谷」から暗示を受けたのではなくして、詩篇第二十三篇から來たものである。旅人を武装させたことは、ジエロム・ウイリツタスの基督者の武者の版畫から暗示されたのではなくつて、エ

ペソ書の第六章から來たのである。耳門はデ・ギルヴイユから暗示されたのでなくつて、福音書の狭き門から來たのである。

### 十一 ダンテの比較

バンヤンは聖書に耽溺した。負ふ所あるのは重に聖書である。ベッドフォード牢獄の夢想家は三世以前の大なるフローレンス人と同じ源泉からその神興を獲たのであつた。天路歷程が猶太の地味に生じた英國の花であることは、「神曲」が矢張同じ地味に生じたタスカンの花であると同様である。茲に尠しく二人の生涯と作物を比較して見ると、先づ第一に兩者の異象はその初めが一樣である。バンヤンは正篇では洞穴で夢を見、續篇では森に妨よふて夢を見てゐる。ダンテも暗い森に入り込んで、睡つてその異象を見たのであつた。それから兩者は見えざる物を取扱かつてゐる。世俗の利害に囚はれた人達には見ることの出来ない人生の理想を眼に見るやうに現はしてゐる。兩者は同様に想像の光彩を輝かすと同時に、熱誠な目的に依つて活氣を興へられてゐる。兩者は又同様に單純に確かな力ある語を使つてゐる。一方は力の籠つたタスカンの方言を使ひ、他方は自分の周圍に居る平民の繪のやうな英語を使つてゐる。兩者共にその偉大な靈魂を苦痛で訓練された。併し斯る訓練から人生の最高の



仕事は成就するのである。偉大なるフロレンス人の異象は永き失意と追放のさすらひから生れたのである。又この偉大なる英人はその内部生活に於てシナイの火と雲と暗とを見んとして永く待望むと同時に、その外部生活に於ては、暗鬱なる牢獄の裡に一層永き時を送つた。ダンテの三段物とバンヤンの譬喩は一見した處、別々の境涯に動いてゐるやうである。前者は死の世界に我等を導き、後者は時間の支配せる此世に限られてゐるやうである。けれども深く兩者を洞察すると、一道の脈路がそこに存するのである。基督教の見地からすれば、兩者は人間の靈魂の歴史が分たれねばならぬ二つの部分を代表してゐる。その二つの部分は互ひに相補つて完たくなるのである。英人の詩に於ては、靈魂の最初の部分が現はされる。靈魂が地上にある時の浮沈とその状態、即ち第一の生涯である。伊太利人の詩には、靈魂の最後の部分が現はされる。來世における靈魂の状態即ち第二の生涯である。死は二つの叙事詩を分つ境界であると同時に、又それ結び着ける紐である。バンヤンに依つて、我等は天國と地獄の門口に達するが、そこを通過しない。ダンテに依るとその旅路は地上の生活を後に残せる所に始まつてゐる。靈魂の歴史の此の二つの部分は相待つて存在してゐる。故にこの二人の詩人はその一つの部分を題目にしてゐるが、その説く所は兩面に渡つてゐる。孰れ

もその基督者の靈魂の理想的全歴史に對して悟る所いかに深達なるかを示してゐる。

## 十二 成功の要素

天路歷程が成功した先づ第一の原因は、比喩を愛する念が人生に深く根ざしてゐることである。文學上に比喩を用ゆることが東洋人の氣質にいかにも善く適合するかは、聖書を手にしたものは誰でも認むる所である。併しそれを愛することは、常に日の麗らかに輝やく東や南に限らない。雪深き曠原の露西亞の農夫も亦これを愛して、その裡に新しい魅力を見出すのである。又テーンはその成功の秘訣を數へて言つた。「新教の基礎は恩寵に依つて救はれるといふ教理である。バンヤンはこの教理を能く了解してゐた作者はない。勿論バンヤンは信仰に依つて義とせらるゝといふ教理を眞心より信じた。この信念は彼が基督教生活の概念に透徹してゐた。けれども斯る教理を悦ばぬものでも、この書物を受讀する。されば尙ほ他にその成功の要素を尋ねばならぬ。天路歷程の文學的性質を數ふれば、先づ第一にその完全なる自發性である。それは生命の單純な自由を持つてゐる。苦心の徴候もなければ、推敲の痕もない。その異象は努めざるに花の如く美しく開いてゐる。これは技巧を隠すに成功したからではない。作者が自分の創造に囚はれないからである。眞正の神興はそこから出て



来る。作者はその題目を取扱かふにあたりて、何等の思慮をもめぐらしてゐない。その序歌に言ふ如く、全く別のもを書かんとしてゐた時に、想ひは火花の如く群がつて、斯る作を生じたのである。實に天路歷程は批評家の意見を眼中に置かないで書かれた最後の英國の書物と言へる。又それは讀者を顧慮せずに書かれたものであることは、序歌に隣人を樂しませためでないと言ふてゐるのでも解る。又バンヤンをして不朽ならしめた此書を成すことは、彼にとりて決して真面目な業務でなく、又辛ひ重荷でもなかつた。されば矢張序歌に、この下書きをなすために、空しき時のほか費さなかつたと言ふてゐる。兎に角彼は凡てその知れる所を話した。併しその話す所の凡てを彼が知つてゐる譯ではない。天才は神の賜物である。天来の妙音は樂器以上に出づる。最も深く我等を動かすものは、自由なる生命の魅力である。それは天才の事業にも、嘻々として遊べる子供にも、樹や鳥や花の樂しき状態にも、森や牧場の自由な粗野な生活にも見出すことが出来るが、何處に於ても名狀しがたき魅力を與へるのである。その秘密に達することは、人生の神秘に達することである。

天路歷程はかやうに自由な自發的生命を有すると同時に、戲曲的統一を有する作である。スベンサアの「妖女王」の如き誠に偉大なる作であるが、甚だ統一を缺いてゐる。それは「ア

ラビア夜話」の如く、個々別々な譚の集合である。それは單に讀者を彷徨せしむる荒野である。そこには路がないので、讀者は路を失ふ氣遣もない。それ故に讀者はその書物の精神に到達するには、種々な障礙を排さねばならぬ。然るに天路歷程に於ては、排すべき障礙もなく、その開卷の句から讀者の興味は喚起されるのである。物語はいかにも統一してゐて、脈路整然としてゐる。勿論宜しきを得ざる所も容易に指摘することは出来るが、それは長物語には止むを得ぬ缺點であつて、路のない荒野などは尠しもない。その出現する人物は決して逡巡してゐない。故に決して讀者を疲らすことはない。いかなる人物もそこに現はれると、鮮やかにその人格を示すので、後でも見違へるやうなことはない。救へたり、慰さめたり、樂しんだりして、やがて消え去るが、その餘り早きに失するを残念に想ふほどである。

天路歷程は單にその戲曲的統一があるので面白いばかりでなく、その人物がいかにも突然に力強く描いてゐるのが面白い。抽象な言葉は忽ちにして肉と血に裝れて活躍する。活潑な少年である無學者でも、頑固者でも、柔弱者でも、誰も彼も皆な人格を備へて生きてゐる。日常我等が街道で遇ふ人達と少しも變つてゐない。

これは又能く人情の機微に觸れた書物である。ガヨスの家で「善く溶いた乳の皿」を子供



等に持ち來したといふやうな家庭的な細かい注意や、盜賊が遠くに居る時に有望者が意張のを戯れに攻撃する所などいかにも世話に碎けてゐる。ベウラの地で子供等が旅人達に花束を集めて持参する所や、森の中で鳥の好き音がする所や、正直翁に居睡をさせぬために、謎を掛け合つたりする所など、何んともいへぬ妙味を覺へる。

バンヤンは深く人情に通じてゐたので、その人物を描くにその社會的差別などを無くしてしまつた、彼の書物はエリサベス時代から近代への過渡の連鎖である、ウオーツオースやジョーシ・エリオットと共通に、彼が功績の一つは、その奥達なる洞察を以つて、最も低き生活の眞正の偉大を認めたことである。彼が描ける人物は平凡な境遇に屬してゐる。田舎の町で毎日出遇れる平民である。尙ほその穩かな外觀の後には、情熱の世界が燃えてゐる。嚴かな悲劇が展げられる。測りがたき深淵が口を開いてゐる。又歡樂の絶頂に達することもある。ベッドフォードの町とエルストウ村の間で出遇ふ平民は天國の配前にあづかる。彼等の行動は世界を貫通せる人道に貢献し、彼等の信念は高く神の御心に係はるのである。尙しも貴族的宗派的臭味のない平民の書とはこれである。

天路歷程は博大なる基督的精神を有する書である。されば聖書に親しむものは、又この書にも親しむのである。天路歷程にはパウロもケバもないが、基督は在る。世界人である基督には國民性はない。されば基督に最も近き働きをなす人は世界的衷情に最も近く來たるのである。これは天路歷程が天が下の民には何處でも歡迎される所以である。外國宣教師が異教徒に神と人との眞正の思想を興へんとするに當りて、翻譯せんとする第一の書物の一つはこれである。それはいかなる方言に譯しても有ゆる國民性の下に潜める世界的衷情に觸れるからである。それはいみじくも、「鳥の歌が曉に従ふごとく、いかなる國にでも聖書に従ふ」と言はれた。その道理は遠く求めるにも及ばない。半世紀あまり前に、マカウレイは「天路歷程が斯る書類の中で強き人間の興味を占有する唯一のものである。他の比喩譚は唯空想を樂しますに過ぎないが、これはいかなる人も涙なしには讀れない」と言つた。それは唯頓智と巧妙に依つて知力を樂しますばかりではない。人の心情を堅く握るのである。これは此書が次第に朽ち行く書物の裡に生殘る所以である。

またこれは有らゆる階級から愛せられる。教養のある者も無い者も共にこれを樂しむのである。また浦若き子供に愛讀されると同時に、人生の戰場を過ぎて靜かな晩年を送つてゐる老人をも慰さめるのである。牧羊者や農夫の寂しき小舎で唯一つ見出されるのは、天路歷程



である。

十三 埋没しむたる初版

サウセイは一八三〇年に天路歷程の新版を出した。その時には正篇の第一版は一部もその存在してゐることが知れなかつた。唯英國博物館にその第二版が一部あつた。出版者はサウセイのために早い版を熱心に尋ねたし、又その友人達も親切に捜してくれたが、一六八二年の第八版を手に入れたに過ぎなかつた。然るにその後第一版が五部、第二版が四部、第三版が三部世に現はれた。天路歷程の生長を示すこの三版のほかに、今日まで凡ての版が存在してゐるが、唯第七版と第十七版とを缺いてゐる。

十四 バンヤン生前の版数

天路歷程は一六八八年に第十一版に達したが、これはバンヤン存生中の最後の版である。その十一版の部数は十萬部であつた。これは讀者の比較的に少ない當時に於て實に著しい事實であつた。

十五 天路歷程の翻譯

天路歷程が外國に翻譯されたのは、一六七八年初めてその正篇が出版されてから恰度五年

目の一六八二年であつた。バンヤン自身は一六八四年にその續篇の序歌で、「人々互ひに相殺す佛蘭西やフランダースにも、わが書は朋友兄弟と親しまれ、和蘭にても黄金の上に量られぬ」と言つてゐるが、その翻譯を出したのは和蘭が初めてであつた。それから一六八五年には佛蘭西譯が出た。併しその一年前にバンヤンがその「天路歷程」の佛蘭西にあつたやうに言ふてゐる所を見ると、もつと早い譯があつたのかも知れぬが、その一部も残存してゐない。獨逸に翻譯されたのは、一七〇三年が初めて、然もそれは和蘭から重譯したものであつた。シルレルの詩である「旅人」と「あこがれ」にはバンヤンの感化が顯著であると言はれてゐる。ウイランドは十八世紀に於てシルレルよりも早く生れた詩人であるが、英語を學ぶために先づ第一に天路歷程を讀んだ。或る時友人と共に英文學の話をして、自分が讀んだもの、中で最初に思ひ出すのは天路歷程であるといつたさうである。斯くしてその翻譯は益々廣まつて、今では百餘種の各國譯を見るに至つた。

十六 天路歷程の模倣書

天路歷程の第三篇と稱する偽書が一六九三年に出た。その表紙には明白にバンヤン作とはしてなかつたが、「第一第二の兩篇の著者ジョン・バンヤンの生涯と死とを附録せる第三篇」



と記された。その序文には「J・B」と署名された。その本文の書出しの言葉は、「基督者と  
 その妻基督女に就て前に二つの夢を見たが……私は又睡に落ちた。私の頭の中の異象は戻つ  
 て来て、私は又別の夢を見た云々」といふのであつた。讀者は容易く欺むかれた。それはバ  
 ンヤン自身が第三篇の作を半ば約束したからである。續篇の終りに、「私が再びかの路へ行  
 く折があつたら、茲に書き洩したことを聞きたい人達にまたお話しませう。今は暫くわが  
 讀者にお別れします、左様なら」と言つてゐるからである。併し一六九三年に出た天路歷程  
 の第十三版の表紙の裏に次のやうな廣告が現はれた。「天路歷程第三篇といふ夢物語が一六九  
 二年に出版されてゐるが、それは無名の作者が世を欺むける偽書である。然もバンヤンの生  
 涯と死の虚偽の報告を附けて、バンヤンの眞作であるやうに見せかけてゐる。實はバンヤン  
 が第三篇の骨子とその大部分の原稿はナタニエル・ボンダアの許にあるので、都合善き時に  
 出版する筈である。斯る廣告がなされたに係はらず、バンヤンの眞作といふ第三篇は遂に世  
 に出ず、その偽書のみが相應に世に行なはれた。この他模倣書として世に出たものは一々數  
 へ切れない。

# 天路歷程

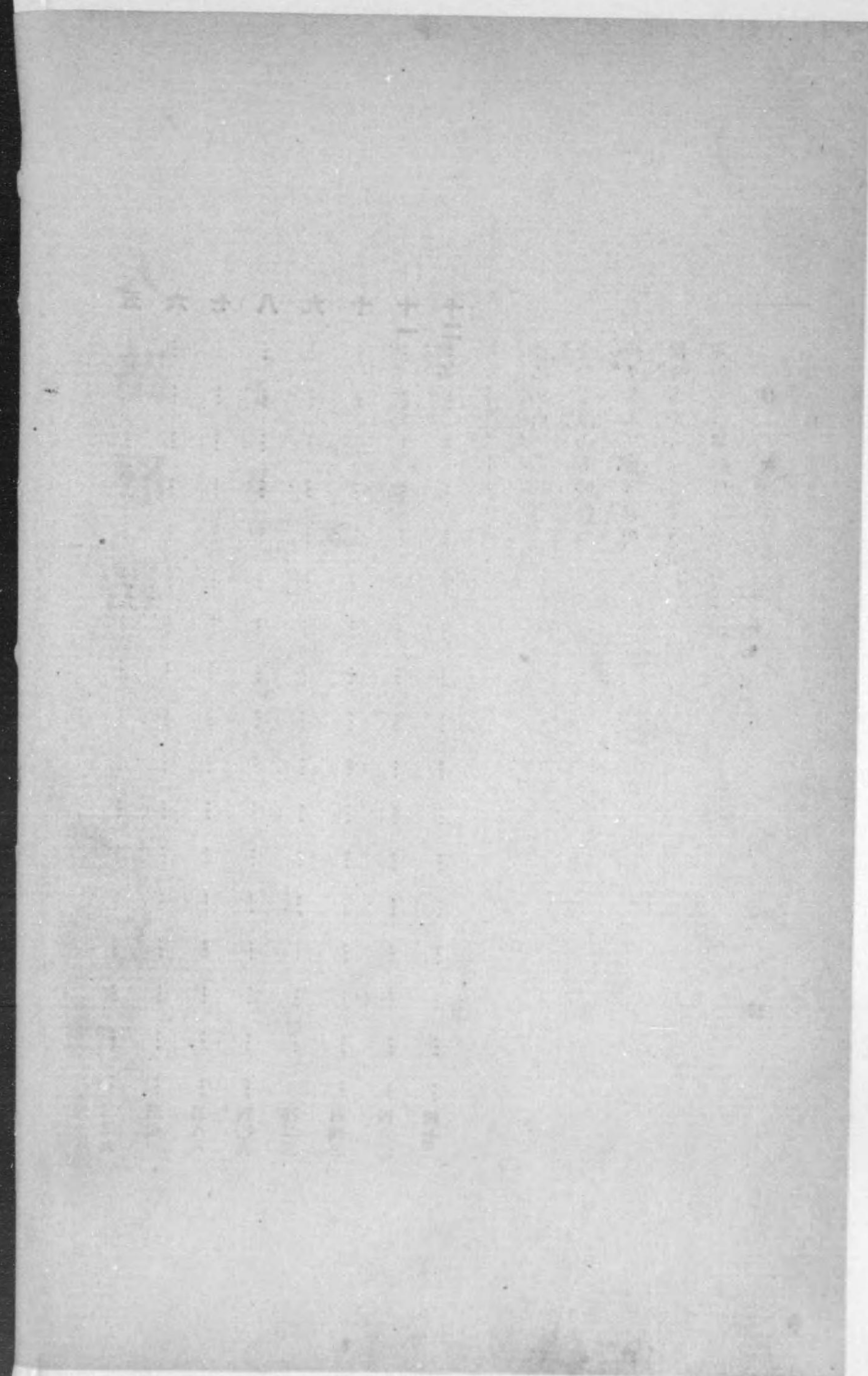
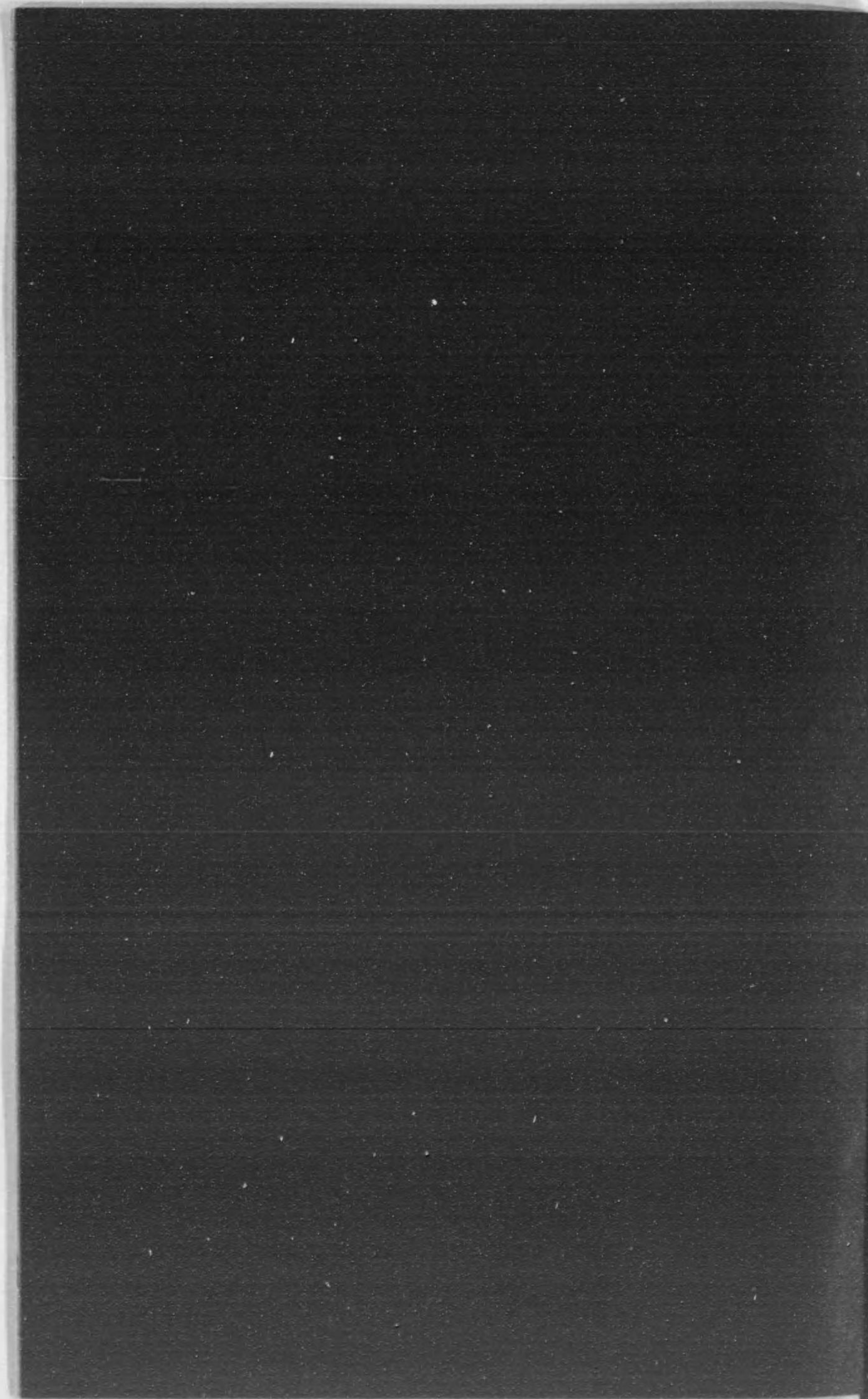
## 目次

序	………	一
天路歷程に就て	………	二五
正篇序歌	………	四一
正篇	………	四一
一	………	四一
二	………	四二
三	………	四三
四	………	四四
五	………	四五
六	………	四六
目次	………	一〇二











# 天路歷程

正篇

パンヤン著  
松本雲舟譯

私がこの世の荒野を歩いて行つた時に、ある洞穴の側に休んで、そこへ横になつて、眠つた。眠ると、一つの夢を見た。夢の中で、見てみると、襤褸を着た一人の男が或る場所に立つてゐた。自分の家から顔を反向けて、手には一冊の書物を持ち、脊には大きな荷物を負つてゐる。見てみると、彼はその書物を開けて、中を読んだ。それを讀んで、泣いて慄へた。最早堪へきれなくなつて、悲しげな聲を擧げて泣きながら、「私はどうしたら可いだらう」(ザイヤ六十)と言つた。

こんな有様で、彼は家へ歸つた。出来るだけ辛抱して、妻や子に自分の悲嘆を悟られまい

正 篇



とした。けれども長く黙つてゐられないほど、その苦惱は増して来た。それ故遂に妻や子に心を打明けて、かう話した。「これ、妻も子供達も聴きなさい。私はお前方の頼る柱なのに、この身に重い荷物を負つてゐるために實に困つてしまつた。私の確に聞いた所では、天からの火でこの市は焼き拂はれるさうだ。其の怖ろしい最後には、私はもとより、私の妻であり、可愛い子供達であるお前方まで、むざ／＼滅びてしまつたらう。遁れる道を見つけて、救かりたいと思ふが、未だ見つからない。これを聴いて家の人達はひどく吃驚した。彼の言ふことを眞實だと信じたからでなく、その頭がどうかしたのだと想つたからである。それ故日が暮れたのを幸ひ、睡むつたら頭が落着くだらうと思つて、大急ぎで彼を床に臥せた。けれども彼は夜も晝と同じ苦しみで、睡らずに嘆息と涙に一夜を過した。朝になると、家の人達はどうです御氣分はと尋ねた。彼は益々悪いといふ。そして又もや例の話を始めたので、家の人達は顔を曇めた。で、いつそのこと荒々しく情なく待遇したらその煩悶が癒るかも知れぬと想つて、嘲笑つて見たり、叱つて見たり、全く顧視なかつたりした。そこで彼は自分の部屋に閉ぢこもつて、家の人達のために祈つたり、憐れんだり、又自分の不幸を悔んだりした。又唯獨り野原を歩いて、時には讀んだり、又時には祈つたりした。かうして數日を送つた。



野に彷徨ふ基督者



或る時彼が野原を歩きながら、例の通りその書物を読んでゐると、大に心が苦しくなつた。読みながら前のやうに泣き出して、「どうしたら私は救はれるだらう」(使徒行十)と叫んだ。彼はいかにも逃げ出したいやうに、此方を見たり、彼方を見たりした。でも、何方に行つて善いか解らないので、静に立つてゐた。さうしてゐる内に、傳道者といふ人が彼の側に來て、「貴君は何故泣きなされるのか」と問ねた。

彼は答へた。「私は手に持つてゐる此書物で、私が死なねばならんこと、死んでから審判を受けねばならんことが解りましたもの、さて死ぬのもいやだし、審判も辛いものですから」傳道者は言つた。「どうして死ぬのがいやですか。この世には悪い事が澤山あるぢやないですか」

彼は答へた。「私の脊に負つてゐるこの重荷が墓場より低い所へ自分を沈めたらうと心配しますものですか。私は地獄に落ちますわい。牢屋に行くのさへ辛いのに、審判を受け、それから刑罰に遇ふのは辛いですわい。この事を想ふと泣すにはゐられません」

傳道者は言つた。「そんな事情があるなら、貴君はどうして靜然として立つてゐなされるか」彼は答へた。「何處へ行つて善いか知りませんものですから」



そこで傳道者は一つの羊皮紙の巻物を彼に與れた。その中に、「來らんとする怒を避けよ」  
(三〇七)と書いてあつた。

彼はそれを讀んで、いかにも心配さうに傳道者を眺めて、「何處へ避けなければならぬでせう」と言つた。

傳道者はいと廣い野原の方へ指をさして、「あそこに耳門(マタイ七)が見えませう」  
「いゝえ」と彼が言つた。

「それではあそこにびか／＼する光(詩百十九)が見えるでせう」

「はい、見えます」

そこで傳道者が言つた。「あの光を見守つて、眞直にお出でなさい。さうすると門があります。その門をお叩きになると、どうしたら可いか、貴君に教へてくれます」

私が夢の中で見てゐると、かの人はそこから驅け出した。自分の家の前から遠くも行かない内に、彼の妻子(ルカ十四)がそれを見つけて、歸つて下さいと泣きながら彼を見送つた。けれどもかの人は指を耳に當て、「生命、生命、限りなき生命」と叫びながら走つた。後を振かへらずに(創世十九)野原の真中まで遁げのびた。

近所の人達も出て来て彼の驅けてゆくのを見た。驅けてゆくのを嘲ける者もあるし、脅す者もあるし、歸れと叫ぶ者もあつた。その中に腕づくで彼を連戻らうと決心した二個人があつた。一人は強情者といふ名で、もう一人は柔弱者といふ名であつた。もうその時の男は餘程遠く行つてゐたが、二人は何處までも追ひかけて行つたので、暫らくすると、彼に追ひ着いた。そこでかの人は言つた。「近所の方々、どうして茲まで來なすつた。二人は言つた。「貴君を連れて歸らうと思つて。けれども彼は言つた。「そんな事が出來ますものか。貴君方は滅亡の市に住であられるのですぞ。私も其處で生れたんですが、それを悟つたですわい。貴君方は晩かれ早かれ、そこで亡くなられて、墓場よりも低く沈んで、火と硫黄の燃てゐる處へお出でなさるでせう。だからお二人も決心して、私と一緒ににお出でなさい」

「なに」と強情者が言つた。「友達や樂しみを棄て行けといふのですか」

「さうです」と基督者が言つた。「その人の名はかう言つた。「貴君方にお棄てなさいといふものを皆なよせても、私がこれから求めて(四〇八)樂しまうと思ふもの、尠しばかりに較べる値もありませんからな。私と一緒ににお出でになつて、それを獲なすつたら、私と同じやうに樂しく暮せます。私の行きますところは充ち足りて餘りある(ルカ十五)のですからな。」



「さあ参りませう、私の言ふことに偽はないですから」

強。「一體世の中を棄てまで、貴君の求めなされるものは何ですか」

基。「私の求めるものは、朽りもせず、穢れもせず、衰へもしない嗣業です（ヘブ10:16）。それは天に安全に貯へてあつて、熱心に求める者には、定められた時に賦へられるのです。それを御知りになりたければ、私のこの書物を讀んでごらん下さい」

「馬鹿らしい」と強情者が言つた。「そんな書物はあつちらにやつておきなさい。貴君は私共と歸るつもりですか、歸らんつもりですか」

「いや、歸りません」と基弱者が言つた。「もう手を鞆に置いたのですから」（ルカ9:10）

強。「柔弱さん、私共はこれで歸りませうや、この人を連れしないで。世間にはこんな頭の狂つた白痴のお仲間もありますものですよ。何か思ひ詰ると、理の解つた七人の人よりも自分の眼の方を俐巧がりますわい」

柔弱者が言つた。「まあ、さう悪口を言ふものでもありません。基督者さんの言ふことが眞實なら、その求める物は私共の持つてゐる物よりも善いですな。私の心は一緒に行きたくありませんわい」

強。「何だぞ、馬鹿も善いかげんになさい。私の言ふことを聽いて、お歸りなさい。こんな氣違者は何處へ連れて行くか解るものですか。さあ歸りませう、歸りませう、俐巧になりなさい」

基。「いや貴君も柔弱さんと一緒にお出でなさい。彼處には先程お話ししたやうなところもあるし、そのほか一層榮光あるものが澤山にあります。偽だと思ふなら、この書物を讀んでごらん下さい。この中に記してある眞理は、皆なこれを作つた人の血で確證してあるのです」

「ねい、強情さん」と柔弱者が言つた。「私は心が決りました。この善い人と一緒に行つて、運試しをして見ますわい。して、基督者さん、その望みの地に行く路が解つてますかい」

基。「傳道者といふ人が、私にあの向ふにある小さい門の所へ急いで行つて、路筋を教はれと指圖をしてくれました」

柔。「それなら、基督者さん、さあ行きませう」

やがて二人は一緒に行つた。

「どれ私は家に歸らうか」と強情者が言つた。「こんな血迷つた氣違共の仲間にもなれんから私

私が夢の中で見てゐると、強情者が歸つてから、基督者と柔弱者とは野原を話しながら行



つた。二人はこんなことを語り合つた。

基。「さて、柔弱さん、どうですか。お前さんが一緒に居て下さるのは嬉しいです。強情さんだつて私が感じたやうに未だ現はれない力と怖を感じたら、あんなに軽々しくは歸らなかつたでせう」

柔。「さて、基督者さん、かうして貴君と私と二人切になつたのだから、もつと精しく話して下さい。一體その求める物は何ですか。どうして貰へるのです。又私共は何處へ行くのですか」

基。「私の心ではそれが善く解つてゐるのですが、私の舌では能く話せません。でも、知りたいたお思ひになれば、私のこの書物でその事を讀んであげませう」

柔。「そしてその書物に書いてあることは確に眞實だと思ひなされるですか」

基。「實際さうです。偽ることの出来ない人が作つたのですから」(テトス)

柔。「成程。どんな事が書いてありますか」

基。「限りなき國があつて、そこに住はされるといふのです。限りなき生命を與へられて、私共はその國にいつまでも住へるといふのです」(ヨハネ十)

柔。「成程。それからどうです」

基。「榮の冠がそこで私共に與へられる。それから衣物も與へられる。それを着ると、私共は大空の日のやうに輝くさうです」(テモテ)

柔。「それは善いですが、そしてそれから」

基。「そこでは最早泣くことも悲しむこともない。その主人である者は私共の目から悉く涙を拭ふて下さるさうです」(イザヤ廿)

柔。「そこではどんな者の仲間入りをするんでせう」

基。「そこで私共はセラフイムやセラピムの仲間に入るので。見る目を眩すばかり美しい者ださうです。それから私共より先に其處へ行つた幾千幾萬の人達に遇へます。その内には悪い者は一人もなく皆な愛に充ちて聖いのです。皆な神の目の前を歩いて、永久に受容られて神の前に立つてゐるのです。つまり、私共はそこで黄金の冠をつけた長老達を見るでせう。それから黄金の琴を鳴す聖い乙女を見るでせう。それから其處の大君に愛を濺いだために、この世で片々に切れ、焔に焼れ、獸に喰れ、海に溺らされた人達が、皆丈夫で、不朽の生命を衣のごとく着てゐるのを見るでせう」(イザヤ六〇、テサロニケ四〇一五)



柔。「それを聞いたわけでも胸がどき／＼しますな。でも、そのやうなものが貰へるでせうか。どうして私共もその分配にあづかれるでせう」

基。「其國の支配者である主はこの書物の裡にその事を記しておかれます。それによると、私共が誠にそれを得たい志があれば、容易にそれを下さるといふことです」(イザヤ五十一)

柔。「やあ、どうも有難う。さあ、ちと急ぎませう」

基。「私は急ぎたくつても、脊にこの重荷を負つてゐるので、早く歩かれませんか」

私が夢の中で見てゐると、二人はこの談話を終つた頃恰度、野原の真中にあつた大變泥の深い沼の側に來た。二人とも氣が付なかつたので、突然沼の中に陥ちた。その名は落膽の沼といはれた。それ故二人は暫時轉んで痛しくも泥まみれになつた。殊に基督者は脊に負つてゐる重荷のために、沼の中に沈み出した。

柔弱者が言つた。「あゝ、基督者さん、貴君は何處に居るですか」

「實際のところ、私にも解りません」と基督者が言つた。

そこで柔弱者は怒り出した。荒々しい聲でかう言つた。「もう少し前に貴君が話してくれた幸福といふのはこれですかい。まだ出立したばかりにこんな禍が起るやうでは、この末ど



沼の膽落



んなことになるか知れない。茲で生命拾いが出来たら、私は止めますから、貴君一人立派な國に行くが善いです」

憚う言つて彼は死物狂ひに一二度身をものがひて、家路に近い沼の岸の方へ這ひ上つた。彼が行つてしまつたので、基督者は最早彼を見なかつた。

基督者は獨り落膽の沼の中に取残されて轉んだり起きたりしてゐた。けれども彼が這ひ上らうと努めたのは、家路に遠く、小さい門へ近い沼の岸の方である。彼はいかに力を盡せども、脊に負つてゐる重荷のために這ひ上れなかつた。けれども私が夢の中で見てゐると、助力者といふ人が側に來て、「何をそこで仕てゐるのか」と問ねた。

「貴下」と基督者が言つた。「私は傳道者といふ人からこの路を進んで、彼處の門へ行つたら、來るべき怒を避けることが出来ると思はれておりましたのでな。こゝまで參りましたが、此沼に落ちてしまひました」

助。「どうして貴君は踏石を見なかつたのですか」

基。「あまり怖ろしさに近路を逃げやうとしたので、陥ちました」

そこで、助力者は「手を伸しなさい」と言つた。基督者が手を伸すと、助力者は彼を引上



げて(時四十)安全な地に置いて、その路を進んで行きなさいと告げた。

そこで私(夢を見て)は基督者を助け出した人の許に歩み寄つて、「もし、貴下。此處は滅亡の市から彼方の門へ行く路なのでせう。さうしたらこの地面を繕つて、もつと安全に憐れな旅人が彼處に行れるやうにしたら善いでせうにな」と言つた。

すると彼は私に言つた。「この泥深い沼は繕ふことが出来ない場所です。人々が自分の罪を認める時に隨いて来る泡と汚物とが絶えず流れてこの窪地に入るので、これは落膽の沼と呼ばれます。罪人が自分の浅ましい状態から目を醒しても、まだその靈魂には多くの恐怖と疑惑が起るので、その落膽した恐怖が皆な一緒になつて、此處へ滞るのです。この地面の悪いのはさういふ譯があるからです。」

「此處をこの儘悪くしておくのは王様の御意ではありません。王様の労働者は陛下の測量師の指圖によつて、これまで千六百年間もこの小さい地面を繕はふと思つて働いてゐるのです。私の識つてゐる所では、此處を善き土地にするには有益な教草が一番善い材料だといふので、尠くとも二萬輛(さやう數)にしたら幾百萬の教草を四季絶間なく王の領地の諸方から持つて来て、これを繕はうと思つて埋めて見たのだが、矢張相變らず落膽の沼です。この後どれほ

ごのことをしても矢張この通りでせう。

「實際立法者の指圖で、堅固な善い踏石がこの沼の真中にも置いてあるのです。だが、天氣が變つたやうな場合に汚物が澤山に流れ込むと、踏石は見えなくなつてしまふ。さうでなくつても、旅人の頭が眩んで、踏石のあるのを知ずに、他を歩くので、泥まみれになつてしまふ。然し、あの門までゆけば、地は善くなるのです。」

私が夢の中で見てゐると、此時柔弱者は家に着いた。近所の人達は彼を訪ねて来た。戻つて来たのは伶俐だと言ふ者もあるし、基督者と一緒に無鐵砲なことをしたのは馬鹿だと言ふ者もあつた。又彼の卑怯を笑ふ者もあつた。試り出したら、僅ばかりな困難のために止めるといふ法はないと言つた。柔弱者は人々の中にしほくとしてゐた。けれども遂には餘程信用を回復した。

やがて人々は話を變へて、そこにゐない憐れな基督者を嘲笑つた。

基督者は獨り寂しく歩いてゆくと、遠く野原を横切つて、向ふから自分の方へやつて来る人を見付けた。二人は偶然にも互に路を横切る時に出遇はした。この紳士の名は世才氏といつて、基督者が出立して来た所から近い、甚だ大きな、肉慾といふ町の人であつた。この人は



基督者に出遇つて、多分これだと思ひついた。(基督者が滅亡の市から出立したことは、彼が住んでゐた町のみならず、その他の場所でも喧ましく風評されてゐた) それ故世才氏はその行きなやめる状や嘆息や呻き聲などを眺めて、これが基督者だらうと想つて、話しかけた。

世。「もし、貴君はそんな重荷を負つて何處へお出でになるのですか」  
基。「實際重荷を負つた此の風體は自分ながらあきれまします。何處へこのお尋ねですが、私はあそここの小さい門へ参るのでございます。彼處へ行けば、この重荷を免かれる仕方があると教へられましたのです」

世。「貴君にはお家内やお子さんがおありですか」

基。「ありますが、この重荷を負つてから、前のやうに妻子のことを嬉しく思へません。まあ、妻子はないも同様です。(七〇廿九)

世。「御相談して見たいことがありますが聴いて下さるか」

基。「善事でしたら、何なりとも。善い相談にあづからねばならぬ場合にあるのですから」  
世。「それなら忠告しますが、貴君は早くその重荷を下したら善いでせう。さもなければ貴君の心はいつまでも落着きませんわい。又神が貴君に賜つた祝福の利益をも味ふことが出

来ないでせう」

基。「私の求める所はこの重荷を免れることなのです。ところでそれが自分では出来ません。又私達の國では誰も私の肩からそれを取つてくれる人はいないです。それ故お話ししましたやうに、此重荷を免れたいばかりに、この路を歩いてゆくのです」

世。「重荷を免れるために此路を行けと貴君に告げたのは誰ですか」

基。「それは大變偉さうな尊い人のやうでした。名は傳道者と言はれました」

世。「そんな莫迦なことを言つたんですか。その人が貴君に指圖したほど危険な難澁な路は世界にありませんや。貴君がその人の勸言に従つてごらんなすつたら、成程と解るでせう。見受るところ、もうこれ迄でも、餘程貴君は難澁されたやうですな。落膽の沼の泥がまだ貴君の身に着いてゐるやうですね。だが、あの沼は悲しみの初めで、これから先が大變ですぞ。まあ、まあ、私は貴君より年上だから、お聴きなさい。貴君はこれから進むと、疲勞、苦痛、飢餓、危難、赤裸、劔難、獅子、龍、闇黒といふやうなものに出遇ひなされる。一口に言へば、死に出遇ひなされるのだ。これは今までも多くの證據があるんですから、確かな事ですよ。見も知らぬ人の言ふことを聴いて、そんな無分別に身を棄る法があるものですか」



基。「さうですか。しかし、私の負つてゐるこの重荷は貴君の今仰やつた事を皆な寄せたりも私にはもつと怖しいですからね。いや、私はこの重荷を下すことが出来るなら、路でどんな事に遇つても願ひません」

世。「さうして初めそんな重荷を負うやうになつたんですか」

基。「私の手に持つてゐる此の書物を讀んでからです」

世。「さうでせう。氣の弱い者は誰でもあまり高尚な事に關はると、突然貴君のやうな煩悶に陥るものだ。その煩悶は貴君のその容子でも解るやうに、人間を人間らしからざるものにするばかりか、どんなものか、自分でも解らないものを獲たがる氣違地味な真似をさせるものですぞ」

基。「私は獲たいと思ふものを承知してゐます。それはこの重荷を下して安心することです」

世。「でも、こんなに多くの危難が伴ふことを知りながら、さうして安心をこの路に求めるのですか。殊にですな（まあ暫く辛抱してお聴きなさい）、私の指圖する通りになされば、この路を行つて出遇ふやうな危難を受けずに、貴君の求めるものを獲られますのだ。さやう、救助は手近にあるです。そればかりか、こんな危難の代りに、充分安全に、友情と満足を受

なされるでせう」

基。「どうぞその秘訣を私に明して下さい」

世。「彼處の村（道徳村といふ）に遵法者といふ仁が住んでをられる。大變思慮の深い、名高い人で、貴君の負つてゐるやうな重荷を肩から下して人助けをするのが上手です。さやう、私の知つてゐるだけでも、これまでさうして善い事を澤山された。それから重荷のために稍頭の狂つた人達を治すのが上手です。その人の許へ御出でなさい、直ぐ助けてくれます。その人の家は此處から一哩ほどはあります。若し留守だったら、儀禮者といふ綺麗な若い息子さんが居りますからな。その息子さんも老父さん同様に中々上手なものです。だから、何れにしても貴君は重荷を下してもらへます。それから、貴君は以前の住家に歸らないでも善いなら、實際私はお歸りにならないことを望みますが、さうすれば此村には今空家が澤山あるから、内儀さんやお子さん達を御呼び寄せなさい。家は安く借られます、食物も廉くつて品が善いです。生活は極めて樂なものです。何しろ、近所隣人は正直ですし、風俗は偽がなくつて善いですからな」

今や基督者は尠し途方にくれた。この紳士の言ふことが眞實ならば、その忠告に従ふこと



は最も賢い道であると間もなく決心して、更に進んでかう言った。

基。「では、その正直な方の家へはどう行きますか」

世。「あそこに高い山が見えませうか」

基。「えい、能く見えます」

世。「あの山の側にお出でなさい。お出でなすつて最初の家がそれですから」

そこで基督者は路を變へて、救助を乞ふために遵法者の家に行くことにした。山の側まで来て見ると、中々に高い。路の方へ寄つた山腹は覆ひかぶさるやうなので、基督者は山が頭の上に落ちて来ることを恐れて、それ以上進む氣になれなかつた。彼はそこに静然と立つたまゝ、どうしてよいかわからなかつた。彼の重荷は前の路を歩いてゐた時よりも、一層重くなつたやうである。山からは火の煙が現はれたので、基督者は焼れはしないかと心配した。冷汗をかいて、ふる／＼慄へた。そこで世才氏の勸言に従つたことを悲しみ始めた。その時自分に関ひに傳道者がやつて来るのを見た。その姿を見て彼は恥かしさに顔を赤めた。傳道者は益々近くやつて来た。側へ寄つて、眞面目な怖い顔を彼の方へ向けて、基督者を詰問つた。「茲で何をしてゐますか、基督者さん」と彼は言つた。その言葉に基督者は答ふる所を知ら

なかつた。唯黙つてその前に立つてゐた。そこで傳道者は尙進んで言つた。

「貴君は滅亡の市の壁の外で泣いてゐた方ではないですか」

基。「いかにも、さやうです」

傳。「私は貴君に小さい耳門の方へ往く路を教へませんでしたか」

基。「いかにも、さやうです」

傳。「どうしてかう早く側路にそれたのですか。貴君は今路の外にをりますぞ」

基。「私は落膽の沼を越ると間もなく、一人の紳士に遇ひました。その方が、あそこの村へゆくと、この重荷を下してくれる人があると教へてくれましたので」

傳。「どんな人物でしたか」

基。「紳士然とした人で、種々な事を言つて、遂に私を説伏せしめました。で、私は茲まで来たのですが、この山が路の上に覆ひかぶさつてゐるのを見ると、突然立ち竦みました。頭の上に落ちて来さうですから」

傳。「その紳士は貴君になんと言ひましたか」

基。「はい、何處へ行くと問ねましたので、私はそれを話しました」



傳「さうしたら何と言ひました？」

基「私に家族があるかと問ねますので、あることは有るが、私の脊に重荷を負はされてゐるので、前のやうに家族と一緒にゐても楽しくなくなつたと言ひました」

傳「さうしたら其人はなんと言ひました？」

基「其人は早く重荷を免れなさいと言ひますので、免れたいは山々なので、彼處の門へ行つて、救助の場所へはさう行つたらよいか、そこで指圖を受けるつもりですと言つてやりました。さうすると彼はもつと善い近路があると言ひました。それは貴君が私を出立させなかつたやうな困難の伴はない路ださうです。其路をゆくと、このやうな重荷を下すに妙を獲てゐる紳士の家があると言ひますので、私は其人を信じて、若しや容易くこの重荷を免れぬものかと思つて、路を變へて茲まで參りました。所で此處まで來ると、御覽のやうな物を見たので、その危険を怖れて、立留りましたが、さうして善いか解らないのです」

やがて傳道者は言つた。「暫く靜に立つてお出でなさい。神の言葉を貴君に示しますから」

基「そこで傳道者は言つた。「爾曹慎みて告ぐる所の者を拒むなかれ。もし彼等地にて示せるも

のを拒みしならば、まして天より示せる者を拒みし我等免かるゝことを得んや」(ヘブライ十)

それから又言つた。「義人は信仰に依りて生くべし。もし退かば、わが靈魂に適はざるべし」

(ヘブライ)それを適用してかう言つた。「貴君はこの不幸に走り込もうとする方です。貴君はいと高き者の勸言を拒げ、御自分の足を平和の路から退かうとしてをられるのです。敢て自ら滅亡に落ちなされるのですぞ」

そこで基督者は死せるが如くその足下に倒れて、「私は禍です、滅びてしまひます」と叫んだ。

それを見て、傳道者は彼の右の手を捕へて、「凡ての罪と冒瀆とは人に赦されん(マタイ十)

信せざるなかれ、唯信せよ(ヨハネ二十)」と言つた。

そこで基督者は妙し元氣づいて、前のやうに傳道者の前に慄へながら立つてゐた。

傳道者は進んで言つた。「もつと熱心に今お話しすることを聴いて下さい。先づ貴君をかごはかした者は誰か、又誰の所に貴君を遣うとしたのかお話しませう。貴君の遇つた其人は世才者といつて、其名の通りに、此世の教理ばかり好きです。(だから、いつも道德町の教會へ行くです)。又彼がその教理を無上に愛するのは、十字架もなにも要らんからなのです。そ



れから又彼はその俗人根性から、私の路の方が正當でも、邪魔立をするんです。あの人の勸言の中で、貴君が全然嫌はねばならん事が三つあります。

- 一、貴君をかゝる路から離れさせたこと。
- 二、十字架を貴君に嫌はせるやうに努めたこと。
- 三、死の管轄内に到る路に貴君の足を入れさせたこと。

第一、貴君は彼がその路から貴君を離れさせたこと、貴君がそれに同意したことを嫌はねばなりません。それは世才者の勸言を聞いて、神の勸言を拒むからであります。主は窄き門より入ることを努めよ（ルカ十三）生命に到る門は狭し、それを見出す者稀なり（マタイ七〇）と仰せられた。それは即ち私が貴君を送つた門のことです。あの小さい耳門からまたそこへゆく路から、あの悪者は貴君を誘ひ出して、滅亡の方へ連れて行かうとしたのです。だから、彼が貴君をあゝの路から誘ひ出したのを憎みなさい。またその言ふ事を聞いた御自分を嫌ひなさい。

第二に、貴君は彼が十字架を貴君に嫌はさせるやうに努めたことを嫌はねばいけません。それは埃及の財寶以上に撰ばねばならぬものです。そればかりか、榮光の主は、その生命

を救はんとする者はこれを失ふべしと仰せられたでせう。主に隨はんとする者は、父母妻子兄弟姉妹、いや自分の生命すら憎まなければ、その弟子たることは出来ないのです。だから、さう仕ないでは、眞實のところ、限りなき生命を持つことは出来ない、所でそれを貴君の死であるやうに熱心に説き勧める者があるのだから、さういふ教理を貴君は憎まなければならぬ。

第三に、貴君は彼が死の管轄に到る路に貴君の足を入れさせたのを憎まなければならぬ。これについて、貴君は誰の所に彼が貴君を送らうとしたのか、又その人が貴君の重荷を下させることは到底出来ないことを考へなければならぬ。

貴君が重荷を下してもらふために遣れた其人は、違法者といふ名で、奴隷婦人の息子です。その婦人は今も生きてゐて、その子供達も同様に奴隷の身分です（ガラテヤ四〇）。それから貴君が頭の上に落ちさうだと怖れなすつたこのシナイ山は、不思議に今も残つてゐるのです。その婦人も子供達も奴隷の身であるのに、どうして貴君は彼等から自由にしてもらふことが出来ませう。だから其の違法者は貴君を重荷から自由にするには出来ない。これまで彼に依つて重荷から免れたものは一人もありません。これからも有りやうがない。人は律法の行に依



つて義とせられることは出来ない(ロマ三) 律法の業に依つて活ける人は誰も重荷を免れることは出来ないからです。だから、世才者は異邦人で遵法者は欺偽師です、その息子の儀禮者にはこゝく作り笑をしてゐても、唯の偽善者で、貴君を助けることは出来ない。實際あんな莫迦共からお聴きになつた空騒の中には、貴君を感はせて、私が貴君を置いた路から連れ出して、貴君の救を邪魔をしようといふ企畫のほかに何にもないです

怒う言つて傳道者はその言葉を確むるために聲高く天に叫んだ。すると憐れな基督者が麓に立つてゐた山から言葉と火が吹き出たので、身の毛が逆立つた。その言葉はかう響いた。「凡そ律法の行によるものは詛はるべし。そは律法の書に記せる凡ての事を絶えず行はざる者は詛はると記さるれば也」(ガラテヤ)

今や基督者は死ぬほかに仕方がないやうなので、悲しげに泣き出した。世才氏に出合つた時をすら呪つた。幾度も繰返しては彼の勸言に耳傾むけた自分を莫迦者と呼んだ。又かの紳士の議論は唯肉情から出たものであるに、義しい路を棄てさせるほど自分を支配するに至つたことを想ふと大に恥しくなつた。さうしてから、彼は次のやうな言葉と意味で又傳道者に問ねた。

基、「貴君はどうお考へですか。どうにか希望がありませんか。私が今立戻つたら耳門の方へ進めませうか。こんなとのために見棄られて、そこから恥かして追歸されはしないでせうか。あの人の勸言に耳を貸したことはいかにも残念ですが、私の罪は赦されませうか」  
傳道者は彼に言つた。「貴君の罪はいかにも大きい。貴君はそれに依つて二つの悪を犯しなすつた。即ち善い路を棄てなされたこと、禁じられた路に踏込みなすつたことである。併し耳門を守る人は貴君を受容れませう。人々に好意のある方ですから。唯一と言葉を次ぎ「もう二度と側路に入らぬやうに用心なさい。主の怒が渺しても燃えると、路で滅されますか  
らな」(詩二〇)

二

やがて基督者は立戻る支度をした。傳道者は彼に接吻して、こゝくしながら道中氣を付けてお出でなさいと告げた。彼は急ぎ足に歩いて、路で遇ふ人には誰にも言葉を交へなかつた。又誰かに物を問れても、答へもしなかつた。禁制の地に踏込んだ人のやうに歩いた。世才氏の勸言に従つて後にした路へ出るまでは、決して安らかな想はしなかつた。斯して幾時





基督者耳門に入る

正 譯  
 か立つて、基督者は門へ達した。その門の上には、「叩けよ、さらば開かるべし」と記してあつた。で、彼は再三叩きながら、かう言つた。

「われを茲へ入らしめてよ。」

憐れみて開けたまへ、

値なき謀叛人としていかでその、

盡きせぬ讚美歌はざらん」

遂に好意者といふ沈着ひた人が門へ出て来て、「ごなたか、どこからお出でなすつたか、どういふ御用ですか」と問ねた。

基、「重荷を負つた憐れな罪人でございます。私は滅亡の市から参りまして、来るべき怒から救はれたために、シオンの山を指して行く者でございます。この御門を通行して参るやうに教へられました。何卒お通し下さいませうやうにお願ひいたします」

好、「それはどうも。悦んでお通しませう」と言つて、門を開けた。そこで基督者が歩いて入らうとすると、かの人に引張こまれた。基督者は「どういふ譯ですか」と言つた。するとかの人は話した。「この門から少し離れた所に、堅固な城がありまし



て、ベルゼブルがその大將です。そこから其の悪魔と部下の者共がこの門に来る者を内に入らぬ前に殺さうと思つて矢を放つものですから」

そこで基督者は「危ない所を有難うございました」と言つて、内へ入ると、その門番の人が、「誰の指圖で茲へお出ででしたか」と問ねた。

基。「傳道者さまに此方へ參つて叩くやうに教へられましたので、さう致しました。又、此方へ參れば、私が爲すべきことを言つてきかされるからこの事でした」

好。「開ける戸は貴君の前にあります。誰もそれを閉ることは出来ません（歌示三）

基。「今になつて私の骨折の効能が解り出しました」

好。「どうしてお一人で來なすつたか」

基。「私の近所の人達は誰も私のやうに身の危険を悟りませんから」

好。「誰か貴君の御出立になつたのを知つてますか」

基。「はい、私の妻子が最初私を見つけて、呼び戻さうとしました。それから近所の人達も大きな聲を出して、呼び戻さうとしましたが、私は指で耳を掩いで、やつて參りました」

好。「でも誰か貴君を歸らせやうと思つて、隨いて來ませんでしたか」



基「はい、強情者と柔弱者が。ですが、説服せることが出来ないことを悟つて、強情者は嘲りながら歸るし、柔弱者は妙しの間私と一緒に來ました」

好「どうして彼はこゝまで來ませんでしたか」

基「落膽の沼に來るまでは一緒に進んでしたが、その沼に突然落ちました。さうすると隣人の柔弱者は落膽して、それ以上進めませんでした。自分の家へ近い方に這ひ上つて、自分に代つて、その立派な國を獨り獲よと私に言ひ残して、彼はその路に歸り、私は私の路を參りました。彼は強情者の後を慕ひ、私はこの門を慕ふたのでございます」

そこで好意者が言つた。「あゝ、可哀な者だ。天の榮光は彼にとりて、それを獲るために僅かな危険を犯す價值がないほどつまらぬものだらうか」

基督者が言つた。「柔弱者のことを打明けてお話ししましたが、實際私のもも打明けてお話ししたせば、彼と私との間には何も優劣はないのでございます。彼が自分の家へ歸つたことが眞實なら、私が世才氏といふ人の俗論に動かされて、死の路へと側にそれたことも眞實です」

好「あゝ、あの男にお會ひでしたか。なに、あの男が貴君を違法者の手で重荷を下させや

うございました。あれは二人共欺偽者ですぞ。それで貴君はその勸言に従がひましたか」

基「はい、我慢の出來るだけ従ひました。違法者を尋ねて、その家の側に聳へてゐる山が私の頭の上に落さうになつてゐる所まで參りましたが、そこで詮方なく立留りました」

好「その山ではこれまで大勢死にました。これからも一層大勢死ぬでせう。碎片になる所を、貴君は能く免れましたな」

基「實際私はそこでどうなるのか解りませんでした。氣が沈んで茫然してゐると、仕合せにも亦傳道者さまに御目にかゝりました。あの方が來て下さつたのは、神のお恵みで、さもないければ私は茲へ來られなかつたです。私のやうな者はかうして茲へ來て、かやうに貴君とお話しの出來るやうになるよりも、あの山で死んだ方が適當であつたでせう。いや、此入口を通されたといふのは、私にとりてなんといふ有難いことではせう」

好「茲へ來る者は誰も拒まれはしません。前にどんな事をしてゐても、それは願はないです。誰でも決して棄られはしないです。だから、基督者さん、一緒に妙し歩いて、貴君の行くべき路を教へてあげませう。前を御覽なさい。狭い路が見えませう。それは貴君の行くべき路です。その路を開いたのは、先祖達や、預言者、基督と其弟子達で、定木で作れるだけ眞



直なものです。これこそ貴君の行くべき路です」

基督者が言った。「ですが、旅人が路を迷うやうな曲り角や紆曲つた所はございませんでせうか」

好。「さやう。これに接して路が澤山あります。それは皆曲つてゐて、廣いです。それでも正しい路と正しくない路の見分けは直ぐ着きませう。正しい路は真直で狭いですからな」  
私が夢の中で見てゐると、基督者は尙ほ進んで、脊に負つてゐる重荷を下してくださいと出来ませうかと問ねた。未だにその重荷を免れることが出来ずにあたり、又人の助力を借りなくつては、とてもそれを免れることが出来なかつたのである。

好意者は彼に言った。「重荷のことは、まあ暫らく辛抱なさい。救拯の場所へ御出でなさると、自然に脊中から落ちますから」

そこで基督者は腰の帯を引き締めて、旅の用意をした。すると彼の人はかう言った。「この門から餘程行くと、註釋者の住居のところへ出ますから、そこをお訪ねなさい。その人は立派な事を見せてくれます」

基督者はこの友人に別を告げた。好意者も道中恙なかれと言つた。

基督者は註釋者の家に着くまでやつて来て、その戸を幾度か叩いた。遂に誰か戸口に出て来て、「誰ですか」と問ねた。

基。「私は旅の者でございますが、御家の御主人のお知合の方の指圖で、有益な御教訓を蒙るためにお訪ねいたしました。御主人に御面會をねがひます」

そこでその人は此家の主人を呼びに行つたので、暫くすると、主人が出て来て、「どういふ御用ですかと問ねた。

基督者が言った。「私は滅亡の市から参りまして、シオンの山へ行く者でございます。此路の入口の御門に立つてゐられました方から、此家にお訪ねすれば、旅の心得になるやうな立派な事を教へていただけるといふことを伺ひましたものですから」

註釋者は言った。「お入りなさい。いかにも貴君の益になることをお話し仕ませう」

そこで彼は僕に命じて蠟燭を點けさせて、基督者を案内して、部屋に入つて、僕に一つの戸を開けさせた。戸が開いた時に、基督者は壁に懸けられたいかにも重々しい人の畫像を見た。その様子はどいふに、眼を天に向け、最も善き書物を手を持ち、真理の律法を唇に記し、世界を脊にして立つて、恰も人々と辯論するやうである。金の冠を頭に戴いてゐた。



基督者が言つた。「これはどういふ譯ですか」

註。「この畫像は、千人に一人といふ人です。彼は子供を設けて、生みの苦しみをなし、その子供達が生れると、自身育てなされるのです(コリント前四〇四五)御覽の通り、眼を天に向けて、手には最も善き書物を持って、真理の律法が唇に記してありませう。これは彼の職務が暗き事共を先づ知つて、罪人に釋き明すにあることを表はすのです。御覽なさい、彼は立つて人に教を説いてをるやうでせう。又御覽の通り、世界に脊中を向けて、冠を頭に被つてゐる。これは彼が主に使へる愛のために、今在るものを輕んじ卑しみて、來世には必ずその報ひとして榮光を獲ることを表はしたのです。」註釋者は尙ほ語を次ぎ、「貴君に先づこの畫像を御らんにいれたのは、これは貴君の行かれる場所の主がこの路で出遇しなされる難澁な場所で、貴君の案内者となるやうに言ひ付けられた唯一の人だからです。だから、私が御目にかけたことを善く御注意なさい。又御らんになつた所を善く心に留めて、旅行中貴君を正しい方に導くやうな振をするものがあつても、それは死にゆく路ですぞ」

やがて彼は基督者の手を取つて、いと大きな客間に案内した。それはこれまで掃除したことがないので、塵だらけであつた。註釋者は暫らく室内を見廻してゐたが、やがて僕を呼んで掃除をさせた。掃除が始まると、埃が澤山飛ぶので、基督者は息が詰りさうであつた。註釋者は側に立つてゐた少女に、「茲へ水を持って來て、部屋に撒きなさい」と言つた。少女が水を撒くと、心持の善いほど綺麗に掃除が出来た。

基督者が言つた。「これはどういふ譯ですか」

註釋者が答へた。「この客間は福音の清き恩寵に依つて潔められたことのない人の心です。この塵はその人の全身を穢した生來の罪、内心の腐敗です。最初掃除を初めた僕は即ち律法です。それから水を持つて來て、それを撒いた少女は即ち福音です。御覽の通り、最初掃除を始めると、埃が飛び散つて、あの男では部屋が綺麗にならず、貴君は息が詰りさうでした。でせう。これは、律法といふものはその働きに依つて、罪から心を潔めないばかりか、いくらかそれを見付けて禁じても、活き返つて、元氣づいて、靈魂の裡に増加して、これを征服する力がなくなることを表はしたのです。」

「それから御覽の通り、少女が部屋に水を撒くと、心持の善いほど綺麗になつたでせう。これは福音が心に清い貴い感化を及すと、御覽の通り、少女が床に水を撒いて塵を鎮めたやうに、罪は敗れて征服されて、靈魂はその信仰に依つて潔められて、その結果榮光の主と共に



住むに應はしくなることを表はしたのです」

尙ほ私が夢の中で見てゐると、註釋者は彼の手を取つて、小さい室に案内した。そこに二人の小さい子供が各椅子に腰をかけてゐた。年上なのは名を情熱者と云て、他の一人は忍耐者といつた。情熱者は大變不満足らしいが、忍耐者はいかにも落着いてゐた。基督者は「どうして情熱者は不満足ですか」と問ねた。註釋者は答へた。「この二人の後見人が來年の始めまでに、至極善い物を下さるといふのですが、情熱者はそれが今欲しいと言ふし、忍耐者の方は快く待つてをるのです」

やがて見てゐると、一人の者が情熱者の側へ、財寶の袋を持つて來て、その足許にうち開けた。すると彼はそれを取り上げて、さも嬉しさうに、忍耐者を嘲り笑つた。暫らく見てゐると、彼はそれを皆費ひ果して、襤褸のほか何にも彼に残らなかつた。

やがて基督者は註釋者に言つた。「もつと精しくこの譯を私に説明して下さい」

註釋者は言つた。「この二人の少年は模型です、即ち此世の人の情熱と來るべき世の人の忍耐を表はすのです。御覽の通り、情熱者は今年中即ち此世にて何もかも得ようとしてゐる。この世の人は皆かうです。彼等は現在凡て善きものを持ねばならない。來年即ち來世ま

で、善きもの、配分を待つことが出來ない。「手の中の一羽の鳥は籠の中の二羽」といふ諺は、來世の善きものに對する有らゆる神の證明よりも彼等にこりて一層力があるのです。だが、御覽の通り、彼は忽ち皆な費ひ果して、現に襤褸のほか何にも残らなくなつたでせう、それと同様に斯る人々も此世の終りにはさうなるのです」

基督者は言つた。「私は忍耐者が極めて善き智慧を持つことを、多くの理由から悟りました。第一、彼は極めて善きものを待つてゐるからです。第二に彼は他の人が襤褸のほか何も持たない時に、榮光を持つ身となるからであります」

註。「いや、それにもう一つ附加すべきことは、來世の榮光は決して滅ぶるとは無いが、此世の榮光は突然過ぎ去ることです。だから、情熱者は初めに最も善い物を持つたからといつて、何も忍耐者を笑ふ理由はない。却つて忍耐者は最後に最も善き物を持つので、情熱者を笑ふべきであらう。なせといふに、後の者は時節が來れば必ず來るので、前の者は後の者に場所を譲らなければならぬ。だが、後の者は誰も隨いて來る者が無いので、何者にも場所を譲らないでも善いのです。だから、初めに配分を持つ者はそれを費ひ果す時がある筈ですが、最後に配分を持つものはいつまでも限りなく、それを持つべきである。だから、かの富



める者に對しても、「汝は生ける時に善き物を受け、又ラザロは悪しき物を受けたり、されば今や彼は慰められ、汝は苦しめらる」(ルカ十六)と言はれたのです」

基「それで今ある物を貪るよりも、來るべき物を待つのが最上なことが解りました」

註「仰やる通り、見える物は一時で、見えざる物は永久です。それはさうですが、此世の物と私共の肉の嗜慾とは互に隣り同志でせう。然るに來るべき物と肉慾とは全く赤の他人ですからな。一方は忽ち仲好くなるし、又一方は絶えず離れぬくなるものです」

私が夢の中で見てゐると、註釋者は基督者の手を取つて、或る場所に案内した。そこには壁に對つて火が燃えてゐた。一人の者がその側に立つて、常に多量な水を洒けて、それを消さうとしてゐるが、火は益々高く、ますます熱く燃え立つた。

そこで基督者が言つた。「これはどういふ譯ですか」

註釋者は答へた。「この火は心情に働く恩寵の業です。それを消し止めやうと思つて水を洒ける者は悪魔です。だが、御覽の通り、それにも係らず火は益々高く、益々熱く燃え立つのです。その理由を貴君に見せませう」

恚う言つて基督者を壁の後側に連れて行つた。そこには一個の人が手に油の器を持つて、

絶えず窓に火へ洒けてゐた。

基督者は言つた。「これはどういふ譯ですか」

註釋者は答へた。「これは基督です。絶えずその恩寵の油を持つて、人の心情に始められた業を保持るゝのです。さういふ譯なので、悪魔がどんな事をして、基督の民は尙その靈魂に恩恵を受けるのです。御覽の通り火を保つために壁の後に人が立つてゐるでせう。これは誘惑された者にとりて、この恩寵の働きがその靈魂をどんなに保つてゐるかを認めることの困難を表はすのです」

私が見てゐると、註釋者は又彼の手を取つて、愉快な場所へ案内した。そこには壯麗な宮殿があつて、見る所美はしかつた。基督者はそれを見て大に歡んだ。ある人々が全身黄金の衣を着て、その上を歩いてゐるのを見た。

基督者は言つた。「私共も彼處に行きませうか」

註釋者は彼を連れて、宮殿の戸口の方へ案内した。見よ、戸口には大勢の人が入りたいやうだが、敢て入らうとはせずに立つてゐた。戸口から少し離れて、一個の人が洋卓の側に座つて、一冊の書物と印氣壺を前に置いて、そこへ入つて來る者の名を書き留めやうとして



みた。又その入口には甲冑を着た多くの人が立つて守つてゐて、そこへ入らうとする者の目に物見せくれんと待構へた。今や基督者は稍々仰天した。遂に人々は甲冑着た者共を恐れて後退りした。その時いかにも逞しい容貌をした人が書名するために座つてゐる人の所へやつて来て、「どうぞ、私の名を書附けて下さい」と言つた。さうしてから、彼は劔を抜いて、頭に甲を被つて、武装せる者共をめぐりて戸口の方へ突進した。彼等は死力を盡して彼を防いだ。その人は少しも屈せず、縦横無盡に斬り捲つた。かくてわが身にも數多の傷を受け、拒げる者共にも數多の痛手を負はせてから、敵の中に路を切開いて、宮殿の内へ進み入つた。すると楽しい聲が内から聴えて、宮殿の上を歩いてゐる人々すら、かう言ふのであつた。

「來れや、來れ、

永遠の榮光は、汝のものぞ」

かくて彼は内へ行つて、人々と同じやうな衣裳を着た。そこで基督者は微笑んで、「私にもこの譯は解るやうに思ひます」と言つた。

基督者は言つた。「これで御暇いたしましたせう」

註釋者は言つた。「まあ、暫らく、もう少し、御目にかけるものがある。それからお出立

なさい」

彼は又基督者の手を取つて、いと暗い室に案内した。そこには鐵の檻の中に一個の人が座つてゐた

その人は見たところ、いかにも悲しうに、眼を地に垂れ、手を拱いて、心の破れるやうに嘆息をしながら座つてゐた。基督者は言つた。「これはどういふ譯ですか。すると註釋者は自分で問ふて御覽なさいと言つた。

そこで基督者はその人に言つた。「貴君はどういふ御方ですか」

その人は答へた。「私は元來こんな者ではなかつた」

基「元來はどういふお方でしたか」

その人は言つた。「元來は天晴立派な信者だ、自分も思ひ、他人も許した者です。元來は自分ながら、天の都に適しい者と思つて、彼處にゆけると想つては歡んだ者です」

基「で、今はどうなすつたか」

その人。「今は絶望の人で、かうして鐵の檻に閉込られて居るです。免れることは出来ませぬ。あゝ今は免れられない」



基。「で、どうしてこんな有様におなりでしたか」

その人。「目を醒して氣をつけることを忘れたので。色慾を縦にしたり、神の言葉の光と善に對して罪を犯したり。聖靈を憂へさせて、これに去られ、悪魔を招いて、これに來られ、神さまを怒らせて、これに見棄られ、遂に私の心情は硬くなつて、悔改めることも出來なくなりました」

そこで基督者は註釋者にむかつて言つた。「かういふ方には、もう望みはないものですか」

「この人に尋ねなさい」と註釋者が言つた。

基督者が言つた。「貴君が絶望の鐵の檻の中に是非入つてゐるほか、望みはないでせうか」

その人。「えい、全くありません」

基。「どうしてですか？ 祝福の御子は、大變慈悲深い方ですのに」

その人。「私は自分のために新しく彼を十字架に磔りました。その人格を軽んじました。その義しきを軽んじました。その血を聖からぬ物と思ひ做しました。恩寵の聖靈をも軽んじました。だから私はすべての約束から自分を閉出したのです。で、今は脅迫のほか何も私にありません。確なる審判、烈しき忿怒が仇敵の如く私を喰ひ盡すだらうといふいかにも怖ろし

い脅迫があるばかりです」(ヘブライ六〇四一六、)

基。「どうしてこんな有様に成りなされましたか」

その人。「色慾と快樂とこの世の利益のためです。それさへ自由になれば幾らでも樂しめると思つてゐましたが、今ではそれがこれも、私を咬んで毒蟲の如く身を苦しめるので

す」

基。「ですが、今では悔改めて立ち返ることが出來ませんか」

その人。「神は私が悔改めることを拒みたまふのです。神の御言葉は私の信する心を挫きます。實は神御自身私をこの鐵の檻に閉籠られたのです。私を出すその出來る者はこの世に一人もありません。あゝ、未來永劫、どうして私はこんな辛い目に遇はねばならんだらう」

そこで註釋者は基督者に言つた。「この人の不幸を心に留めて、いつまでも身の戒めとな

りな

基督者は言つた。「いや、怖ろしいことですか。神のお助けで、目を醒して氣をつけませう。

この人の不幸な原因を避けますやうに祈りませう。で、もう、私は出立すべき時ではありませんか」



註。「もう一つ貴君に御目にかけるから、それまでお待ちなさい。御出立はそれからになさい」

彼は又基督者の手を取つて、とある寢間に案内した。そこには一個の人が床から起き出でやうとして、着換をする時に、身をぶる／＼慄はせた。

基督者は言つた。「この人はどうしてかう慄へるのですか」  
註釋者はその譯を基督者に話さないで、その人に言つた。

そこで其人は語り出した。「私は今晚睡てゐて、夢を見ました。天が眞黒になつて、雷は鳴る、稻妻はする。その物凄さに私は苦しくなりました。夢の中で仰向いて眺めると、雲が幾重にも千切れて、喇叭の大きな聲が聴えた。又一片の雲の上に一個の人が座つて、幾千の天上の民がそれに従つた。彼等は皆な燃ゆる焔の中にあつたので、天上も燃ゆる焔のやうであつた。やがて『起きよ、爾曹死せる者、審判に來れ』と言ふ聲を聴いた。

「それと同時に岩は裂け、墓は開かれ、その中に死せる者は皆出て來た。非常に歡んで、上方を眺めてゐる者もある。山の下に身を隠さうとしてゐる者もある。やがて雲に座れる人が書物を開いて、世の者共に近寄れと告げた。然し烈しき焔が彼の前から流れ出でたので、

彼と彼等の間を分け隔て、恰かも法廷で判事と囚人と相對するやうでした(廿八、廿九)。

「又雲に座れる人がお伴の者共に、『莠と糠と切株とを一緒に集めて、火の湖に投入よ』と命するのを聴きました。すると恰度私の立てる側に、底なき坑が開いて、その口から、夥多しく黒煙と火の炭とが凄まじい音をして出て來ました。又同じ人が、『わが麥を倉に收めよ』と言ひました。すると數多の人が捕へられて雲の上に運ばれて、私だけ後に残りました。私も身を隠さうとしたが、出來なかつた。雲に座つてゐる人がまだ自分に眼を付けてゐたからである。私の罪は又心に浮んで來た。私の良心は八方から私を責めた。そこで私は睡眠から醒めました(四〇、四一、四二、四三、四四、四五)。

基。「どうして、そんな夢を見たわけで、怖がりなさるのですか」

その人。「いや、私は審判の日が來たのに、何の用意もしてゐないと思ひましたので。それから何より怖かつたのは、天の使はさまざまの人を集めて行つたのに、私だけ取殘されたこと、地獄の坑が恰度私の立つてゐる所に口を開いたことでした。私の良心は又私を惱ました。それから審判者がいつも私に目をつけて、容貌に怒色を含んでゐるやうに思ひましたので」





基督者重荷を失ふ

註釋者は基督者に言つた。「凡てこれらの事を能くお考へになりましたか」

基。「はい、これに依つて希望と恐怖を覚へました」

註。「凡てこの事を能く心に留めておきなさい。これからお進みになるべき路で、貴君を勵す刺馬輪ともなりますから」

そこで基督者は腰の帯を引締めて、旅立うとした。

註釋者は言つた。「では、基督者さん、慰安者いつも貴君と偕にありて、都に上る道すがら、貴君を導きたまはんことを」

そこで基督者はかう言ひながら、路を進んだ。

「珍らしき益ある事をわれは見ぬ。」

「楽しく怖ろしき事をわれは見ぬ。」

手に取んとする心根を堅うする事われは見ぬ。

われをして心にそれを思はしめ。

その示せるどころ悟らしめてよ。

あゝ善き註釋者よ、いざ汝に感謝せん」



私が夢の中で見て居ると、今しも基督者が差かゝつた往來は、兩側か石垣で圍れてゐた。其は救拯の垣と呼ばれた。基督者は脊に荷を負つて、勢からず難澁しながら、此往來を急いだ。彼はかうして稍登りになる場所へ來るまで急いだ。その場所に一つの十字架が立つてゐた。その少し下つた麓に一つの墓があつた。私が夢の中で見てゐると、基督者が十字架の側まで上つて來ると、その重荷は肩から弛んで、脊から落ちて、ころ／＼と墓の口まで轉がつて、そこへ落ち入つて、もう見えなかつた。

そこで基督者は嬉しく晴々して、いかにも楽しさうにかう言つた。「主は御自身の悲哀に依つて私に休息を下され、又御自身の死に依つて生命を下された」  
 彼は尙暫らく立つて、不思議さうに眺めてゐた。十字架を見た爲めにかやうにその重荷から安らかになつたのは彼にとりていかにも驚くべきことであつた。で、彼はつく／＼と再三眺めてゐると、頭の中の泉から、涙が頬に流れ出た。彼が立つたまゝ眺めては泣いてゐると見よ、輝ける三人の者が側に來て、「卿平安かれ」と挨拶した。それから第一の者は彼に向つて、「卿の罪は赦されたり」(マコ二)と言ひ、第二の者は彼の襤褸を脱せて、代りの衣も着せ、



又第三の者はその額に記標をつけ、且つ印を押した一つの巻物(エペソ)を與へて、歩みながらこれを讀んで、天上の門に着いたら差出すやうにと告げた。さうして三人は消え失せた。そこで基督者は嬉しさに雀躍して、かう歌ひながら進んだ。

「かくも遙に罪を負ひてわれは來りぬ。」

わが裡にありし憂愁は茲に來て安し。

いかなる場所ぞ、これの地は。

わが祝福の初めは茲ぞかし。

わが脊より重荷の下りしは茲ぞかし。

重荷をわれにくりし紐の斷れしは茲ぞかし。

福ある十字架! 福ある墓よ、

わがために恥を受にし人こそ尙も福なれや」

私が夢の中で見てゐると、彼はかうして、麓の方へ下つてゆくと、路から妙し離れた處に、足械をした三人の者が熟睡してゐるのを見た。一人は淺薄者、次は怠惰者、第三は我儘者といふ名であつた。

基督者はこの時彼等の臥てゐるのを見て、側へ行つて目を醒してやる事が出来るかと思つて、叫んだ。「貴君方は帆檣の上に睡てゐるも同じですぞ(箴言廿三) 死の海は貴君方の下にありますぞ。ごん底のない灣です、だから、目を醒して、茲を去りなさい。御思召があるなら、その足械を取つてあげませう。彼は又かう言つた。「もしや吼ゆる獅子のやうな者(マテロ前)が茲を通りかゝつたら、貴君方は確にその牙にかゝつて餌食になつてしまひます」すると彼等は基督者を見あげて、かういふ答へをした。淺薄者は「危険なことはありはしない」と言つた。怠惰者は「もう妙し睡やう」と言つた。我儘者は「自分の頭の蠅を追ひたまへ」と言つた。そして三人は又ごろりと寝てしまつた。基督者はおのが路を進んだ。そんな危険にある人々を起してやつて、勸め諭して、足械を取つてやらうと、いかにも心置なく親切にしてやつたのに、此方の親切を無にされたのを思ふと、心苦しき次第であつた。かやうに心苦しき思つてゐた時に、細路の左手の石垣を轉落ちて來る一個の人に目がついた。二人は彼の方へ急足で來た。一人は虚禮者といつて、他の一人は偽善者といつた。さて愈々側へ來たので、彼は二人と言葉を交した。

基「貴君方は何處からお出でになりましたか、又どこへお出でになるのですか」



二人。「私共は虚榮の國に生れた者で、シオンの山を拜むために參るのです」

基。「それならどうして此路の取着に立つてゐる門からお出でなさいませんでしたか。門よりせずして、他より越ゆる者は窃賊なり強盜なり」(七〇)と書てあるのを御存じないですか」

二人は言つた。「入口の門に往くのは、私共の國の人は迂遠いと言ひましてね。だから、いつも近路をして、私共のやうにこの石垣を乗り越します」

基。「ですが、私共の指して行く都の主君が發表された聖旨を犯すといふのは、取も直さず罪過ではないでせうか」

二人はそれに對して何も頭を悩ますに及ばない。それは一千年以上も續いたその國の習慣で、必要なら、證據を御目にかけることが出来ると言つた。

基督者が言つた。「ですが、その習慣を律法で吟味したらどうです」

二人は又その習慣が千年以上も長く立つたので、公平なる裁判官に依つて正當と認められた物として今許されることは疑ひないと言つた。それから又言つた。「この路まで来れば、この路から来たつて差支へはない筈です。私共はこの路に居るから、居るのです。見受けまます所、貴君はあの門を入つて、この路に來られたのでせう。私共は又石垣を乗り越えて、この

路にあるのです。今どこに貴君の状態が私共より善い所がありますか」

基。「私はわが主の規則で歩くのです。貴君方は御自分の空想で作られた規則で歩みなさるのです。貴君方はこの路の主より見れば窃賊の仲間です。だからこの路の終になれば、貴君方は誠の人でないことが見露はされませう。主の指圖を受すに自分勝手にお出でになつたからには、又主の仁恵を受すに自分勝手に出て行れるでせう」

二人はこれには答へず、唯自分の頭の蠅を追ひなさいと言つた。やがて三人は互に物をも言はず、想ひ／＼に路を進んだ。唯一度二人の者は基督者に向つて、律法と儀式を守ることにかけては、自分達もおさ／＼彼に劣らないと言つた。二人は尙語を次で、「だから、私共は貴君が私共と異つてゐるやうに思はれない。唯違ふのは貴君の着てゐられる上衣ばかりです。察する所、それは貴君の赤裸の恥を隠すために、隣近所の人達から貰つたものでせう」

基。「律法や儀式を守つても、門から來なければ、貴君方は救はれないでせう。それから私の着てゐるこの上衣は、私の往きます其處の主君から戴いたので。御言葉の如く、私の赤裸を隠すためです。これは親切の記標として戴いたので。それまで襤褸の外何も持つてゐなかつたのですから。これは又歩きながら、私の慰安となるのです。私はいかと思ふです、私



がその都の門へ着くと、身みにその上衣うわぎを着てゐますので、確たしかに善よい者と認められるであらうと。私わたしの襖ついで櫃びを脱ぬせて下くだすつたその日に、無料たふで下くだすつた上衣うわぎですからな。それに又私わたしの額かぶには記標しきひょうがあります。多分たぶん貴君あなた方はお氣きがつかれなかつたでせうが、これはわが主あつの最も親おしき友人ゆうじんの一人ひとりが私わたしの肩かたから重荷おもひを下くだした日に着つけてくれたのです。それから又路みちを歩あきながら讀よんで自ら慰なぐさめろといつて、印いんを押おした巻物まきものを貰もらひました。天上てんじやうの門かどへ着ついたら、私わたしが確たしかに順路じゆんろを辿たどつて來た符號ふごうにこれこれを差さし出だせとのことでした。貴君あなた方は凡まてさういふものを持もつてゐられないでせう。門かどからお出いでがなければ、持もつてをられますまい。

二人ふたりはこれについて答こたへなかつた。唯互たひたひに見合あはせて笑わらつた。やがて皆みなその路みちを進すすんだ。基督きりす督と者は一足先ひとしきへ歩あひいて、最早いちばやく口くちを利きす、唯心たひこころの裡うちで、嘆息たんそくしたり、慰なぐさめられたりした。又幾またいく度も輝かがやける者ものの一人ひとりから貰もらつた巻物まきものを讀よんでは、元氣げんきづいた。

やがて私わたしが見みてゐると、彼等かれらは共に困難くわんなんの岡おかの麓ふもとまで來た。其麓そのふもとに一つの泉いづみがあつた。又そこには門かどから真直まっすぐに通つうずる路みちの他に、二つの他の路みちがあつた。岡おかの麓ふもとで、右みぎと左ひだりに曲まがつてゐた。けれどもかの狭せまい路みちは直ちかに岡おかへと差掛さしかつた。岡おかの此方こちらの登のぼり路みちは困難くわんなん坂さかと呼ばれた。今基督いまきりす督と者は泉いづみへ行いつて、清水しみづを飲のんで、元氣げんきをつけて、それから岡おかへ登のぼりながら、かう歌うたつた。



困難の岡を登る基督者



「岡は高くも、われは登らん。」

困難いかで、われを挫くべき。

生命の路茲に在りを見るからは。

いざ振へ、心情よ、弱るな、怖るゝな。

困難なりとも、正しき路を行くぞ善し。

容易なりとも、悪しき路の末は禍ぞ。」

他の二人も亦岡の麓へ来た。けれども岡が峻しく高いのを見た。それから二つの他の路の通するのを見た。この二つの路は岡の向ふ側で、基督者の登つて行つた路と再び合ふだらうと思つて、二人はその路を進むことに決めた。所かその一つの路の名を危険道といひ、他の一つの名は滅亡道といつた。そこで一人は危険道の方を進むと、大きな森へ入つて行つた。他の一人は真直に滅亡道へと進んだが、薄暗い山の多い荒野へ入り込んで、そこに躓き倒れて、起き上ることも出来なかつた。

基督者の跡はと見送ると、彼は岡へと登つてゆく。初めは急ぎ足であつたのが、並足になつて、並足から、やがて、彼は手と膝で攀ち上り初めた。それほど路は峻しかつた。所で岡



の頂上へ半分途の所に、爽快な園亭があつた。この岡の主が疲れた旅人を慰ませるために建てたものである。基督者はそこへ辿り着いて、腰をかけて休んだ。やがて懐から巻物を取り出して、讀んで自ら慰めた。それから又十字架の側へ立つた時に貰つた上衣即ち衣裳を打ち眺めて氣を晴した。かうして暫らく獨り楽しんでゐると、遂に睡くなつて、ぐつぐつと寝込んだので、夕方になるまで其處にさうしてゐた。睡てゐる中に手から巻物を落した。それでもまだ睡つてゐると、一個の人が側へ来て、彼を呼び醒して言つた。「蟻に行け、惰たる者よ、その爲す所を見て、賢くなれ」(譚言六)。そこで基督者は突然躍り上つて、路を急いだ。一心に進んで、遂に岡の頂上に達した。

所が岡の頂上へ辿りつくくと、二個の人が遠しく此方へ走つて來た。一人の名は臆病者といつて、他の一人は疑惑者といつた。基督者は二人に言つた。「貴君方はどうしたのです。なぜ悪い方へ驅けて行きなされませうか」

臆病者は答へた。「私共はシオンの都へ志して、この難所を登つたのですが、行けば行くほど、益々危険に出遇ふので、振向いて、還つてゆく所です」

疑惑者も言つた。「私共の恰度前に二匹の獅子が路に横はつてゐたものですからな。それが

睡てゐるのか、醒てゐるのか解らないです。兎に角その側へ行かうものなら、立所に引き裂れてしまつたでせう」

そこで基督者が言つた。「私を怖がらすのですな。でも何處へ遁れて身を安全にしやう。自分の國へ歸れば、火と硫黄が準備してあるのだから、確に身を滅してしまふ。若し天の都に往くことが出来るなら、必然身を安全にすることが出来る、試つて見よう。歸れば唯死ぬばかりにもない。前へ進めば、死の怖はあるが、それを越せば永久に續く生命がある。私は前へ進んで行くことにしませう」

かくて疑惑者と臆病者が岡を走り下ると、基督者はその路を進んだ。けれども人々から聞いた事を思ひ返すにつけて、巻物を讀んで、慰めを得たいと思つて、懐を探つた。然るに探しても、それが見付らなかつた。そこで基督者は大に心を惱して爲すべき所を知らなかつた。いつも自分の心を慰めてくれ、又天の都へ入る通券となるべきその巻物が失なつたのである。それ故途方に暮れて、どうして善いか解らなかつた。遂に彼は岡の中腹にあつた小亭で睡つたことを思ひ出した。で、跪ついて、愚かな事の爲めに神の赦しを乞ふて、やがて巻物を探ねに引返した。その後戻りする路で、基督者の心の悲みはどんなであつたらう。身の



疲を休めるために藪の間の休息所として設けられたその場所に愚かにも睡つてしまったことが心を咎めて、嘆息を吐いたり、泣いたりした。彼はこれまで旅行中にも幾度か自分を慰めてくれた巻物を幸にも見付けたさに、行く／＼路の両側に氣をつけて後戻りした。かうして彼は座つて睡つた小亭の見える所までやつて来た。小亭を見ると、その悲しみは一層新しくなつた。睡つたことの悪かつたことを一層鮮かに心に思ひ浮べた。その睡眠の罪深きを嘆いて、かう言ひながら歩いた。「晝間睡つたり、困難の真中で睡むつたりするといふのは、あゝわれ惱める人なる哉(ロマ七)。岡の主が旅人の精神を慰めるために設けられた所なのに、私はそこで肉體の安樂を貪るために、我儘のこをした。こんなに澤山無駄足をしたのも止むを得ない。昔時イステル人がその罪のために紅海の路で後戻したのもこんなであつたらう。この罪深い睡眠さへ仕なかつたら、樂しく踏める路を、私はこんなに悲しんで歩まねばならぬ。こんな事がなければ、もう餘程前へ進んだものを。一度で済むところを三度歩くやうになつた。それにもう日暮なので、闇を歩かねばならぬ。あゝ、睡りさへしなかつたら」やがて彼は再び小亭に着いて、そこへ座つて暫く泣いてゐた。遂に悲しげに腰掛の下を眺めると、(基督者の運が盡きなかつたと見えて、巻物がそこにあるのに目がついた。彼は慄へ

ながら急いで、取り上げて、懐に收めた。この巻物を再び手にしたこの人の歡喜はどんなであつたらう。この巻物は彼の生命の保證狀、志させる港への通券である。そこで彼はそれを懐に納めてから、その落ちてゐた場所に眼を向けさせられたことを神に感謝した。そして嬉し涙を零して再び旅立つた。今度はいかにも速く岡を登つたが、まだ登らぬ前に、日が暮ってしまった。そこで又睡眠の徒勞であつたことを思ひ出して、かう言つて自ら悔んだ。「ああ罪深き睡眠よ、汝のために私は旅路に行き暮ってしまった。私は日の光なしに歩かねばならない。闇は行程を蔽ひ隠してゐる。又罪深き睡眠のために、物凄く禽獸の聲も聴かねばならない」。その時又疑惑者と臆病者が獅子の姿に驚かれたと言つたその話を思ひ出した。基督者は又呟いた。「さういふ獸は餌を求めて夜分歩き廻るさうだから、暗闇で出遇つたら、どうして避けられよう。どうして片々に裂れずに免れられよう」かうして、おのが不仕末を嘆きながら、進んで行つたが、目をあげて見ると、前には優美殿といふいと宏壯な宮殿があつて、往來の側に立つてゐた。私が夢の中で見てゐると、彼は急ぎ足になつた。出来るならそこに宿りたいと思つて、前に進んだ。まだ遠くも行かない中に、いと狭い通路に入り込んだ。それから門番の小舎まで



二丁ばかりあつた。彼は氣を配つて歩いて行くと、路に二疋の獅子が居るのを見出した。疑惑者と臆病者が危険だといつて遁げ歸つたのはこれだなど想つた。(獅子は鍵に繋いであつたが、その鍵は見えなかつた。彼は怖れた。自分も二人の跡を追ふて歸らうかと想つた。自分の前には死のほか何にもないと想つた。所が警護者といふ門番が小舎から基督者がぐづぐづして歸つて行きさうなのを認めて、かう言つて叫んだ。「貴君は氣が弱いですな。獅子は怖くはないです、鍵で繋れてゐますから。それは信仰を試みて、その無い人を看破るためにそこへ置いてあるのです。路の真中を通りなさい。どうも仕やしません」

やがて基督者は怖々に進んだ。門番の指圖に従つて善く氣をつけたので、獅子の吼ゆる聲を聞いたが、害を受けなかつた。そこで彼は手を拍いて喜んで、進んで、門番の衛つてゐる門の前に來た。基督者は門番に言つた。「これは何誰のお家ですか、今夜お宿め下されましますか」

門番は答へた。「この家は岡の主が旅人を撫はつて保護したために建てられたのです。門番は語を次いで問ねた。「貴君は何處からお出でになつたのですか、又何處へお出でになるのですか」

基。「私は滅亡の市から参りまして、シオンの山をさして行く者であります。もう日が暮れましたので、今夜茲へ宿めていたきたいのですが」

門。「お名前はなんと仰やるのですか」

基。「私は今では基督者と名乗つてゐますが、初めは悖徳者といふ名でした。神を知らざるヤベテの種族から出たのですが、神のお勸言で、セムの潔い天幕に住ふことになりました」

た (創生九〇廿七)

門。「どうしてかう晩くお出でになりましたか。日が暮りましたに」

基。「もつと早く茲に來る筈でしたが、お耻かしい事には、岡の中途にあつた小亭で睡つたものですから。いや、それでももつと早く來られたのですが、睡てゐる時に、通券を失して、そのまゝ岡の頂上まで來てしまひました。探しても見付らないものですから、仕方なしに心に悲しみながら睡た處へ往つて見ると、見付りましたので、漸く参りました次第です」

門。「それでは此處の處女を一人呼びますから、その處女が貴君のお話を聽いて、善いと思つたら、此家の控に從つて、家の方々の所へ貴君をお連れ申すでせう」

かう言つて門番の警護者が鈴を鳴すと、その響につれて、家の戸口から敏子といふ沈着い



た美しい處女が現はれて、「何に御用ですか」と問ねた。  
 門番は答へた。「この方は滅亡の市からシオンの山に旅をなさるのですが、日が暮れて疲れな  
 ずつたさうで、今夜茲へ宿っていたいといふことです。で、私は貴嬢をお呼びして、こ  
 の方とお話し仕ていたゞいて、それで貴嬢が此家の控に照して、宜しいと思召たら、宿て下  
 さるでせうと話した次第です」

やがて處女は基督者に向ひ、何處から来て、何處にお出でなさるのですかと問ねたので、  
 彼はそのことを話した。處女は又どうして此路をお出でになつたかと問ねたので、彼はそ  
 のことを話した。それから又處女は彼が路で見たり出遇つたりしたことを問ねたので、彼はそ  
 れを話した。遂に處女は彼の名を問ねた。そこで彼は言つた。

「私は基督者と申す者ですが、今夜は是非茲へ宿めていたゞきたうございます。此處は旅人  
 を撫つて保護するために、岡の主のお造りになりました處と伺ひましたので」  
 すると處女は微笑んで、眼に涙ぐんだ。暫く言葉を絶つてから、慙う言つた。「私、家の二  
 三人の方を呼びますから」

處女は入口に駆け寄つて、慎子と敬子と愛子といふ三人の處女を呼んで、暫らく基督者に

ついて相談して、家の内に入れることにした。家内の人々は大勢玄關の處まで基督者を迎へ  
 に来て、かういふ挨拶をした。「どうぞ此方へ。貴君は主のお恵みにあづかる方でございます。  
 この家は岡の主が貴君のやうな旅のお方を懇にするためにお建てになりましたので」  
 基督者は頭を下げて、處女等の後をついて、家に入つた。家に入つて座ると、處女等は飲  
 みものを勧め、尙夕餐の出来るまで、善き時間つぶしに、處女の中二三人が基督者の身  
 上を委しく聽くことに決めた。敬子と慎子と愛子とはその話相手に定められた。そこで慙う  
 いつて口を開いた。

敬。「ねい、基督者さん。かうして今夜貴君を親切にお宿め申したのですから、私共の益に  
 なるやうに、貴君が道中でお遇ひになつたことを精しく御伺ひしたいものですね」

基。「それは何によりです、歡んで御言葉に従ひます」  
 敬。「最初どうして都詣をなさる御心におなりでしたか」

基。「私が故國を出奔しましたのは、怖ろしい聲が私の耳に響きましたからです。その聲と  
 いふのは、若し私がそこに住んでをれば、避けられぬ滅亡に出遇ふといふのです」  
 敬。「お國から此路へお出でになりましたのはどうしてですか」



基「それは神の思召からでございます。滅亡の怖ろしさにびく／＼してゐた時には、何處へ行つて善いか解らなかつたのです。所が偶然私が慄へて泣いてゐる時に、傳道者といふ方がお出でになつて、私がそれまで知らなかつた小門を教へて下さいました。そして私はこのお家へ眞直に向いて來る路を取りましたのです」

敬「では、註釋者の家へはお寄りになりませんでしたか」

基「はい、寄りまして、種々な事を見ました。皆一生忘れられない事はかりですが、其の内でも鮮然覺へてゐますのは、基督が悪魔の妨げあるにも係らず、今でも人の心に恩寵の働きをなしたまふことと、それから一個の人が罪を犯して神の仁恵に絶望せることと、それから又眠つてゐる間に審判の日の來た夢を見た人のことと、それだけです」

敬「貴君、その夢の話もお聴きになりました」

基「はい、怖い夢だと想ひました。その人が話してゐる最中に、胸がどき／＼しました。でも、それを聽いて嬉しかつたです」

敬「註釋者の家で御覽になつたのはそれだけですか」

基「いえ、まだあります。その御案内を受けて、立派な御殿を見せて下さいました。そ

こに居る人達は皆黄金の衣を着てゐました。一個の大膽な人があつて、武装した人達が入口を護つてゐる中を切開きました。そして内に入つて、限りなき榮光を獲ました。そんな事を見ると胸が躍りまして、十二ヶ月もその方の家に逗留してをりたかつたですが、まだ先へ進まねばならんと思ひまして」

敬「その他、路で何かごらんになりました」

基「見た所ちやありません。それから少し参りますと、十字架に懸つて血を流してゐる者を見たやうな氣がしました。其人を見るや否や、私の脊中から重荷が落ちてしまひました。實はその重荷を負つて呻いてゐたのでした。その時身から離れて落ちてしまひました。前にそんな事を見たことがありませんので、いかにも不思議でした。暫らく立つて眺めてゐますと（眺めずにはゐられませんでしたので、三人の輝ける者が側へ來ました。その一人が、私の罪は赦されたと證し仕てくれますし、もう一人の方が私の襠褌を脱せて、御覽の通りなこの繻のある衣物を下さいました。それからもう一人の方が私の額にある、これこの記號をつけて、この印のある巻物を下さいました）（彼は懐から巻物を取り出した）

敬「その他に御覽になつたことはありませんでしたか」



基。「これまでお話ししました事は善い方ですが、その他さまじくな事を見ました。淺薄者、怠惰者、我儘者といふ三人が私が来た路から妙に離れた處に、鐵の足枷をされて、横に睡ておりました。でも私にはとても起してやる事が出来ませんでした。それから又虚禮者と偽善者がシオンに往くのだと言つて、石垣を乗り越えて来ました。私は親しく二人にお話ししたのですが、信じませんものでしたから、忽ち見失ひました。それから何より困難なのは此の岡に登ることでした。又獅子の口の側を通るのも困難でした。御門の側にあの性の善い門番がゐられませんでしたら、仕方なしに後戻したかも知れません。今かうして茲にあることを神に感謝いたします。又私をも待遇して下さる貴嬢方にお禮を申し上げます」

やがて慎子も基督者の話の有益な事を思つて、二三の事を尋ねた。

慎。「時々はお旅出ちになりました故國のことをお思ひになるでせうね」  
 基。「はい、思ふことは思ひますが、大變耻かしくも嫌になります。實際私の出て来ました故國のことが氣になる位なら、歸る機會は幾らもございました。でも、今ではもつと善い國、即ち天の國を志しますので」(ヘブライ十)

慎。「それでも貴君がその頃お親しみになりました事で今でも御心に纏ひ着いてゐるものは

御座いませんか」

基。「はい、ありまして、大に私の意に逆みます。殊に心の慾と肉の想とは私の國の人や私自身には楽しみでしたものですから。今ではそんな事は皆な私の愛となりまして、自分が想ふやうになるなら、もうこれ以上そんな事を考へないつもりですが、所が兎角善い事を仕やうと思ふと、悪い事が身に着き纏ひまして」(ロマ七〇十)

慎。「貴君を惱ますその事が時には消え失せたやうにお思ひになることもございませうね」

基。「はい、稀にはございます。さういふ事が起る時は、まあ私の黄金時代ともいふのですな」

慎。「煩ひが時々消え失するやうになるのはどうしてゐるか、御記憶なさいまして」

基。「はい、十字架の側で見ましたことを思ふ時に、さうなります。又この纏のある衣物を見る時にさうなります。又懐にある巻物を見る時に、さうなります。又私の行手を思ふて心の熱する時に、さうなります」

慎。「シオンの山に行くことをそれほど御執心なのはどうしてゐるか」

基。「それは、十字架に懸つて死なれたその方が生きてそこに居られますのを見たいからで



す。又今日まで私の裡にあつて私を悩ましたその事を通りたいからです。又そこには死がないといふことです。最も好きな友達と一緒にいつまでも暮らしたいです。實際のところ、私は私の重荷を下してくださいました。其の方を愛しますが、私は心の病で疲れてゐるからでありませぬ。だから、最早死のない處へ行つて、皆さんと一緒に聖なる、聖なる、聖なるかなと絶えず唱へたいのです」

やがて愛子が基督者に言つた。「貴君には御家族がございまして。御結婚あそばした方ですか」

基。「私には妻と四人の小さい子供がございまして」

愛。「どうして御一緒にお連れなさらなかつたの」

基督者はさう言はれたので泣いて言つた。「私はどんなにさう仕たかつたでせう。ですが彼等は皆なして私の旅立つのに全然反對なものですから」

愛。「でも、貴君は御家族の方に、後に残つてゐる危険をお話しなすつて、悟らせようとなすつたのでせう」

基。「さうですとも。神が私共の市の滅びることを私に示して下すつたと話しても、彼等は

私が戯談でも言ふかと思つて、私を信じませんでした」(創世記十)

愛。「その時貴君のお勸言が御家族の方の心に入るやうに、神さまにお祈りになりました」

基。「はい、心を痛めて祈りました。何といつても妻子は可愛い者ですからな」

愛。「それにしても貴君御自身の悲しみ、滅亡の恐怖をお話しになりました。貴君には滅亡のことが充分に解つてゐなされるやうに想はれますが」

基。「はい、幾度も、幾度も話しました。彼等は私の顔の恐怖を見ましたし、私の涙も見ましたし、又私が頭の上に落ち懸つてゐる審判の怖ろしさにびく／＼してゐるのを見たのですが、それでも私と一緒に来る心を起させるには足りませんでした」

愛。「御家族の方がお出でなさらなかつたには、それ相應の理屈がございましてせう」

基。「それは、妻にとりては、此世を棄てたくなかつたでせうし、子供にとりては、若い時の愚かな楽しみに氣を奪れてゐるものですから。あれやこれやで、私一人をかうして彷徨せることになつたのです」

愛。「貴君がいくら言葉で、連れて來たいやうに仰やつても、貴君のこれまでのお振舞があまり眞面目でなかつたので、御家族の御心を鈍らせなすつたようなことはございせんか」



「實際私はこれまで澤山過失をしたことを知つてゐますので、自分の生活を誇ることは出来ません。それから善い事があるから他人にもさせたいと思つてごんなに説き勸めても、自分の品行が悪ければ、何の甲斐もないことを知つてをります。ですが、私は何か不似合な振舞でもして、彼等が旅立つのを嫌がらせないように大變氣を付けました。所がさうしますと、却つてあまり堅苦しいと申しますし、それから妻子のためには彼等が悪いと思はぬ事まで克己しました。神に對して罪を犯したり、隣人に悪い事をしたり仕ないように、私の心が優しくなればなるほど、それが却つて彼等の邪魔になつたやうで御座います」

愛。「それは眞實ですのね、カインが兄弟を憎みましたのも、自分のする事が悪くつて、兄弟の方が義しかつたですからね(ヨハネ一書)。貴君の奥様もお子様もそんな事のために貴君に抗らひなすつたなら、それはもう善い方に染むことの出来ない證ですね。貴君の靈魂は御家族の方と血肉の縁が離れて居りますのです」

私が夢の中で見てゐると、かうして話してゐる内に、晚餐の仕度がされた。仕度が出来ると、その席に着いた。食卓には脂い物や精製した酒が備へられた。卓上での談話は皆岡の主に關することであつた。主が爲したまへること、主がそれを爲したまへる由來、又その家

を建てたまへる所以などを話した。この人々の話す所によると、主は大なる勇者で、死の力を有する者と戦つて、身にも非常な危険を冒して、遂にこれを殺されたといふので、益々主が慕しくなつた。

基督者が言つた。「皆さんの仰せの通り、又私の信じます通り、主はそのため多くの血を流したまひました。主の所業に恩寵の榮光の加はりましたのは、純粹の愛から御國のために盡されたからであります」

すると又家内の人々の中には、主が十字架で死なれた後にも、自分達と一緒に居て話されたことや、又主が天が下東から西に類ないほど、憐れな旅人を愛することを親しく語られたことを證する者があつた。且つその證したことの例を挙げた。即ち主は自分の榮光を脱ぎ棄て、貧しき者に盡されたのである。又主がシオンの山に自分獨り住みたくなひどの御言葉を聞いたと言つた。それから又主は多くの旅人が本來生れは乞食でも、塵芥のやうな身でもこれを王公となしたまふことを話した。

かうして、一同夜更るまで語り合つた。そして主の保護を祈つてから、眠に就いた。基督者の寢されたのは大きな二階の部屋で、日の出の方へ窓が開いてゐた。その部屋は平和の間



といつた。早味まで彼は睡つた。やがて目が醒ると、かう歌つた。

「いづこにわれは今あるぞ。」

耶穌の愛と注意にて、

かくもてなざる旅人ら、

罪ゆるされて、我もはや、

御空に近く宿りけり」

朝になるに皆起き出でた。暫く話しをしてから、基督者に此處の珍らしい物を見てから御出立なさいと言つた。そして先づ第一に書齋に案内して、太古の記録を見せた。私は夢に覺へてゐるが、先づ見せたのは岡の主の系圖である。彼は日の老ひたる者の子で、永遠の世から來たのである。その記録には又彼の爲したまへる業や、彼が採用して、使はれた幾百名の人名が精しく記された。又星移り物變ることも、決して朽ることなき住居にその人々を置かれたことをも記した。

それから娘達は主の僕共の爲した値ある業を讀んで聽せた。即ち彼等が國々に打勝ちしこと、義を行ひしこと、約束を蒙りしこと、獅子の口を塞ぎしこと、火の勢を消せしこと、劔

の刃を通れしこと、弱きを強ふせしこと、戦に勇しき者となりて異邦人の軍を破りしことなのである (ヘブライ十一)。

それから又此家のことを記した記録を讀んで聽せた。即ち主はどんな者でも、過し時に主の人格と所業とを大に侮蔑つたやうな者でも、悦んで厚く迎へたまふといふのであつた。この書齋にはその他多くの有名な事蹟を記した數多の歴史があつて、基督者はこれを皆一覽した。何れも古今の出來事を記したもので、その豫言と讖言とは確に成就せられて、敵には怖れとなり驚きとなり、旅人には慰めとなり歡びとなるべきものである。

その翌日彼等は基督者を武器庫に案内した。そこには主が旅人のために備へられた有らゆる武器があつた。即ち劔や盾や甲や胸當や凡ての祈禱や壞るゝことなき履などである (エペソ十四)。

主に使へる者が天の星の群るやうに多數でも、充分武装ふことが出来るほどであつた。又主の僕共が不思議の事をした種々な軍器を見せた。モーセの杖 (出埃及十) ヤエルがシセラを殺した鎗と釘子 (士師記) ギデオオンがミデアンの軍勢を敗つた篋と空瓶と燈火を見せた。それからシヤムガルが六百人を殺した牛の策を見せた。又サムソンが大なる功績を立てた髑骨を見せた (士師十五)。



罪人を奢るために奮ひ起ちたまふ日に用ゐらるゝ劍を見せた。その他數多の立派な物を見せられたので、基督者は大に歡んだ。これを見終つて、彼等は又眠に就いた。

私が夢の中で見てゐると、翌る朝基督者は起き上つて、出立しやうとすると、彼等はもう一日逗留して下さいと言つた。天氣が麗朗ならば、歡樂山を見せてあげたい。そこは現在居る所よりも志す港に近いから、一入慰めを添へるだらうと言つた。そこで彼は同意して、逗留した。

朝日が登る頃、彼等は家の一番高みに彼を連れて行つて、南を眺めさせた。で、彼は南を眺めると、遙か遠くにいとも美しい山郷が見えた。森も葡萄の園も有ゆる果實も花も美しく、泉も噴水も美はしく、いかにも樂しき光景であつた。やがて彼がその郷の名を問ねると、あれはイムマヌエルの地ですと言ふ。尙ほ語を次いで、かしこの地はこの岡のやうに、旅人は誰でも通る道筋でして、そこまでお出でなさいますと、「天の都の門が見えますし、又そこに住んでゐる牧羊者達も出て参ります」と言つた。

今や彼が出立しやうとすると、彼等も承知した。けれどもそれより先に尙一度武器庫に参りませうと言つた。そこで彼を連れて行つて、道中どんな攻撃を受けるかも知れぬからと言つて、頭から足まで堅固な甲冑を着せてくれた。かやうに武装してから、一同に送られて門前に出で立つた。そこで彼は誰か旅人は通りませんかでしたかと門番に問ねた。門番は「はい」と答へた。

「その人を御存じですか」と基督者が言つた。

門。「その人の名前を問ねましたら、信仰者と言ひました」

基督者が言つた。「あゝ、それなら私も存じてます。私と同じ町の者で、じき近所です。矢

張り私の生れた土地から参つたのです。それにしても餘程もう行つたでせうか」

門。「今頃は岡を下つた時分でせう」

「さうですか」と基督者が言つた。「門番さん、御機嫌よう。私に御親切にして下さつた報ひに、主の御祝福を貴君のために祈ります」

やがて彼は出かけた。敏子と敬子と愛子と慎子とは岡の麓まで彼と同伴した。彼等は岡を下りてしまふまで、前の談話を繰返しながら歩いた。

その時基督者は言つた。「登りも骨が折れましたが、下りも中々危険ですな」

慎子が言つた。「はい、ほんとうにさうですね。謙遜の谷まで下つてしまふまでは、貴君に



限らず、何誰でも中々のお骨折でございませう。途中で滑り勝たなものですから。尙四人は語を添へて、だから、私共は岡の下までお見送りいたしましたのです」と言つた。

基督者は大變用心しながら、下つて行つたが、それでも一二度滑つた。

その時私は夢の中で見てゐると、この連れ立つた善き娘達は基督者が岡の麓に着くと、一塊の麵麩と、一瓶の酒と一總の乾葡萄酒を贈つた。やがて彼は路を進んだ。

## 四

可憐なる基督者はこの謙遜の谷で、又辛い目にあつた。まだ幾らも行かない内に、一個の醜き惡魔が野原を越えて向ふからやつて来るのを見た。それはアポリオンであつた。基督者はびく／＼して、引返へさうか、踏み留まらうかと心に惑つた。けれども彼は背中に鎧を着てゐないことを考へた。だから惡魔に脊後を向ふことは投槍で衝くに一層の便宜を與へるやうなものである。で、彼は遣つて見ようと、踏み留まることに決心した。「自分の生命を救ふより他、今何も眼中にない。それには踏み留まるのが最上の策である」と想つた。

そこで彼は進んで、アポリオンに出遇つた。その怪物は見るも怖しかつた。魚のやうに鱗

を着てゐた。それは彼の誇であつた。龍のやうな翼、熊のやうな足をして、腹から火と烟を吹いた。口は獅子のやうであつた。やがて基督者の側へ來ると、シロリと眺めて、かういつて問ねた。

「何處からお出でなすつたか。又何處へ行くんですか」

基、「私は有ゆる罪惡の場所でありませう滅亡の市から參りました者で、シオンの都へ行くの

でございませう」

アポリ。「ちや、お前は私の臣僕の一人ではないか。その市は私の國で、私はその王様で又神様ぢや。お前はこの王様から運ぶるといふのは、どうしたものぢやい。お前はもつと私に仕へれば可し、仕へなければ、一撃に叩き殺すがどうぢや」

基。「私は實際貴君の領地に生れました者ですが、貴君の仕事は困難ですし、貴君の下さる賃銀では人が生きてゐることが出来ません。罪の賃銀は死ですからな（〇廿三）だから私も大分の年になりましたので、分別ある他の人の眞似をして、身の振方を探しましたのです」

アポリ。「そんなに難作なく臣僕を失すやうな王様はないぞ。私も中々お前を失すまい。だが、お前が仕事と賃銀に不服なら、安心して、まあ還れ。私の國で間に合ふものなら、なん



でもお前に遣ることを茲で約束するから」

基。「私はもう王の王にてゐます他の方に身を捧げたのですから、どうして貴君と一緒に歸られませう」

アポリ。「お前の遣り口は、諺に所謂小悪から大悪に變るのちや。彼の臣僕だなんて公言する者共が、暫くすると彼を出し抜いて、又私の所へ還つて來るのが常習ちや。お前も矢張さうせい、それが一番ちや」

基。「私は彼を信仰しまして、忠信ならんことを誓ひました。ですからどうして茲から還ることが出來ませう。謀叛人として絞殺されますからな」

アポリ。「お前は私にも同様叛いたぢやないか。でも、今心を改めて還れば、何事も大目に見てやる」

基。「私が貴君に従つたのは、小さい時のことでした。しかし私が今その旗の下に立ちます大君は私を釋放つて下されますし、又貴君に従つて爲した事をも赦して下さると信じます。それから又、あゝ破壊のアポリオン殿、打明けて申せば、私は彼の仕事、彼の賃銀、彼の臣僕、彼の政治、彼の交友が好きです。又貴君の國よりも彼の國が一層好きです。だから、も

うこれ以上私を勸めて下さいませぬ。私は彼の臣僕ですから、彼に従ひます」

アポリ。「頭を冷くして、もう一度考へて見る。お前は此の路を進んで行つてどんな物に遇ふつもりか。お前の知つてゐる通り、大概彼の臣僕共は終を善くせんちや。それは彼等が私と私の路に叛いた者であるからだ。彼奴輩は耻かしい死に狀をしてゐるぢやないか。それはかりか、お前は彼に仕へる方が私に仕へるよりも善いと言ふ。所で彼は自分に仕へる者がどんな目に遇つても、それを救ふために自分の居る所から未だ嘗て出て來たことがないぢやないか。然るに私はどうぢや、幾度となく、有ゆる世界の能く知る通り、忠實に私に使へる者が彼と彼の部下に捕へられることあれば、權力と詐謀に依つて、私はこれを救ひ出すではないか。だから、お前をも救つて上げる」

基。「彼が直ちに人々を救はれないのは、彼等が最後まで自分に執着するかどうか、その愛を試すためなのです。貴君は彼等が見苦しい最後を遂げると言はれますが、彼等自身にとりてはそれは最も光榮な最後なのです。現在の救助などは、あまり多く待望しないで、彼等はその榮光のために忍耐するのです。彼等の主がその榮光と天使の榮光を以て來らるゝ時に、彼等も榮光を持つことが出来るのですからな」



アポリ。「お前は既に彼に仕へて不忠實ぢやないか、それでどうして彼から賃銀が受取れると思ふか」

基。「どうして、お、アポリオン殿、私は彼に不忠實であつたですか」

アポリ。「お前は出立の初め、落膽の沼に沈みかゝつた時に、氣落ちしたぢやないか。お前は前前の君主が重荷を取去るのを待つべき筈なのに、不正な方法でそれを取り去らうとしたぢやないか。お前は罪深くも睡つて、お前の大切な物を失したぢやないか。それから又獅子の居るのを見て逃げ還るやうに説服せられかゝつたぢやないか。それからお前は旅行の談をしたり、見たり聞いたりした事を語る時に、お前の言葉付にも所作にも内々虚榮を求めてゐたぢやないか」

基。「それは皆な事實です。貴君の言ひ残しなすつたことがまだ澤山あります。ですが、私の仕へ崇むる君主は恵深いので、いつでも赦して下さいます。それから又そんな弱味は貴君の國で持つやうになつたのです。そこで養はれたのです。私はそのために呻き苦しみ、又そのために悲しんで、わが君主の赦免を獲ました」

そこでアポリオンは激しき怒を發して、かう言つた。「私はその君主の敵だ。私は彼の人格

彼の律法と人民を憎むのぢや。私がやつて來たのは、お前の邪魔をするためぢや」

基。「アポリオン殿、貴君の爲さる事にお氣をつけなさい。私の居る所は王の支配したまふ往還、聖き路でございます。だから御自分にお氣をつけなさい」

アポリオンは道幅狭しと踏張つて、恚う言つた。「私は何が怖いものだ。さあ死ぬ覺悟をしろ。私は地獄に誓ふが、これより一歩も進ませんぞ。茲でお前の靈魂を亡き者にしてくれ」かう言つて彼は基督者の胸に煙の投槍を投げつけた。基督者は手に楯を持つてゐたので、それを受け留めて、その危害を防いだ。

基督者は最早これまでと劔を抜いた。アポリオンは激しく彼を攻めかけて、雨霰と繁く投槍を投げつけた。基督者は力限りそれを防いだが、それでも頭と手足に負傷した。そのため少し退避ぐと、アポリオンは得たりと付け入つたので、基督者も亦元氣を出して、出来るだけ丈夫らしく防ぎ戦つた。この激しき戦は半日以上も續いたので、基督者は力殆んど盡きた。實に基督者は手傷のために、次第く弱つて行つたのである。

アポリオンはその機を付け込んで、基督者に肉迫し、組みついて、これを地に投げ着けた。それと共に基督者の劔は手から飛んだ。そこでアポリオンは、「さあどうだ」と言つて、力一



杯壓へつけたので、基督者は蟲の息になつた。けれども神の思召であらう。アポリオンが槍を振つて、この善人の最後の止めを刺うとしてゐると、基督者は逸早く手を延して、劔を拾ひ取つて、「おゝわが敵よ、私のことを喜ぶな。仆れたつて起き上がるぞ」(米迦七)と言ひながら、力に任せて衝いてかゝると、深傷を受けたやうに退避した。基督者はそれを見て、「何事にあれ、我等を愛したまふ者に依つて、勝ちて尙餘りあり」(ロ一七)と言ひながら、再び打つて懸つた。するとアポリオンは龍の翼を廣げて、飛び去つた。基督者は再び彼を見なかつた。この戦に於て、私のやうに實地に見聞した者でなければ想像の出来ぬことは、アポリオンが戦ひながら、始終喚呼いたり、恐ろしく吼へたりしたその聲である。彼は龍のやうに語つた。又他方に於て、嘆息と呻き聲が基督者の心から洩れた。それから兩刃の劔でアポリオンを傷つけた時は、彼が愉快な容子をしたのを見たことがなかつた。實に彼はにつこり笑つて、天を仰いだ。いかにもこれは嘗て私の見たる最も恐ろしき戦であつた。

戦が終ると、基督者が言つた。「私は茲に獅子の口から私を救ひたまひし主に感謝いたします。アポリオンに對して私を助けたまひし主に感謝いたします」そして彼はかう言つて歌つた。

「この惡魔の大なる長

ビルゼブルはわれを滅ぼさんとて、

彼を送りぬ、武装して。

地獄の怒もて、彼は激しくわれを攻む。

さあれ祝福のミカエル、われを助けたり。

われは劔の力にて、忽ち彼を飛ばしめぬ。

されば絶ざる讚美、われに歌はしめよ。

常に聖名を感謝し、祝福せしめよ」

やがて一本の手が現はれて、幾片の生命の樹の葉を差出したので、基督者はそれを取つて、戦で受けた傷に押當ると、立所にそれが癒つた。そこで彼は其場所に腰を下して、尠し前に貰つた麵麩を喰ひ、飲物を飲んだ。さうすると元氣づいたので、劔を抜いて手に持つたまま、旅に出で立つた。まだ他に敵が間近に居るかも知れぬと想つたのだが、この谷にはアポリオンの外他の敵には全く出遇なかつた。

この谷が終ると、又その次に、死の蔭の谷といふがあつた。天の都への路はその谷の真中



を通ずるので、基督者はそこを通行せねばならない。この谷といふのがいかにも物淋しい場所、預言者エレミアは恚う記してゐる。「曠野、坑多くして荒たる地、旱魃の地、死の蔭の地、二人の基督者のほか）人の過ぎざる、又人の住はざる地なり」（エレミア）と。さて基督者はこの谷でアポリオンと戦つたよりも尙辛い目にあつたことは、次に記す通りである。

私が夢の中で見てゐると、基督者が死の蔭の境に達すると、二人の人は出遇つた。それは善き國のことを悪く評番する人達の子孫（民数記第）で、急がしく引返す所であつた。その人達に、基督者はかう言つた。

基。「何處へお出でなさるのですか」

二人は言つた。「後へです、後へです。貴君も生命と平和が惜しければ、矢張お歸りなさるですな」

「一體どうしたのですか」と基督者が言つた。

「どうした所ですか」と二人が言つた。「私共は貴君のやうにその路を進んで、出来るだけ行つたのでさ。實際もう還つて來られなくなる所でした。もう勢に進むと、かうして貴君に

お話しも出来なかつたでさ」

「一體どんな事に遇れたのです？」と基督者が言つた。

二人。「私共は死の蔭の谷へ入らうとする所でしたが、好運にも前を見たものですから、危い所まで踏み込まずに、それを見つめました」

基。「一體何を見なすつたですか」

二人。「何にどころですか。谷といへば滙青のやうに眞暗ですし、坑の中には妖怪、變化、龍などが居るのが見えますし、それから絶えず吼ゆる聲や喚く聲が聴えまして、恰度何とも言へぬ不幸の人が手鐵足械をされて呵責に遇つてゐるやうでした。谷の上には陰氣な亂れ雲が懸つて、死がいつも翼をその上に擴げてゐる（約百三）ますし、實に亂れに亂れたその物凄さといつたらないです」

そこで基督者が言つた。「貴君方がどう言はれても、これは私の志す港へ行く路に相違ありません」

二人。「貴君の路かも知れませんが、私共は、まあ御免です」  
そこで彼等は別れた。基督者はその路を進んだ。いつ攻撃されるか計られないので、抜い



たま、劔を手にして行つた。

私が夢の中で見てゐると、この谷の續くだけ遠く、右手にはいと深い溝があつた。その溝は有ゆる時代に盲人が盲人の手引をして、憐れにも共に滅びた所である(ルカ六)。それから左側を見ると、いと危険な沼地があつた。いかに善人でもその中に落ちると、底がないので足の立場がなかつた。この沼地にはダビデ王も一度落ちたことがあつて、全能なる者に救ひ出されなかつたら、そこで敢なくなつたに相違ない。

道筋は茲で又非常に狭くなつた。で、性の善い基督者は一層難澁した。暗の中で、一方に溝を避けようとするれば、他方で沼地に墜ちさうになつた。又非常に氣を付けて、沼地を通れようとする。溝に落ちさうになつた。かうして彼は進んだ。苦しげに嘆息するのが聴えた。そのやうな危険のほかに、道筋がいかにも暗いので、幾度前に足を踏みだしても、それが何處か解らず、又次に足の遣り場を知らなかつた。

この谷の中段に、地獄の口があつて、それが又近く路に沿つてゐた。「私はどうしたら可からう」と基督者は想つた。斷切なしに烟と烟が澤山に現れて、火花と怖ろしき音を發した。それはこの前のアポリオンのやうに、基督者の劔を怖れないものなので、彼は劔を鞘に收めて、

凡ての祈禱といふ他の武器を用ひて、聲を擧げて、「あゝ主よ、希はくはわが靈魂を救ひたまへ(詩百十)と叫んだ。

かうして餘程進んだが、尙ほ烟は彼の方へ達せんとした。彼は又悲しげな聲とあちこち突進する音を聴いた。で、時には片々に裂れるかと思つたり、巷の泥のやうに踏みつけられるかと思つたりした。この怖ろしい光景を見、又この物凄い音を聴きながら、彼は數哩進んだ。そして或る場所に来ると、鬼の群が向ふから自分の方へやつて來たので、彼は立留つて、どうしたら善いだらうと思案し出した。時には半ば還らうかと思つたこともあるが、又この谷も半分は通り過ぎたらうにと思ひ返した。顧みればもう多數の危険に打勝つた。還る危険は前に進む以上かも知れない。そこで彼は進むことに決心した。然るに鬼はいよゝ近づいて來る。けれども殆んど身に迫つて來た時、彼はいと烈しい聲を張り上げて、「われは主なる神の力の裡に歩まん(詩七十一)と叫んだ。すると鬼共は引き退つて、最早近よらなかつた。

尙ほ一つ洩してはならぬ事がある。今や憐れな基督者は心亂れて、自分の聲が解らなくなつた程である。恰度彼が地獄の口を通り過ぎんとした時、一個の悪者が後方からつけて來て、窃に忍びよつて、痛ましい神を瀆す言葉を澤山耳許で囁いたので、基督者はそれが自分



の心から出るやうに想つてしまつた。今が今まで最も愛した者を潰すのかと想へば、これまで出遇つた事共よりも尙ほ基督者を憐ますのであつた。彼は避けることが出来ても、それを避けようとしなかつた。耳を蔽ふ分別も出ず、その潰す言葉の出所も知らなかつた。

基督者は餘程長い間この面白からぬ状態で旅したが、自分の前を行く人の聲を聞いた。それは「假令われ死の蔭の谷を歩むとも、災禍を怖れじ、爾はわれと偕に在せばなり」(詩廿三)と言ふのであつた。

それを聽いて彼は歎んだ。その理由はかうである。

第一。彼はこれが爲に神を畏れる者が自分の外にもこの谷にあることを知つたからである。

第二。この暗い幽鬱な状態にあつても、神が彼等と偕にあることを悟つたからである。よしやこの場所に伴ふ阻碍のために、神は目に見えなくつても、自分と偕に在したまはぬだらうかと想つた。

第三。彼は前に行く人達に追ひ着いたら、次第に道連れが出来るといふ望みを起した。

またもや彼は進んだ。前に行く人を呼んで見たが、その人も自分は一人だと想つてゐるので、答へもしなかつた。その内にはほのぼのと夜が明けた。そこで基督者は「死の蔭を變じて

朝となしたまへり」(アモス)と言つた。

朝になつたので、彼は振り返つて眺めた。還らうとしてははなく、暗の中をどんな危険を犯して来たか、日の光で見たためであつた。すると一方にある溝や、他方にある沼地が判然と解つた。又その間を通ずる路の狭いことも能く解つた。又妖怪や變化や坑の中の龍なども遠くの方に見えた。この類は夜が明けると、近くは寄つて来ない。併し「主は暗きより隠れる事共を現はし、死の蔭を光に出したまふ」(ヨハ十二)と記してある通り、彼に現はされた。

今や基督者はこの寂しき路の有ゆる危険から救はれたので、大に感動した。その危険はこれまで怖ろしかつたが日の光に照して見れば、益々明かにその怖ろしさが解つた。この時太陽は登つた。これは又一つ基督者にとりて仁恵であつた。茲に注意せねばならぬとは、死の蔭の谷の前の方も危険であつたが、彼がこれから行かうとする後の方も、行くとは出来るが、尙一層危険であつた。彼が現に居る處からこの谷の端までには、路の到る處に、係蹄や、捕機や彈機や網があるし、又坑や陥坑や深い穴や傾斜した處などがあるので、若し前の半分路を通つた時のやうに、今も暗かつたら、千の生命があつても、そのために失なつたであらう。けれども今は恰度太陽が登つてゐる。そこで彼は言つた。「彼の燈火わが首の上を照し、彼の



光に依つてわれ暗を歩めり(ヨブ廿九)

この光に依つて、彼は谷の端へと来た。私が夢の中で見てゐると、この谷の端に、血と骨と灰と混然になつた死骸とがあつた。前に此路を通つた旅人のも有るらしい。これは又どうした譯かと思ひめぐらしながら、不圖尠し前を見ると、一つの洞穴があつた。そこは羅馬法王と異教者といふ二個の巨人が昔時住んだ所である。この巨人共が權力を振ひ暴威を逞しうしたので、人々は無残にも殺されて、その骨と血と灰とは茲に横はつてゐるのである。けれども基督者が大した危険もなく此處を通つたには、聊か私に不審であつた。後で解つたが、それは異教者が久しき以前に死んだのだ、法王の方は未だ生きてゐても、年を老つたのだ、若い時に出遇つた數多の激しい衝突のために、精神が衰弱し、關節が硬張つてしまつたので、洞穴の口に坐つて、側を通る旅人があると齒をむき出してこれを罵つたり、捕まへることが出来ないのを残念がつて爪を噛むよりほかに、どうすることも出来なかつたのだ。見てゐると、基督者はやがて其路を進んで、洞穴の口に坐つてゐるこの老人を見た。老人は彼を追ひかけることは出来ないが、それでもこちらを向いて「お前達の心を直してやるには、もつとお前達を焼き殺さねばなるまい」と言ふのを聽いて、どうして善いか解らなかつた。

けれども基督者は心靜かに、平氣な顔をして、側を通り抜けたので、何等の害も受けなかつた。そこで基督者は歌つた。

「あゝいとも不思議の世なるかな。

茲にて遇ひし惱みにも、

われの生命は保たれぬ。

あゝ福なるかな、

われを救へるその御手よ。

暗と魔と地獄と罪のその危険、

われを圍みぬ、この谷間にて。

係蹄と坑と捕機と網とは、

われの行程に横はり、

値なく弱きわれをば、

捕へ惱ませ斃さんとしたれども、

「さあれわれ生きぬ。榮光耶穌にあれ」



「基督者はその路を進んで、やがて小高い處へ来た。それは旅人に行く先を眺めさせるために設けられたのである。基督者はその上に来て、前を眺めると、信仰者が前に行くのが見えた。そこで基督者は高い聲をして、「おい、おい、お待ちなさい、御一緒に参りませう」と言つた。信仰者は後を振り向いた。で、基督者はなほ、「お待ちなさい、お待ちなさい、直ぐ追ひ着きますから」

然るに信仰者は答へた。「いえ、私は生命懸けです、血に渴く敵が私の後に居りますから」これを聴いて基督者は稍心を激して、全力を盡して、忽ち信仰者に追ひ着いて、やがて彼を追ひ越した。かうして後なる者は先になつた（マタイ十）。其時基督者はその兄弟を追ひ越したので、自慢さうに笑つた。けれども足許に氣を付けなかつたので、彼は突然躓いて倒れて、信仰者に扶け起されるまで、起き上れなかつた。

私が夢の中で見てゐると、二人はいと睦じさうに連れ立つて、道中で起きた種々な事を面白く話し合つた。基督者はかう言つて口を開いた。

「いや愛する兄弟、信仰者さん、私は貴君に追ひ着いて嬉しいです。神が私共の心を和けて、かうして御一緒に楽しく路を歩かれるのは、何によりです」

信。「實をいへば、私共の町から貴君と御一緒に、私は来たいと思つたでしたが、貴君が先に立たれたものですから、止むを得ず獨りで来たわけでした」

基。「私が旅立つた後、貴君はあの滅亡の市にどれ位長くお留りでしたか」

信。「長くは居りませんでした。貴君がお立ちになつた後で、あの市は間もなく天からの火で地に焼け落つるといふ風評がばつと立ちましたね」

基。「え、そんなことを市の人達が言ひましたか」

信。「はい、一時は誰でもその事ばかり口にしました」

基。「所で、その危険を免れやうとなすつたのは、貴君のほかにはないんですか」

信。「今申したやうに、風評は大變でしたが、確にそれをさうとは信じなかつたでせう。熱心に語り合つてゐるかと思ふと、貴君が旅立つたことを生命知らずだの言つて、莫迦にしてゐる者もありました。ですが、私はあの市の最後は天からの火と硫黄で滅されるだらうと信じましたものだから、かうして逃げ出しました」



基。「近所の柔弱者の風評をお聴きになりませんか」

信。「え、聴きました。あの男は落膽の沼まで貴君と一緒に来て、そこに落ちたといふ話ですな。自分ではその事を知らせまいとしてをるやうですが、確に泥まみれになつてゐましたよ」

基。「近所の人達はあの男のことをどんなに言つてましたか」

信。「歸つてから、大變笑の種になつたやうです。皆なして嘲けつたり莫迦にしたりして、碌に仕事もさせてやらないです。で、今では市を出かけない先よりも七倍も悪くなつてゐるでせう」

基。「でも、あの男の棄てた路は市の人達も莫迦にしてゐるんでせう。それにどうしてそんなに彼を責めるんですか」

信。「所が市の人達は、『彼奴を殺せ、裏切などする奴は。口と心と違ふ奴は』など言ひましてな。神は敵をそのかして彼を懲しなさんでせう。路を棄てた者には善い戒めですな」

基。「貴君はお立ちになる前にあの男とお話しになりましたか」

信。「一度街道で遇ひましたが、向ふ側を通つて、此方を横目で見て、いかにもその仕たこ

とを耻かしがるやうですので、言葉をかけませんでした」

基。「私も最初出かけた時には、あの男に望みをかけましたが、今ではあの市と一緒に滅びるだらうと案じてゐます。『犬が還つて来てその吐き出したものを喰ひ、豕が洗ひ潔められて、又泥の中に臥す』(マテロ後)といふ諺はあの男には誠ですな」

信。「私もあの男のために御同様に案じますが、それだからと言つて、どうしやうも御坐いませんな」

「で、まあ信仰者さん」と基督者が言つた。「あの男のことはこれだけにして、もつと直接に私共の身の上を語りませうや。先づ貴君がお出でになつた路でどんなことにお遇ひでしたか。必然何事にかお遇ひになつた筈です。さもなくば却つて不思議でさ」

信。「私は貴君の落ちなすつたあの沼は免れまして、無事に耳門へ着きました。唯一度淫亂女といふ者に出遇つて、危なく身を汚すところでした」

基。「能くその女の網を免れなさいました。ヨセフもその女にはえらい苦勞をしました。貴君のやうに免れたことは免れましたが、危く生命を失すところでした。で、その女は貴君にどうしましたか」



信「實見なさらねば、御想像の出来ないほど、御世辭が上手でしてな。私にもたれか、つて、どんな御満足でも叶へますからと約束して、無理に私を側路へ連れて行かうとしました」

基「その女の約束といふのは、良心の満足を叶へるといふのではございませんでせう」

信「それは勿論情と肉の満足をさすのです」

基「よく、その女を通れなすつた。『主に憎まるゝ者はその坑に陥いり』(箴言廿二) ますからな」

信「いえ、私が全くその女を通れたか、通れないか、自分では解りません」

基「でも、貴君はその女の言ふ事を聴なかつたでせう」

信「え、身を穢したわけぢやないです。嘗て見た古い書に、「娼婦の歩みは地獄に赴く」(箴言五〇)と書いてあつたのを思ひ出しましたので。だから、私は眼を閉つて、女の姿に迷はされないうやうにしました。女は私を嘲つてゐましたが、私はそこを通り抜けました」

基「その他道中で攻撃に遇ひなさらなかつたですか」

信「困難といふ岡の麓に來た時に、餘程の老人に遇ひましたが、その老人が私の身分や行く先のことを問ねますので。私は旅人で、天の都をさして行くのだと話しました。すると老

人が、「お前は正直者らしい、が、私の所で暮す氣はないか、賃銀はあげるから」と、かう言ふです。で、私は老人の名前と住所を問ねました。老人はそれに答へて、自分は初めの人アダム(コリント前十五〇四五)といふ者で、欺偽といふ町に住んでゐると言ひました。で、私はその仕事といふのは何で、又その與れる賃銀は何ですかと問ねますと、老人はその仕事といふのは多くの快樂で、遂にはその世繼となすことが、その賃銀だと言ひました。私は更に、どんな家に暮してゐるか、又他にどんな僕を使つてゐるかと問ねると、老人はかう言ふです。自分の家には世界の有ゆる美味ものが貯つてある。又その僕といふのは皆な自分が産んだ者だといふ。それではこれほど澤山子供があるのかと問ねると、娘が唯三人で、肉の慾、眼の慾、世の誇といふ名だが、お望みなら、その三人を貴君に嫁に進せようと思ふ言ふのです。それなら何時まで私と一緒に住せるつもりかと問ねると、老人の生てゐる間はいつまでもと言ひました」

基「それで、老人と貴君の間に話はどう落着きましたか」

信「初めの内は、あまり好いことを言ふので、老人と一緒に行かうかしらと思ひましたが、老人と話しながらその額を見るところです。『その行爲と共に古き人を脱ぎ棄つべし』と書いてあるぢやありませんか」



基。「それからどうなすつた？」

信。「その時私の心は焼けるやうに熱くなりましたね。この老人がどんな事を言つても、どんな甘い話をしても、私をその家に連れて行つて、奴隷に賣るのだからと気が付きました。」

「そこで老人に向つて、私は貴君の家の戸の側へは行きませんから、もうお話しするがものはないと言ふと、老人は怒り出して、お前の後へ人を尾けてやつて、路でお前の心を苦しめてやると罵りました。それに願はず、私は振り向いて出かけましたが、そこから出かけやうとする時、恐ろしい力が私を引張つて、身體を半分老人に引奪られるやうに想ひましたので、私は「あゝわれ惱める人なるかな」(ローマ七)と叫びました。そしてかの岡へと登りました。」

「それから其岡を半分ばかり登つて、後を眺めると、風のやうに疾く、私を追ひかけて來る者があるのです。そして休息場のある處で私に追ひ着きましてね。」

「恰度そこです」と基督者が言つた。「私が坐つて休んで、睡りこけて、懐から巻物を落ししましたのは」

信。「まあ、兄弟、お聴き下さい。その男が私に追ひ着くや否や、唯一聲叫んで、叩りまし

た。私は叩り倒されて、死んだやうになりましたが、暫くすると正氣づいて、どうしてそんな辛ひことをしたかと問ねると、その男が、お前は竊に始めの人アダムに心を寄せるからだと云ふのです。さう言ふかと思ふと、又私の胸を激しく叩つたので、私は仰向けにその足許に倒れて前のやうに氣絶したのです。それから正氣づいて、助けてくれと言ひますと、助ける譯にはゆかないと言つて、又私を叩りつけました。それは私の最後であつたに違なかつたのだが、そこへ一個の人が現はれて、その男を禁めて下すつたです。」

基。「その禁めた人は誰ですか」

信。「初めはその人が解りませんでした。が、側を通られる時に見ると、その兩手と横腹に穴があるのです。それでこれは我等の主だと悟りました。そして私は岡を登りました。」

基。「貴君に追ひ着いたのは、モーセでせう。モーセには容赦はないです。その律法を犯す者に慈悲をかけることを知らないです。」

信。「私も能くそれが解りました。モーセに出遇つたのは、それが初めてはなかつたです。私がまだ無事に家に居つた時も、やつて來ましてね、私が其家に留まつて居るなら、家ぐるみ焼いてしまうがどうかと言ひましたです。」



基。「岡の頂上で、モーセにお遇ひになつた横に、家があつたせでう、御覽になりませんか」

信。「えい、見ました。それからその家に来る前に、獅子が二匹おりました。でも獅子は午頃ですから睡てゐるだらうと思ひました。まだ先に行つても日も充分あるやうでしたから、門番の側を通つて、岡を下りました」

基。「實際門番は貴君が側を通られるのを見たと言ひましたよ。でも、あの家をお訪ねになると宜つたですな。一生忘れられないほど澤山珍しい物が見られましたに。それはさうと謙遜の谷で誰にかお遇ひでしたか」

信。「えい、不満足者といふ人に遇ひましたが、頻りに一緒に還るやうにと勧めました。その理由はといふと、この谷は全く仕方のない處だと言ふのです、それに又、この路を行くことは、傲慢者や尊大者や自惚者や榮華者などいふ私の友達に逆らふことになるので、若しこの谷を渡るやうな莫迦な真似をすると、甚だしくその友達を怒らせるだらうと言ひましたです」

基。「それに對してどうお答へでしたか」

信。「その名指れた人達は肉縁よりすれば、私の同族に相違ないが、私がかうして旅に出た以上、その人達は私を見離すし、私の方でも見棄てたのですから、もう縁も故もない間柄ですと言つてやりました。それから又この谷のことは全くお考へ違ひぢやないですか、『名譽の前に謙遜あり』(箴言十五)とも『墮落の前に高ぶれる心あり』(箴言十八)とも言ふではないですか。だから、私は心に好いてこれは値があると思ふ者よりも、最も賢い人達が榮譽と

する方を選んで、此谷を通つて行きますと言つてやりました」

基。「そのほかあの谷で出遇つたものはありませんか」

信。「えい、羞耻者といふ人に遇ひました。この道中で種々な人に遇ひましたが、その男には一番弱りました。他の者なら少し議論するかどうかすれば、否と言ふことが出来ましたが、その厚顔しい羞耻者ばかりは持て餘しました」

基。「して、その男は何と言ひましたか」

信。「何にどころですか。先づ第一に宗教そのものに苦情を言ひましてな。そも／＼宗教に心懸くるのは、人間として憐れむべき下品な卑屈な業だと言ふのです。それから心を優しくするなどは男らしくない事だし、又言と行ひに氣をつけて、放埒な當世氣質に慣された自由



を束縛して、自分の身を縛るやうなことをするのは、當世の笑ひ草になると言ふのです。それから又勢力ある者、富める者、賢い者は誰でも私のやうな説を持ちはしない。先づ莫迦になつて、誰もまだ知らぬ事のために、自ら好んで凡ての持物を失すほどにならない内はそんな考は起さないと言ふのです（ヨハネ七〇四十八、コリント前二〇廿）。そればかりか其の人達の住んだ當時の旅人は重に卑しく下賤な身分と境遇であるし、又無學で凡ての自然科学を理解する力が無かつたと言ふのです。そんな調子で未だ他に種々並べ立てました。説教を聴いて泣いたり悲しんだりするのは耻かしいとか、嘆息をしたり呻いたりして家へ歸るのも耻かしいとか、僅かばかりの過失をして隣人に赦免を乞ふのは耻かしいとか、他人から物を取つてもそれを償なうのは耻かしいとかと言つてました。それから又宗教といふものは大きな人物に尠しばかりの不徳な點があると、それに大業な名をつけて、これを他人扱ひしたり、同じ宗教の兄弟分だといつて、賤しい者に親しんで、これを尊敬するといふやうになるものです。これは耻かしい事ではないですかと言ふのです

基、「して、貴君は何と御言ひでしたか」

信。「言ふ所ですか。初めは何も言ふことが出来なかつたです。その男にあまり説き立てら

れて、血が面に逆上して來ました。その羞耻者に血を逆上させられたので、私は全くそれに敗る所でした。ですがその内に、人の崇ぶ所のは神の前には憎まれる（レカ十六）ものだといふことを思ひ出したです。それから又その羞耻者は人間のことはかり言ふて、神の事や神の言葉は何にも言はないことを悟つたです。そればかりか、審判の日に、生死を定められるのは、世の傲慢な精神に據るのではなくつて、いと高き者の智慧と律法に據ることを悟つたです。だから、私は世の中の凡の人が反對しても、神の言ひたまふ所は最上だ、最上であること悟りました。神は宗教を撰びたまふ。神は柔しい良心を撰びたまふ。天國のため自ら愚なりとする者は最も賢い者としたまふ。基督を愛する貧しい人はこれを憎む世の最も大なる人物よりも富る者としたまふ。私はこれらの事を想つて、羞耻者よ、去れ、お前はわが救の敵だと言つてやつたです。どうして私はわが主なる君に背いてお前を寛待することが出来るか。そんな事をすれば、主の來りたまふ時に、どうして私は顔向が出来るか。私が今主の路を耻ぢ、その僕たることを耻ぢるにせよ、どうして私は祝福を待つことが出来るか（ヨハ八）。まあさう言つたですが、所でその羞耻者はいかにも圖太い奴で、振拂ふと思つても、どうして私を離れないです。私に着き纏つて、仕切なしに私の耳の側で、宗教に伴ふ弱點をあれこ



れと囁くのです。ですが最後に私はいくらそんな事を言つても無駄だらう。彼の軽んずる所は、私の最も譽とする所だからと言つてやりました。そして遂にこの煩ひ男を振り拂つたです。振り拂つた時に、私はいつて歌ひました。

「天の招呼に従ふ者の、

出遇ふ試練さまざまに、

肉の欲によくかなひ、

二度みたび新手もて、

襲へばいつか我等こそ、

ために捕はれ破られん。

さらば旅人、旅人よ、

油断せず、男のごとく振舞へよ」

基。「それは歎ばしい、兄弟、よくも大膽にその悪者を退けなすつた。御言葉のやうに、それは仕方のない奴ですな。圖太くも街中へまで私共に随いて来て、大勢の前で私共を耻かしがらせるやうにします。善い事でも耻かしかるやうにな。あんな鐵面皮の奴でないぞ、あれ

ほどの真似は出来ません。ですが私共は彼に抵抗しませう。圖太いには圖太くつても、馬鹿者を煽動するだけで、他の者には手を出さんさうですから。賢き者は榮光を繼ぎ、愚なる者は耻差これを取り去るべし」(箴言三)とソロモンが言つてますからな

信。「羞耻者に打勝つには、神に叫んで助を求めねばならぬと思ふです。神は私共が此地上にある間、真理のために勇ましきことを望まれませうから」

基。「御尤もです、さてその他誰にかあの谷でお遇ひでしたか」

信。「いえ、遇ひません。私は日のある中に、あの谷の残りも、死の蔭の谷も越えましたので」

基。「それは宜うございました。私は餘程それと趣が變つてゐます。私はあの谷に入るや否や、アポリオンといふ穢はしい悪魔に遇つて、長い間恐ろしい戦をしました。私は實際殺されると思つたです。殊に投げつけられて壓潰された時には片々になるかと思ひました。投られる拍子に、劍は私の手から飛びますしね。おまけに、お前の生命はおれのものだと言はれたですが、私が叫びますと、神は聴いて下さつて、有らゆる困難から救はれました。それから死の蔭の谷に入りましたが、殆んどその半分路は何んにも光がないんです。幾度も自分は



そこで殺されるのだと想ひましたが、遂に夜が明けて、日が登りましたので、それからは氣安く静かに歩きました」

六

それから私が夢の中で見てゐると、二人が進んで行く内に、信仰者が不圖路の向ふ側を眺めると、駭辯者といふ者が尠し離れて自分等と並んで歩いてゐるのを見出した。此處は大勢の者が充分歩けるだけの道幅であつた。彼は丈の高い男で、近くよりも遠くで見た方が優雅かつた。信仰者はこの男に話しかけてかう言つた。

信「やあ、何處へ。天國へお出ですか」

駭「其處へ參るのです」

信「それは結構です。では、御一緒に參りませう」

駭「御一緒に願へば有難いわけです」

信「さあ、それでは御一緒に參りませうか、道々有益なことを話し合つて時を費しますか  
な」



信仰者と駭辯者



駄。「貴君方でも誰とでも善い事を話すのは、私は大好きです。又貴君方のやうな善い事に心掛ける人に遇つたのは嬉しいです。實際のところ、旅に出てさういふ心掛で時間を費す者はあまり有りませんからな。大抵無益らん事を喋舌つてゐる者が多いでさ。そのために私はそんなに迷惑したか知れませんか」

信。「それは實際悲しむべき事ですね。天の神の事を語るほど、人間の舌と口を用ゆる値あることは地上にはありませんですにな」

駄。「貴君の仰やることは確信に充ちてゐるので、そんなに嬉しいか知れませんか。附加して申せば、神の事を話すほど愉快なことも、有益なことはありませんからな。人間は不思議な事に興味を持つならば、實際愉快ですからな。例へば歴史や物の奥義の話したり、あの聖書に楽しく美しく書いてあるやうな奇蹟や不思議や神兆の話をするのが好きなら、どんなに愉快か知れませんか」

信。「それは眞實です。ですが、さういふ話をして楽しむよりは、益を得る方が、私共の重なる目的ではないでせうか」

駄。「私の申す所もそれです。さういふ事を話すのは、大變有益ですし、さうすると多くの



事の知識を得ます。虚しき地上の事や、恩澤ある天の事を知られますからな。さういふ大體のことは兎に角、新たに生れることの必要や、人の仕事の不充分なる事や、基督の義の大切な事などを學ばれますからな。それから悔改めのことや、信することや、祈ることや、耐忍ぶことなどを學べます。それから又福音の大なる約束や慰安がどんなものであるかを悟つて、自分の慰めとすることが出来ます。それから又、偽りの説を拒み、眞理を明かにし、又無學な者を教へることが出来ます。

信。「一々御尤もです。貴君からさういふ事を伺ふのは嬉しいです。」

駄。「しかるに嘆かほしいことには、さういふ話をするのが乏しいのは、限りなき生命を得るために、信仰の肝要なことや、靈魂に恩寵の働きの必要なことの解る者が尠ないからです。譯も解らないで律法の行爲をしてゐても、到底天の國に達することは出来なからです。」

信。「失禮ですが、さういふ天の知識は神の賜物でせう。人間がどんなに骨を折つても、それを獲られないでせう。まして唯その事を話した位では」

駄。「それはさうですとも。人は天より賜ふにあらざれば、何物をも受くること能はず(三〇七)又凡て恩寵に因りて、行爲に因るにあらず(一〇九)」。その他幾らでもこの事を證言す

るために聖書の言葉を引くことが出来ます」

信仰者は言つた。「それでは、何か一つの事を見つけて、これから話さうぢやありませんか」  
 駄。「御望みのことなら何でも。天の事でも地の事でもお話し仕ませう。道徳のことでも、福音のことでも、聖いことでも聖からざることでも、過去の事でも來るべき事でも、外國の事でも國內の事でも、實質のことでも枝葉のことでも、私共の益になる事なら何でもお話し仕ませう」

これを聽いて信仰者は吃驚した。先刻から獨りで歩いてゐた基督者の方に歩み寄つて、ひそ／＼とかう言つた。「何うも豪氣な道連を得ましたよ。必條この人は大變立派な旅人です」

これを聽いて基督者は柔しく笑つて、かう言つた。「あの男に貴君も捕まりましたな。二十枚も舌を持つてゐるんですから、知らない者は欺されます」

信。「では、御存じでしたか」

基。「御存じどころか。あの男が自ら知るよりも、私の方が能くあの男を知つてゐる位です」  
 信。「一體何者ですか」



基。「あの男の名は駄辯者といつて、私共と同じ町の者でさ。貴君が全く御存じないのは不思議です。併し私共の町も廣いですからな」

信。「それは誰の倅ですか。何處に住んでゐたのですか」

基。「あれは口輕者の倅で、口八丁通に住んでゐましたので、口八丁通の駄辯者といへば誰でも知つてゐるです。立派な口は利きますが、可哀な男です」

信。「所がいかに綺麗な男に見えるぢやないですか」

基。「さうです、全くあの男を知らぬ者にはね。外ではいかに立派ですが家では全く醜いんです。あれを綺麗な男だと仰やつたので、私はある書工の作を見た時に、その書を遠くから見るといかに立派でしたが、近くで見るといかに穢なかつたことを思ひ出しました」

信。「それは戯談ではないですか、お笑ひなさる所を見ると」

基。「神かけて戯談ぢやありません。假令笑ひましても、それに私は虚言をいつて人を誣る事はしません。もつと打明けてあの男の事を話させよう。あの男はどんな仲間でも、又どんな雑談の際でも、今貴君に話したやうな事を言ふです。居酒屋に腰を掛けてゐる時でもさうです。飲めば飲むほど、益々さういふ事を口にします。宗教は彼の心情にも、その家にも

その品行にも置き處がないので、皆それを舌の尖に置くのです。だから、宗教は彼には空談の種です」

信。「さうですか。それでは私はあの男に大に欺されたのです」

基。「欺された！さうでせう。諺にも、『彼等は言ふのみにして行なはず(三〇三)』されど神の國は言葉にあるにあらず、力にあればなり(前四〇廿)と言ふてあるでせう。彼は祈禱のことや、悔改のことや、信仰のことや、新に生れることを話しますが、それを語ることだけしか知らないんです。私はその家へ往つたこともありませんし、内でも外でも彼に氣を付けてゐましたがね。私があつた男について申すことは實際です。彼の家には宗教の香もないです。鶏卵の白身に味がないやうに、まるで空虚です。祈りもなければ、罪を悔ゆる徴候もないです。さやう、畜生だつて、彼よりも一層能く神に仕へませう。あの男を知つてゐる者が皆宗教を汚し、誹り、耻かしめるのは皆そのためです。彼の住んでゐる町ではその界限一體に宗教のことを善く言はないのは、あの男のためです。彼を知つてゐる世間の人は、『外では聖人、内では悪魔だ』と言ひますが、彼の家の者も成程さうだと思つてゐます。彼は守銭奴で、悪口で、解らず屋なので、その僕共も彼をどうすれば善いのか、どう話しをして善いのか解らな



いす。彼と何か取引した者は、「あの男と取引するよりも土耳其人とした方が、餘程善い。その方が遙に公平な取引が出来ると言ふです。あの駭辯者は隙さへあれば彼等を踏み付けたり、詐はつたり欺したり、出し抜いたりしました。そればかりか彼は自分の倅をも自分の足跡を踏むやうに育てゝゐまして、若し倅達の中に馬鹿らしく憶病な者（優しい氣立を彼はさういふのです）があるご、馬鹿だの、呆者だのと呼んで、決して自分でもそれを用ゐないし、他人にも薦めないです。私の考ふる所では、彼の日常が惡いために、それだけの人が躓き倒れてゐるか知れないです。神が制して下さらんと、まだどれ位多くの人を滅すか知れません」

信「成程、兄弟、御言葉を信するほかありません。貴君が彼を知つておゐるに成るといふばかりぢやなく、又基督者として、人々の風評をなさるからです。貴君が惡意でそんな事を仰るとは想へません。正に御言葉の通りでせう」

基「私も貴君のやうに何にも彼のことを知りませんでしたら、最初貴君がお考へになつたやうに矢張考へたでせう。又宗教の敵である人達から、さういふ風評を聞いたのなら、唯惡口とも想つたでせう。惡人の口から善人の名と仕事に對して惡口を聽くのは有勝の事ですから

な。ですが、私が今言ひました事や、その他澤山に知つてゐる悪い事で、彼の非道は證明されます。そればかりか善人は彼を嫌つて、兄弟とも友達とも呼びはしません。彼を知る人達の仲では、その名を言ふことすら赤面するほどです」

信「成程、言葉と行爲は別物ですな。これから私も能くその差別に氣をつけませう」

基「それは實際別物ですとも、靈魂と身體のやうに別れてゐます。靈魂のない身體は死骸同様です。言ふだけで行はなければ、これ又死骸同様です。宗教の精髓といふべきものは實際上の方面にあるのです。純粹の宗教即ち「神なる父の前に穢れなく仕ふることは孤兒と寡婦をその患難の中に顧み、自ら守りて世に汚れざること是れなり」です。そんなことはあの駭辯者の想ひも寄らぬことで、彼は聽くことと言ふことで善き基督者になれると想つてゐるほど、自分の靈魂を欺むいてゐるんです。聽くことは種を播くやうなものです。話すことはその結べる實が實際心と生命の裡にあるといふ證據には不十分です。審判の日にはその實に依つて裁かれるといふのは、（ヨハネ十三）私共自身も心得べきことです。その時には「汝は信じたりや」とは問はれないで、「汝は行ひたりや、或は唯口で言ふばかりなりしや」と言はれて、それに依つて裁かれるのです。世の最後は收穫に較べられます。御承知の通り收穫る



者はその實の外なんにも考へないです。私が慫うお話し仕したのは、信仰がなければいかなる物も受け容れられないといふとでなく、あの駄辯者の告白する所が其日になるといかにも價値なきことをお示し仕たのです」

信。「それで思ひ出しますのは、モーセが記した潔い獣のことです (利未記十一章) 潔い獣は蹄が分れて反嚼む類のもので、蹄を分つばかりのものや、反嚼むばかりのものではありません。兎は反嚼むけれども、蹄が分れてゐないので、潔くないです。それはいかにもあの駄辯者に似てゐるではありませんか。彼が反嚼むのは即ち知識を求めることです。その言葉を反嚼むけれど、その蹄は分れてゐません。即ち罪人の路から分れてゐません。兎のやうに、犬や熊の足を持つので、それだから潔くはないです」

基。「貴君のお話して教の誠の意味が能く明らかになりました。私も一つそれに附加しませう。パウロは或る人々、いや口ばかりの人を呼んで、鳴銅や響く鏡鏡の如く(コリント前)と言ひましたね。それを又他の處で説明して、生命なくして響を發するもの(十四〇七)と言つてゐます。生命のない者といふのは、即ち眞正の信仰なく、福音の恩寵にあづからぬものゝことです。それ故假令その話す所の言葉は天使の言葉や聲のやうであつても、生命の子供と一緒

には天國に置かれぬ者共です」

信。「成程。初め私はこの男と連になつたことを悦びましたが、今では困つてゐます。どうして彼を遠ざけたら可いでせう」

基。「私の勸言を聴いて、私の申す通りに仕てごらん下さい。さうしたら、神が彼の心を動かして、それを改めざる限り、氣が咎めて、彼は貴君に隨いて來なくなりませう」

信。「どうしたら可いんですか」

基。「先づ彼の所へ行つて、宗教の力について何にか眞面目な話を仕かけるんですな。さうすれば彼はその談に乗つて來て、宗教の力を讃めませうから、そこで露骨に、それならその力が貴君の心情や家や品行に現はれてゐますかと問ねてやるんです」

そこで信仰者は再び前へ進んで、駄辯者の側へ寄つて、「やあ、失禮しました。どうです、お變りもありませんか」

駄。「えい、有難う。もつと早く御出でになると、澤山お話し出來ましたにな」

信。「さあ、それでは、御心に任せて、これからお話しませう。そこで先づ御言葉に甘へて、お尋ねして見ませう。神の救ひの恩寵が人の心に働きましたら、どんなにそれが現はれ



ませうか」

駄。「では、何んですか。物の力に就てお話しするのですな。成程それは善い御尋ねです、悦んでお答へしませう。先づ手短かに申すと、第一、神の恩寵が心に働くと、罪に對して大いに泣き叫ぶに至りますな。第二に……」

信。「まあ、お待ち下さい。先づその一つの事だけを考へて見ませう。それは寧ろ、靈魂をして罪を嫌ふやうにする所に現はれるといふべきぢやありませんか」

駄。「では、罪に對して泣き叫ぶのと、罪を嫌ふとの間に差別がありますか」

信。「大いに有ります。罪に對して泣き叫ぶことは方便にも出来ません。が、それを嫌ふとは、誠心より憎まなければ出来ません。多くの人が教壇から罪に對して叫ぶのを聞いたですが、所でその心とその家とその品行には案外罪が蔓つてゐるのを見ました。ヨセフの女主人がいかに真摯なやうに大聲を擧げて叫んだですが、それにも係はらず、意では彼と不義をしたと思つてゐたでせう。又ある人が罪に對して泣き叫ぶのは、恰度母親が膝に載せてゐる子供に對して泣き叫んで、やれ、解らずやだの、悪戯娘だの言つた所で、つまりは又抱き上げて接吻するやうなものです」

駄。「貴君は人の舉足を取りなさるのだな」

信。「いえ、そんなことはありません。私は唯物の筋道を正したいのです。さて、その次に心に恩寵の働きが現はれた證據は何ですか」

駄。「福音の奥義に對する大いなる知識です」

信。「いや、その徴候が最初にあるぢやないですか。併し初めでも後でも、それは虚偽です。福音の奥義に對する知識、大いなる知識に達しても、それでも未だ恩寵の働きが靈魂に現はれないことがあります。いかに凡ての知識があつても、數ふるに足らず、神の子供たるのが出来ぬ者もあります(コリント前、十三〇二)。基督は弟子達に向つて、『爾曹皆これ等のことを知れりや』と言はれると、弟子達は『然り』と答へた。さうすると『爾曹これを行はば幸ひなり』と附言された。基督はそれを知る者を幸ひなりとされたのでなく、それを行ふ者を幸ひなりとされたのです。それは行爲の伴はない知識があるからです。僕はその主人の意を知つてゐても、これを行はずです(ルカ十二)。天使の如く知れども、基督者でない者もあります。だから、貴君の仰やるその徴候は眞實ではありません。實際知ること、口先ばかり達者な人を悦ばしませんが、それに反して行ふことは、神の悦びたまふことです。人の心には知識がなくつても善



いといふではありません。知識がなければ心も亦空です。知識といつても二通りあります。一つは單に物の道理を知るに留まる知識と、他の一つは信仰と愛の恩寵に伴なふ知識で、これこそ人の心を動して神の聖旨をなさしむるものです。第一の知識は口先ばかりの人にも用ゐられますが、第二の方がなければ、眞正の基督者は満足しません。「われに智慧を與へたまへ。さらばわれ爾の律法を守らん。全き心をもてこれに従はん」(詩百十九)とも言ふてあります」

駄。「又學足をこるのですな。それでは人の徳は建てられません」

信。「さて、恩寵のこの働が人の心に現はれるに、また他に徴候がありますが、どうぞ御説

明下さい」

駄。「私ももう止めませう。到底話が合ひさうもないから」

信。「貴君がお嫌なら、私の方で致しませうか」

駄。「勝手にしなさい」

信。「靈魂に働く恩寵の働きは、その當人にも側の人にも解るものです」

當人に解るといふのは恚うです。その人が罪を認めることです。殊にその本性の汚れてる

ること、不信仰の罪のため、若し耶穌基督を信することに依つて、神の御手より憐れみを受けなければ確に罪に定められることを認めます(マコ十六)。さういふ事を見るにつけ、感ずるにつけ、罪を悲しみ、耻るやうになります。それから心の裡に現はれる世の救主の姿を見て、生命のために救主に頼ることが絶対に必要なことを見出すのです。飢え渴くが如く云(五〇六)といふ約束のやうに、飢え渴くが如く救主を慕ふに至ります。然る後に救主に對する信仰の厚いと薄いに従つて、彼の歡喜と平和にも厚薄があるし、聖潔を愛するその愛にも、益々主を知らんとするその願望にも、此世に於て主に仕へんとするその願望にも厚薄があります。かやうにその人に現はれるのだが、さてそれを恩寵の働きだと悟る者は極く稀です。それはその心が腐つてゐるので、考へ方が間違つてゐるので、この事を思ひ違へるので、だからこの働きを心に持つ者は、それが恩寵の働きであると確然悟るまで、充分に善く判断せねばなりません。

それが他の人に現はれて見える場合は、一、その人が基督に對する信仰を實驗的に告白すること、二、その告白に應ふやうな生活即ち淨い生活をなすことです。その心も淨く、その家族も淨く(家族あらば)、その品行も淨い生活です。常に深くその罪を嫌ひ、罪のために竊



にその身をも嫌つて、家族の内に罪を絶ち、世間には淨きことを擴めやうとするにあるので、偽善者や駄辯な人のやうに唯口先ばかりでなく、實際に聖言の力によれる信仰と愛に従つてこれを行ふのです。これで恩寵の働きとその現はれとを手短に述べましたが、非難すべきことがあつたら、非難して下さい。若しありませんなら、失禮ですが、第二の間を説明しませう。

駄。「いや、私は今聴くだけで、非難はしません。で、第二の間といふのは」  
 信。「それはかういふことです。貴君は私が今述べましたその初めの部分を経験したとありますが、貴君の生活と品行が同一であると證明が出来ますか。それとも亦、貴君の宗教は言葉と舌の端に留まつて、行為の眞實がないのですか。どうぞこれに就てお答へ下さい。上なる神も眞實なりと言ひ、又貴君の良心に正當と想ひなされるだけの事を言ふて下さい。それは自ら讀むるものが嘉しとせられるのではなくつて、主の讀むる者のみが嘉しとせられるからです。それに又自分は斯くかくの者なりと言つて、その品行も又その隣人もその言葉の偽りであることを證明すれば、大なる悪事ですからな」  
 これを聴いて駄辯者は始めて顔を赧めたが、やがて氣を取直して、慙う答へた。「貴君は今經

験や良心や神のことに話を持つて行かれるが、神に訴へて人の語る所を糾さうとなさるのですな。さういふ談話は想ひも寄らぬことです。又さういふ間に答へたくもありません。貴君は示教者でない限り、私を無理に答へさせることは出来ません。貴君がさうしやうとして、私は貴君を私の裁判官にはしません。それは兎に角どうしてさういふ事を私に問ねるのですか」

信。「貴君が話上手な方と思ひますから、又貴君には空想のほかは何があるのか解りませんから。それに實のところ、貴君は宗教を口端に置く人で、貴君の品行と口に説く所とは全く違つてゐると聴きましたから。世間では、貴君のことを基督者仲間の汚點だと言つてますぞ。貴君の穢らしい品行のために宗教はどれほど損をするか知れないさうです。もう既に貴君の悪い癖に躓いた者もあるし、これから躓かうといふ危険にある者も多いさうです。貴君は宗教も居酒屋も貪慾も不潔も罵詈も虚言も無益な仲間と遊ぶとも混然にしてゐるんでせう。遊女のことを、「女の面汚し」といふ諺がありますが、實に貴君は信者の面汚しです」  
 駄。「そんな人の風評を聴いて、軽々しく判断なさるやうでは、貴君も餘程短氣な根性曲りですな。もう話すにも及ばない、左様なら」



其時基督者は側へ来て、兄弟に言つた。「私が言つた通りでせう。貴君の言葉とあの男の貪慾と合ふわけがないです。あの男は自分の生活を改めるよりも、貴君と道連れを止めたいでせう。だから、私が言つた通り、行つてしまつたのですが、行くが可いです。損をするのはあの男ばかりです。これで私共はあの男から離れる面倒が省けました。いつまでも随て来るつもりでしたらうが、さうされては、私共の面汚しですからな。使徒も「爾曹斯る者より遠ざかるべし」(テモテ前)と言ふてをられますからな」

信。「それでもあの男と勢しても語り合ふことが出来たのは嬉しいです。時にはそれを思ひ出すこともあるでせう。思ひ出さないにしても、露骨に言ふだけのことは言つておいたので、あの男が減びても、私には係りがないです」

基。「貴君が露骨に話されたのは結構でした。當今はそのほど信實に人のために想ふことが稀になつたので、宗教も多くの人の鼻に着くやうになつたのです。口先ばかりの馬鹿者が言葉の上で宗教を弄んで、淺ましい穢れた品行をしながら、信者の中にこのくどい道り込むので、世の物議を醸したり、基督教を傷つけたり、眞面目な人々を悲しませたりするんです。世間の人達が皆貴君のやうにしたなら、宗教がもつと人々の慰めとなるか、聖徒の交りに堪へ

られなくなつて逃げ出すかするでせうに」

そこで信仰者は歌つた。

「駭辯者は初めこそ、誇り顔をばなしたりき。

大膽に物言ひ、又は前にある。

凡てのものを追ひ下さんごしたりけり。

されど忽ち信仰者に心の働き説るれば、

虧けて行きけり、望を過ぎたる月のごと。

心の働き知らざる者は皆かくやあらん」

かうして二人は路で見たところを語りながら進んで行つたので、一人なら退屈な路もいと容易であつた。そして今や荒野に差しかゝつた。

七

さて二人はこの荒野を通り越さうとした時に、信仰者が不圖後を見ると、一人彼等について来る者があつた。見知れる人である。信仰者は兄弟に言つた。「あゝ誰が彼處に來ます」。基



督者も眺めて言つた。「あれこそ懐しい傳道者です」

「あゝ、さうですね。私にも懐しい方だ」と信仰者が言つた。「耳門へ来る路を私に示して下さいつたのも、あの方です」

やがて傳道者は二人の側へ来て、かういつて挨拶した。

傳。「やあ、懐しいですな、お變りもありませんか」

基。「これは、これは、傳道者さま、かうしてお目にかゝりますと、貴君の先日の御親切や、私の永久の幸福のために撓ます御盡力下さつたことを思ひ出します」

性の善い信仰者も言つた。「能く来て下さいました。傳道者さま、貴君と御一緒になつたことは、私共憐れな旅人にはどれほど有難いことですか」

そこで傳道者は言つた。「やあ、御兩人、最後にお別れしてからの御消息はどうです。どんな事にお遇ひでした。どんな振舞をなすつた？」

そこで基督者と信仰者は道中で起つた種々な事や、此所まで来た有様や、出遇つた困難などを詳しく話した。

傳道者は言つた。「それは何により嬉しい、貴君方が試練に遇つたのが嬉しいのぢやない、

その試練に勝利を得なすつたことが嬉しいのです。多くの弱味があるにも拘はらず、今日が日まで此の路を續けて來なすつたのが嬉しいのです。」

「その事をこれほど嬉しく思ふのは、私自身のためで、又貴君方のためです。私は蒔き、貴君方は穫つた。蒔く者も穫る者も共に悦ぶ(コハネ四)日は將に來らんとするので、心を挫いてはいけない。『若し倦むことなくば、適當なる時に穫るべし』(ガラテヤ)です。榮の冠は貴君方の前にある。それは朽ちざるものです。『さらばこれを得んために走るべし』(コリント前七)です。この冠を得ようと思つて出かける者は幾らもある。その人々が餘程行つたと思ふと他の者がやつて來て、それを引奪つてしまふ。『されば持つ所の者を固く保ちて、その冠を人に奪はるゝ勿れ』(黙示三)です。貴君方は未だ惡魔の鉄砲の達く所に居られるのですぞ。それに『罪を争そひ拒いで未だ血を流すに至らず』(ヘブライ)です。それだから神の國を常も眼の前に置いて、見えざる物を能くお信じなさい。又來世のこの外この世の事は一切胸の裡に置かないやうになさい。それから何によりも先づ、貴君方の心情を能く顧りみて、色慾を入れないやうになさい。『心情は凡ての物よりも偽はる者にして至つて惡し』(エペソ九)ですから、鐵石の如く顔を向けなさい。然らば天地の力は貴君方に添ふて來るやうになるのです」



基督者はこの勸言に感謝して、尙ほ前途の爲めになる話をして下さいと言つた。この人は預言者で、自分達の身に起る事や、それを拒いで打克つ方法をも話すことが出来る能く解つてゐたからである。信仰者もこの願に同意したので、傳道者は次のやうに語つた。

傳。一息子達、貴君方は「多くの艱難を経て神の國に至るべきこと」(使徒行十 四〇廿二)と、それから又「邑毎に縲紲と患難なんちを待つ」(使徒行廿 〇廿三)といふ福音の眞理の言葉をお聴きでせう。だから貴君方の長い旅路もなにや彼やの惱みを豫想せねばならないです。もう既にその證言の眞實なることは幾分解つてませうし、これからもつゞそれが解るでせう。貴君方は今この荒野を通り越しなざる所だが、間もなく一つの町が次第に行く先に見えて來ませう。その町で貴君方は敵に圍まれて、殺されるほど苛ひ目に遇ふかも知れない。「貴君方の中何らか、或は兩人とも血を流して證據を立てることになりませう。されど「死に至るまで信實なれ、さらば主は生命の冠を爾に與へん」(黙示二)とありますぞ。そこに斃れる者は非業の死を遂げて、その苦痛も多分大きいでせうが、同伴の者よりも却つて仕合せです。天の都に早く達するばかりか、同伴の者がこれからの旅路で遇ふ多くの困難を免れるからです。兎に角その町へ行けば、私の茲で言ふた所が事實となつて現はれるから、その時には友人である私を思ひ出し

て、男の如く振舞つて、信實なる創造主なる神に靈魂を委せて善く働きなさい」

やがて私が夢の中で見てゐると、二人が荒野を越えたと直ぐ眼の前に町があつた。その町の名は虚榮といつた。この町には虚榮の市といふ市場が開かれた。それは年中開かれた。どうして虚榮の市といふ名を獲たかといふに、その開かれる町がいかに軽く虚榮であるのと、そこで賣られる品物もそこから來る者も皆虚榮で、賢い人の「凡て來るものは空し」(道傳 〇二)といふ言葉の通りであるからである。

この市場は新らしく催げられたのでなく、昔から立つてゐるものである。その由來を茲に示さう。

およそ五千年の昔に、この二人の正直者のやうに、天の都へと旅立つ旅人があつた。所でペルゼベルや、アポリオンや、レギオンやその仲間の者共は、旅人等が天の都へ行くにはこの虚榮の町を通らなければならぬことを見て取つて、茲に市場を開くことを工夫した。即ち有らゆる虚榮の品物を賣る年中休みなき市場である。この市場で賣買する商品は家屋、地所、職業、地位、名譽、昇進、尊稱、邦家、王國、色慾、快樂の類。それから有らゆる娛樂品があつた。即ち娼婦、遊女、妻、夫、子供、主人、僕婢、生命、生血、身體、靈魂、銀、金、



眞珠、寶石その他なんでもあつた。

それから又この市場には、常でも手品、欺騙、競技、勝負事、道化、物真似師、曲者、無頼漢のやうな類があつた。

茲に又無代價で見られるのは、盜賊、人殺、姦淫、罵詈譏、血塗騒動などである。

これほど大きくない他の市場にも、種々な通りや街があつて、適當な名が付いてゐて、どの品はどこで賣られるいふやうに定つてゐる。茲でも同じく此市場の品々がいと容易く求められる適當な場所や通りや街（即ち各州及び各王國）があるのである。英吉利通り、佛蘭西通り、伊太利通り、西班牙通り、獨逸通り等があつて、種々虚榮な品物を賣るのである。それから他の市場でもその市場を代表する或一つの品があるやうに、この市場でも羅馬の品物が大に賞美されてゐる。わが英國の品物などは、他の者と同じく嫌はれてゐる次第である。前にも言つたやうに、天の都への路は恰度この大きな市場のある此町を通じてゐるので、誰でもこの町を通らずに天の都へ行かうとする者は、この世より去らねばならなかつた（五〇十）。君の君なる主も、この町、否、この市場を通じて其の郷國に行かれたのである。この市場の長はベルゼブルであつたと想ふが、その時主を招いてその虚榮物を賣らうとした。

そればかりか、若しも主がこの町を通行する時に、ベルゼブルに平伏して拜まれたならば、彼はこの市場の主君となられたであらう。げに彼は尊い御方なので、ベルゼブルは街から街へと彼に隨つて歩いて、暫時の間に世界の凡ての國々を彼に示して、出来るならば、この祝福の主を感はせて、その虚榮物の二三を安く買はせやうとした。けれども彼はその賣品に目をくれなかつたので、斯る虚榮物のために一錢も費はすに此の町を去られた。かやうに此市場は古くから催けられて、いかにも大きなものである。

さて前にも言つたやうに、二人の旅人は此市場の中を通らなければならなかつた。彼等はそこへ入つて行つた。然るに見よ、二人が市場に入るや否や、市場の人達は舉つて騒ぎ出した。いはゞ町全體は蜂の巢の破れたやうな騒ぎである。それには種々理由がある。

第一、この旅人の着てゐる衣物はこの市場で賣買ひされてゐる衣物とは違つたものであつた。それ故市場の人達はいと珍らしさうに眺めた。阿呆だといふ者もあるし、狂人だといふ者もあるし、外國人だといふ者もあつた。

第二、その衣服を怪しんだと同様に、その言葉をも怪しんだ。誰も二人の言ふことが解らなかつた。二人は自然とカナンの國語を話した。けれどもこの市場の人達は此世の人であ



つた。それ故市場の端から端に至るまで、どれもこれも野蠻人のやうであつた。

第三、二人の旅人が甚だその品物を軽んじたので、商人達は妙なからず笑止がつた。二人はそれを見向きもしないほど頓着しなかつた。賣らうとして呼びかける者があつても、二人は耳に手を當て、「わが眼を外に向けて、虚しき事を見ざらしめたまへ」(詩百十九)と叫んで、天を仰いで、その賣買ひすべきものは天にあることを示した。

折しもこの二人の振舞を見てゐた者が嘲弄半分に、「何をお買ひになりますか」と言つた。二人は眞面目にその人を眺めて、「私共は眞理を買ひます」(箴言廿三)と言つた。そこで二人は益々輕蔑られるやうになつた。嘲ける者もあるし、譏る者もあるし、批難する者もあるし、叩り付けてしまへど怒鳴る者もあつた。遂には事が面倒になつて、市場は上を下への大騒動になつた。間もなく市場の長にこの事が知らされたので、長は急いでやつて来て、最も腹心の部下に言ひ付けて、市場を轉倒すやうな騷擾を起した此二人を吟味させるとにした。そこで二人は吟味のために曳れた。そこに坐つてゐる人達が、お前方は何處から来て、何處へ行くのだ。又どうしてそんな異様な装束をしてゐるのかと問ねた。二人はそれに對して、自分等は世の旅人で、天のエルサレムにある本國に行く所で、町の人にも商賣人にも何んの不都

合もしないのに、かやうに凌辱しめられ、又旅の邪魔をされた。唯一度何にを買ふつもりかと問ねられたので、眞理を買ふつもりと言つた丈けです。かう答へたが、吟味を命ぜられた人達はそれを信じないで、氣まぐれの狂人で、市場を攪亂さうと思つて来たに相違ないと言つた。それ故二人を捕へて、笞打つて、泥塗れにした上に檻の中へ入れて、市場へ洒者にした。二人は暫らくそこに洒されて寄り来る人の玩弄物にされ、惡意と復讐的にされた。市場の長すらこの二人の災難を見て笑つてゐた。けれども二人は忍耐して、嘲弄に報ゆるに嘲弄を以てしないで、却つてこれを祝した。惡口には善言を報ひ、害を爲す者を親切にしてやつた。それ故市場でも幾分物の解つた人達は群衆を押し留めて、この二人に續けさまにした凌辱の卑劣なことを批難し出した。そこで群衆の者はその人達に怒を移して、檻の中に居る二人と同様の惡者だの、その片割だのと言つて、これをも苛い目に遇はせやうとした。かの人達はそれに答へて、かうして見受くるどころ、この二人は静かで眞面目で、人に害を興へるやうな意はなさそうである。この二人を凌辱めるほどなら、この市場で商ひをしてゐる者の中には、檻に入れる所か、頭手架を施しても差支へない者が澤山に居ると言つた。双方種々と口論した末に、(その間二人はいと賢く眞面目に控へてゐた)喧嘩になつて、入り亂れ



て叩り合つた。そこでかの憐れな兩人は、又も吟味役の前に曳れて、重ねて市場を騒がせた罪に定められた。無慈悲にも打れて、「足械手鐵を箱られて、市場をあらこち鎖で曳き廻された。二人の肩を持つたり、心を寄せたりする者があつてはならぬといふので、その見せしめに怖がらすためである。けれども基督者と信仰者は尙も賢く身を慎しんで、いと柔しく忍んで、身にふりかゝる耻と辱しめを受けただので、(數こそ少いが、)市場の種々な人が味方になつた。これが尙ほ反對派の怒を増して、この二人を殺さうとするに至つた。檻や足械では憐れない、市場を騒がせ、人々を惑はした爲めに、殺してしまはうと脅かした。

やがて二人は重ねて沙汰のあるまで、再び檻に押し込められた。二人はそこに入れられて、厳しく足械をされた。

そこで二人は信實なる友である傳道者から聞いたことを再び思ひ出した。その通路と苦痛とが、傳道者の言つた通りであつたことがいよく確かになつた。孰れ一人は最後の患難を受けらるであらうが、それも却つて幸福ならんと互ひに慰め合つた。孰れも自分こそ其の撰びにあづかりたいと窃に願つた。けれども萬物を治めたまふ者の全智なる配慮にまかせて、どうならうとも、その境遇にいと満足して耐え忍んだ。

やがて定められた都合好き時に、二人は法廷に曳れて、罪を宣告されることになつた。その時になつたので、敵の前に呼び出されて、起訴された。判事の名は善嫌者閣下といつた。その起訴状は形こそ稍異なれ、その實質は同一であつた。その内容は憊うである。この者共は商賣の敵にして、又邪魔者なること。この者共は町を騒がせ、分争を起し、最も危険なる説を以て黨派を作り、わが君主の法律を輕んぜること。

信仰者はそれに答へて、自分は唯いと高き處よりも尙ほ高く在す主に逆らふ者に逆らつたのみであると言つた。彼は又言つた。「私自身平和の人でありますから、騒動など起しはいたしません。私共が黨派を作つたやうに言はれますが、それは私共の眞理と罪なきことを見て出来た黨派で、唯悪い方から善い方へ移つたまでのことです。且つ又貴君の仰やる王といふのは、わが主の敵であるベルゼブルのことでありますならば、私は彼とその使臣を蔑視します。」

やがて誰でもその主なる大君のために、法廷の囚人に對して言ふべきことがある者は前に現はれて證しをせよと觸れ渡された。そこで三人の證人が現はれた。即ち猜忌者、迷信者、阿諛者である。三人は問ねられた。「卿等は法廷の囚人を知つてゐますか、又主なる大君のた



めに、此者について何か言ふべきことがありますか」

そこで猜忌者は起立して、かういふ事を述べた。「閣下、私は長らく此者を存じてをりますので、誓つて、この尊い御前で證しをいたします。さて此の者は……」

判「暫らく—先づ誓言をなされよ—」

そこで彼は誓ひをして、かう言つた。「閣下よ、此者は名前こそ尤もらしいですが、私共の國で最も賤しい人間の一人でございまして、君主も人民も法律も習慣も尊敬しませんで、信仰と潔めの道とかいふ不忠不義な思考で凡ての人を籠絡しやうと思つて有ゆる事をいたすのです。殊に私は一度親しく此者から聴きました、基督教とわが虚榮の町の風俗とは正反對で、到底も調和しないと云つてゐました。閣下よ、この者の言ふ事は、凡て私共の讀むべき行爲を批難するばかりか、それを爲せる私共をも批難いたすのであります」

その時判事は彼に言つた。「卿はその他に申し立つることがありますか」

猜「閣下、申したい事は澤山ありますが、法廷を煩はすことになつてはと存じます。併し他の方々の擧げなざる證據だけでは此者を死に處するに不充分でありました場合には、もつと遠慮なく私は申し立てるつもりであります」

かくて猜忌者は席に着かされた。やがて迷信者が呼び入れられて、囚人を指さして、主なる大君のために此者に對して申し立てることがあるかと問ねられた。やがて彼は誓をして、口を開いた。

迷「閣下よ、私は此者と大した知合ではありません、又この上知らうとも思ひません。併しこの者が大變毒々しい奴であることは、先日この町で聊か彼と議論したので、承知してをります。其時彼の言ふ所を聴くと、私共の宗教は無用なもので、そんなものでは決して神を悦ばすことは出来ないと申すのです。閣下よ、彼の言葉を推して行くと、私共の禮拜は無駄で、私共は尙ほ罪にあり、遂には地獄に落ちるといふ事になりますことは、閣下の能く御存知の通りであります。私の申し立てはこれだけでございます」

やがて阿諛者が誓はされて、主なる大君のために法廷にある囚人に對して知れることを申し立てよと命せられた。

阿「閣下、及び紳士諸君、私は長いこと此奴を知つてをります。又彼が語るまじき事を言ふのを聴きました。彼はわが貴きベルゼブル王を罵しり、且つ又名譽ある御朋友の方々なる舊人卿、淫樂卿、贅澤卿、虚名願望卿、わが老齡なる放蕩卿、貪慾君その他の貴族の人達を



いかにも見下げたことを言ひました。それから又彼は凡ての人が自分のやうな意を持つてゐるならば、此等の貴族の唯の一人も此町には存らへさせぬだらうと言ひました。そればかりか、閣下、彼は怖るゝ所もなく、判事であられます貴君を罵りつて、不敬な悪者だと叫びました。その外この町の身分ある方々を誹つたと同様な種々な悪名を閣下に加へました。この阿諛者がこの話をし終へると、判事は法廷の囚人に向つて言葉をかけた。「汝は無頼漢、外道、謀叛人である。聞いたか、この正直な方々が汝の罪跡を數へたことを」

信。「少々申し開きをいたしたいのですが」

判。「これ、これ、汝は生して置くべき奴ではない、即座に殺すべきだが、我が寛大なるを人々に知らすために、暫らく汝、無頼の下郎の言ひ分を聞いてやらう」

信。「第一、猜忌者氏の言はれたことにお答へします。私は唯いかなる規則でも法律でも習慣でも人民でも、神の言葉に逆くものは、全く基督教に反対だと言つた丈で、その他何にも申しません。若し私の言ふ處が間違つてゐたら、その誤謬を説き諭して下さい。貴君方の前で直ぐにも取消します」

「第二に、迷信者氏の御申立に就てお答へしますが、私は唯神を禮拜するには、聖い信仰を

要するといつた丈です。しかもその聖い信仰といふものは神の聖意の聖い默示がなければ有るものではありません。それ故にかに神を禮拜しやうとしても、聖い默示に適はなければ、唯それは人間の信仰で、限りなき生命には何んの役にも立たないものです。

「第三に、阿諛者氏の申された事に就ては、(私が口にしたといふ悪名などは兎に角) この町の王を始めとして、此の仁が擧げられた其の賤族も從臣も、この町やこの國に居るよりも地獄に居る方がもつと應はしいと思ひます。それだけです。主よ私を憐れみたまへ」

そこで判事は(それまで側へ立つて聞いて看視してゐた) 陪審の人々を呼んで、「陪審官諸君、御承知の如く、此者のために此町に大騒動が起りました。諸君は又此の信用ある方々が此者に對して申し立てられた所をお聴きになりましたでせうし、又この者の答と白状をお聴きになつた筈です。されば此者を絞殺すとも、生命を救けるとも、卿等の心次第ですが、一應わが法律を御教示する方が順當と考へます。」

わが大君の臣下なるパロ大王の治世(出埃及)に當り、一つの法令が制定された。それは宗教の違つた者が殖へて、おのれよりも餘り強くならんことを心配して、その生める男の子を河に投げ込めるといふにあつた。又大君の臣下なるネブカドネザル大王の治世(ダニエル)に



制定された法令では、平伏してその黄金の像を禮拜しない者は、燃ゆる爐の中に投げ入れられるといふのであつた。又ダリウスの治世にも又一つの法令が制定された。それは誰でも或る定められた時の間は、王の外いかなる神でも拜んだ者は獅子の穴に投げ入れられるといふのであつた。さて此の謀叛人は思想ばかりか（想ふさへ赦すべからざるに）、言葉と行爲に於て、此等の法律の本旨を犯してをる。故にその罪は決して容赦すべからざるものである。

パロの法令は禍惡を防ぐために、推量で制定されたもので、それに觸れる罪惡はこれまで顯はれたことはなかつたのだが、茲に始めて一つの犯罪が現はれた。第二と第三に對しては、御承知の如く此者はわが宗教に對して逆らふのであります。又その白狀した謀叛についても、死罪に相當するのであります。

やがて陪審官は別室に退いた。その人々は盲人氏、無善氏、惡意氏、好色氏、放慢氏、我儘氏、横柄氏、敵意氏、虚言氏、殘忍氏、光嫌氏、難和解氏などであつた。彼等は互にその意見を述べた後、滿場異議なく判事の前に彼を有罪にすることに決した。先づ第一に陪審長の盲人氏が言つた。「私はこの男が異端であることを明かに認めます」

無善氏は言つた。「斯る奴はこの世から追ひ拂ふべしだ」

惡意氏は言つた。「然り、顔を見るのも嫌だ」

好色氏は言つた。「私にはとてもこの者を忍ぶことは出来ない」

放慢氏は言つた。「私も忍ぶことは出来ん。此の者はいつも私の仕打を咎め立てするものぢやから」

「絞殺すさ、絞殺すさ」と我儘氏が言つた。

「憐れむべき畜生だ」と横柄氏が言つた。

「心がむか／＼して來ます」と敵意氏が言つた。

「彼奴は惡黨だ」と虚言氏が言つた。

「絞殺すだけでは好すぎさ」と殘忍氏が言つた。

手早く片付けてしまひませう」と光嫌氏が言つた。

やがて難和解氏が言つた。「全世界を興れるといつても、彼奴と仲直りはしまし。早く死罪にしたら可いですな」

一同はさうすることにした。そこで信仰者は現に居る所から、もと居つた場所に曳き立てられて、そこで工夫の出来る最も殘酷な死罪を行ふことに宣告された。



そこで人々は彼を曳き出して、法に照して死刑を施した。先づ彼を笞打つて、それから拳で打ち叩いて、それから小刀でその肉を刺し、而して後に石を投げつけ、それから劔を刺し通し、最後に火刑柱で焼き捨てた。これが信仰者の最後であつた。

さて私が見てゐると、群衆の後に、一輛の馬車と一對の馬とが信仰者を待つてゐた。敵人が彼を殺してしまふや否や、馬車に迎へ入れて、喇叭の音につれて、天の都への近道である雲の中を運び去つた。さて基督者の方は暫らく猶豫されて、牢屋に送り返へされて、そこに一時留まつた。けれども萬物を宰ごりたまふ主は人々の憤怒の力をも自分の手に收められたので、基督者は漸くに免れて、その路を進んだ。

彼は歩みながら、慙う歌つた。

「あゝ信仰者よ、主のため信實に、

争へる汝は福なるかな。

信なき者が空しき快樂に耽りつゝ、

地獄の底に泣き叫けぶ時

歌へ、わが友、いざ歌へ。



信仰者の殉教



傳はり朽ちず、汝の名は、

人々汝を殺すとも、

汝こそ今も生きてあり」

八

私が夢で見ていると、基督者は一人ぼっちではなかつた。(基督者と信仰者が市場で迫害された時の言語動作を見てゐた人の中に) 有望者と名の人があつた。彼は自ら進んで基督者に心を寄せ、兄弟の約を結んで、一緒に連れ立ちたいと言つた。かやうに一人は真理の證しのために死に、その灰が蘇生つて基督者の旅の道連れとなつたのである。有望者は又基督者に向つて、市場には心を動かした人々が多いので、程なく跡を慕つて來ますと言つた。

かくて私が見てゐると、二人が市場の外に出ると間もなく、前に行く人に追ひ付いた。それは勝手者といつた。二人は彼に向つて、「貴君は何處の國の方ですか、この路を何處までお出でいすか」と言つた。彼はそれに答へて、自分は御世辭町の者で、天の都へ行くのですと言つたが、その名前は知らせなかつた。



「御世辭町ですか」と基督者が言った。「そこに誰れぞ善ひ人が住んでますか」

「さやう、住んでゐないこともありません」と勝手者が言った。

「どうぞ、貴君のお名前をきかせて下さいませんか」と基督者が言った。

勝。「私は貴君と赤の他人ですし、貴君も私と赤の他人でせう。貴君もこの路をお出でにな

るなら、悦んで道連れになります。さもないければ、獨で行くまでのことです」

「御世辭町のことは」と基督者が言った。「私も聞いたことがあります。豊かな土地ださうで

すな」

勝。「えい、實際さうです、私の同族にも澤山金持があります」

基。「貴君の同族とは、失禮ですが、どんな方達ですか」

勝。「町全體といつても可いですが、殊に御都合卿、其時次第卿、御世辭卿などで、あの町

に最初さういふ名が附いたのも御世辭卿の先祖からです。それから圓滑氏、二心氏、何でも

御坐れ氏がありますし、わが教會の牧師の二枚舌氏は私の母には父側の兄弟です。打ち明け

たところ、私は身分ある紳士となつてゐるのですが、私の曾祖父といふ者は此方を向きなが

ら、彼方に舟をやる船頭でしたので、私もその世渡りで身代の大半を作らへたのです」

基。「貴君には御配偶がありますか」

勝。「えい、私の妻といふのはさる徳のある婦人の娘で、又頗る徳のある女です。實はあの

御機嫌取夫人の娘ですから、家柄も極く尊いし、仕込も善くつて、殿様の御機

嫌も取れるし、百性の御機嫌を取ることも知つてゐます。實のところ私共の宗教は極く四角

張つたものとは尠し違ひますが、それといつて唯小さな二つの點だけです。第一、私共は決

して風や潮に逆つて争ふことはしません。第二に、私共は宗教が銀の上靴を穿いたやうな盛

んな時にだけ、一番熱心です。太陽がきら／＼輝いて、人々が歡んで迎へる時に、その尻馬

に乗つて街の中を歩くのは好いですからな」

其時基督者は尠し離れて同伴なる有望者の側へ寄つて、「思ひ出しましたが、これは多分御

世辭町の勝手者ですぞ。若しさうなら、何處にもこれほど油斷のならぬ道連れはありません

でせう」

有望者は言った。「問ねてごらん下さい。自分の名をいふことを耻かしがりはしますまい」

そこで基督者は再び彼の側へ行つて、「貴君の話を聞いてゐると、世の中に又どない物識り

のやうですが、私の見當が間違はなかつたら、貴君の名を當てゝ見ませうか。御世辭町の勝



手者さんとは貴君のことせう」

勝「それは私の名ぢやないです。實は私と仲の好くない者がつけた綽名です。善人は兎角悪く言はれるものですから、私も甘んじてそれを受けてゐるんです」

基「しかしそんな名をつけられるには、何にか由來があるんでせう」

勝「いや、何んにもないです。そんな名をつけられた由來を強て求むれば、私は何事でも、その時々都合を謀つて、いつも運好く儲けるからせう。儲けるといつたつて、それは私から見れば天の御恵みでさ。それを意地悪く兎や角いふ法はないです」

基「それでは矢張貴君は私が風評に聽いた方ですな。しかし正直な所、その名前は貴君が思つてゐられるよりも、いかにも能く貴君に似合つてゐるではないですか」

勝「貴君までさう思ひなされるなら、これも仕方がありません。しかし御一緒に行かせて下されば、道々善くお世話をいたしませう」

基「私共と一緒にだど、風と潮に逆つて行きなさらねばなりません。それは貴君の説と反對ぢやないですか。即ち宗教が銀の上靴を穿いて全盛の時と同様に、やつれて襤褸を着てゐる時でも、貴君はこれを信せねばなりませんよ。宗教が歓迎されて街々をねり歩く時はばかりか、

足械手械をはめられてゐる時でも、貴君はその味方にならねばなりませんよ」

勝「私の信仰を壓へつけることは御免かうむりませう。それは自由にしていただいて、兎に角御一緒に参りませう」

基「私の述べた事を私共と同様に爲さんなら、一足でも御免です」

そこで勝手者は言つた。「私の舊來の主義は害なくて益あるものですから、私は決して棄てません。御一緒に行けなければ、貴君に追ひ付れなかつた前のやうに、一人で行くまでのことです。悦んで私と道連れになるものが又後から來るでせう」

さて私が夢で見てゐると、基督者と有望者はかの者を棄て、餘程離れて先きに歩いた。二人の中何ちらかは振向いて見ると、三人の者が勝手者の後をついて來た。見よ、三人が側まで來ると、勝手者は腰を卑めて辭儀をすると、三人も亦彼に挨拶した。この人々の名は財實保氏、金好氏、者齋氏といつた。勝手者氏は前からこの人々に知合であつた。小さい時の學校友達で、北國の貪慾郡、儲好といふ市場のある町の擲取先生といふ人の教を受けたのである。この先生は取り方の術を彼等に教へた。即ち奪取り、賺し取り、諂らひ取り、欺し取り、及び宗教の假面を被つて取ることである。この四人は先生の術の奥義に達して、各自藝



を開くことが出来るほどであつた。

前に言へる如く、彼等は互ひに挨拶してから、金好氏は勝手者氏に向ひ、「あの前に行くのは誰ですか」と言つた。基督者と有望者の姿がまだ前に見えたからである。

勝。「あの二人連は遠い國の者で、その流儀で都詣うでをするのでさ」

金。「それなら、私共は善い道連れだのに、どうして待たないですか。あの人達も、私共も、

貴君も皆な都詣うでの道中でせう」

勝。「それはさうですとも、所か前に行くあの人達はいやに頑固で、自分の思考ばかり大切

にして、他人の説なんて丸で莫迦にして、どんなに信心家でも、彼等の言ふことに一から十

まで合せなければ、仲間外れにするといふわけです」

客。「それは善くない、義しきに過ぐるなかれ」(傳道七) といふのはそれです。さういふ人

達の頑固は自分のことは棚にあげて、他人のことをかれこれ責めるといふものです。それで

貴君とはどんなに又どれほど意見が合はなかつたですか」

勝。「あの人達はいかにも片意地で、天氣などは願はずに旅を續けなければならぬと言ひま

したが、私は風と潮を待つ方の説です。それから彼等は神のためにはどんな危険でも思ひ

切つて胃さうといふのですが、私は生命と財産を保つために出来るだけ便宜を計りたいです。

又あの人達は他人がどんなに反對しても、自分の思考を曲げないといふのですが、私はその

時の模様と身の安全の保てるだけ、宗教に従はうといふのです。又あの人達は宗教がやつれ

て襤褸を着て侮られる時でも、これに従はうといふのですが、私は金の上靴でも穿いて、

日の照つた處をやんやと迎へられる時だけ、これに従はうといふのです」

財實保。「さうですとも、勝手者さん。貴君の守るべきところはそこです。私から見れば、

馬鹿といふほかありません。その持てる者を保つ自由を興へられてゐながら、それを失す

といふのは伶俐ぢやないですから、なんでも蛇の如く慧かれでさ」(マタイ十) 日の照る時に

乾草も作るべしですから、蜂をこらんない、冬中は静に引籠つて、愉快に益を受けるこ

とが出来るときだけ羽叩きするでせう。神は時には雨を降らせ、時には日を照しなされるのです。

雨が降る時に出かける馬鹿者があるにせよ、私共は安心して好い日和を待たうちやありません

んか。私はどうかといふと、神の善き祝福を賜はつて身を安らかにすることの出来るやうな

宗教が好きです。神は此世の善きものを私共に下さつたのでせう。さうすれば神のためにそ

れを保つのは理の當然ぢやありませんか。アブラハムもソロモンも宗教で家を富したのでせ